

エレン・チャーチル・センブルの生きた時代と彼女の地理学研究

— 恩師ラッツェル宛て書簡と同窓生通信を手がかりに —

田 中 和 子

<論文の構成>

-
- | | |
|--|---|
| I はじめに | 4. センブル自身の研究の展開
— 1893年から1903年まで —
(1) パナマ運河とアメリカ合衆国
(2) フィールドワーク
(3) 人種観
(4) 進化論的な考え方
(5) センブルの研究の特質 |
| II ラッツェル宛て書簡と同窓生通信の
テキストと日本語訳 | 5. センブルをとりまく人々
(1) 家族
(2) ルイヴィルの人々
(3) ヴァッサー・カレッジの同窓生たち
(4) シカゴからの手紙の書き手 |
| 1. 資料について | 6. 科学の大変革
(1) 進化論の登場
(2) 決定論から非決定論へ |
| 2. 1893年のラッツェル宛て書簡
(1) テキスト
(2) 日本語訳 | 7. シェイラーとセンブルとラッツェル
(1) シェイラーとセンブルのつながり
(2) アメリカ史に対するシェイラーの
見方
(3) シェイラーの人種観
(4) 金ぴか時代の学者たち |
| 3. 1902年および1924～25年の
ヴァッサー・カレッジ同窓生通信
(1) テキスト
(2) 日本語訳 | IV おわりに |
| III センブルの研究とその時代 | Abstract |
| 1. センブルの経歴 | |
| 2. 金ぴか時代のアメリカ合衆国
(1) 運輸・交通のテクノロジー
(2) 高等教育
(3) 高級総合誌
(4) 社会の動乱と科学の変革 | |
| 3. センブルからラッツェルへ
(1) 黒人の生命保険
(2) 黒人問題についての論文
(3) アメリカ人氣質
(4) 自然描写の作家たち
(5) オハイオーエリー運河
(6) 国勢調査報告
(7) ラッツェルにとっての
アメリカ合衆国 | |
-

I はじめに

エレン・チャーチル・センプル (Ellen Churchill Semple) は、アメリカ合衆国の人文地理学研究における近代期の女性地理学者であり、その師フリードリッヒ・ラッツェル (Friedrich Ratzel) の人類地理学の思想と方法論を英語圏に広く紹介する役割を果たしたことで知られている (Sauer 1934; Gelfand 1954; Wanklyn 1961: 32-33)。ただし、ラッツェルの考えを断片的にゆがめて伝えた、あるいは、行き過ぎた環境決定論を唱えたと批判されることが多い。

ラッツェルは19世紀末のドイツ近代地理学の祖とみなされる地理学者の一人であるが、環境決定論や地政学の研究が強調され、否定的な厳しい評価がなされることが多かった。しかしながら、ディキンソン (R. E. Dickinson) の研究 (Dickinson :1969) を契機に、ラッツェルが民族誌や文化伝播の研究の他、人類と大地の関係や生活空間概念、文化景観の意味などを深く追求したことが認められ、積極的な評価もなされるようになった。近年の地理学史研究では、ラッツェル地理学の今日的意義を再評価する傾向が見られる。日本でのラッツェル研究にもそうした動きがある (山野・松本 1983; 田中 1996, 2000)。また、彼の主著の一つである『人類地理学』 (“*Anthropo-Geographie*”) の邦訳 (由比濱 2006) が出版されたことは、ラッツェルへの関心が高なお薄れないことを示している。

これに対し、ラッツェルのアメリカの弟子であるセンプルへの評価の多くは、冒頭に挙げたように、ラッツェルの人類地理学を英語圏に広めたことにとどまり、その地理学研究を改めて吟味されることがほとんどなかった。だが、2007年、センプルの死没75周年を記念して、アメリカ地理学協会の例会で、センプルに関するセッションが開催され、地理と歴史を密接に関連づける視点 (Adams 2007) や日本との関わり (Karan 2007)、センプルの著書 “*Influences of geographic environment*” (1911) に関わる知識の受容と伝達 (Keighren, 2007) などが議論され、新たなアプローチによるセンプル研究の動きが伺える。

本稿では、地理学の勉強を本格的に始めた頃のセンプルに焦点をあて、センプルの生きた時代と彼女の研究の在り方を検討する。19世紀末から20世紀にかけてアメリカ

合衆国の急速な発展のなかで、センプルが一人の女性として、どのような志を持って地理学の研究を生涯の仕事としたか、何が達成でき何ができなかったを探ることによって、近代地理学史の一面に迫りたい。

この検討作業の資料として、センプルが、ラッツェルが教鞭を執っていたライプチヒ大学 (Universität Leipzig) への最初の留学 (1891-1892年) を終えてアメリカに帰国してまもない頃に書かれたラッツェル宛ての書簡、ならびに、卒業後も親しい交流を続けたヴァッサー・カレッジ (Vassar College) の同級生たちへの近況報告 (同窓生通信) の一部を用いる。ラッツェル宛て書簡は、ライプチヒのラッツェルの手元に残されたものである。センプルのラッツェルへの傾倒と信頼からすると、センプルからはきわめて多数の書簡がラッツェルに宛てて書かれたと思われる。全てが残されていない書簡の中で、ラッツェルがまとめて自身の手元に置いていたものであることから、彼自身にとって有益な内容を含んでいたのではないかと推測できる。他方、センプルの側からすると、「これこそ自分が学ぶべき人である」という情熱をもってラッツェルのもとに留学した直後に書いたものであり、彼女の人生の転機に立つ心情が表れている書簡であろう。また、センプルは、終生、ヴァッサー・カレッジで学んだこと、とくに英語教育のすばらしさを賞賛していた。女性が大学教育を受けることが希だった時代に、共に学んで育んだ友情が、センプルにとってかけがえのないものであったことは、想像に難くない。ヴァッサーは、政治・学問・社会・経済などさまざまな分野で活躍するアメリカ女性のパイオニアたちを大勢輩出した伝統ある名門女子大学である。ヴァッサーの同級生たちや先輩・後輩たちを、センプルは人生の折々に意識した筈である。卒業後の同窓生通信をたどることで、センプルの生き方の一面を伺うことができると思われる。

本稿では、まず、資料の全文テキストと日本語訳を掲げる (Ⅱ章)。それらを用いて、センプルの研究とその時代に関して、次の5つの課題に取り組むことにする。(1) センプルの経歴と当時のアメリカ合衆国の様相を概略したうえで (Ⅲ章1節、2節)、(2) ラッツェルとセンプルの相互の関係やその後のセンプルの研究とのつながりを明らかにするとともに、センプル自身の資質や彼女が目指したものが何であったかを探る (Ⅲ章3節、4節)。さらに、(3) そうしたセンプルの資質や生き方に対して、家族やヴ

ヴァッサー・カレッジ同窓生たちと関わりがどのような影響を与えたか、検討する（Ⅲ章5節）。こうした検討を踏まえて、(4)19世紀後半から20世紀初頭における社会と科学という側面から、ラッツェルとセンブルの研究が持っていた意味を検討する（Ⅲ章6節）。最後に、(5)センブルと同じ時代にニューイングランドで活躍した学者で、ラッツェルとよく似た思想の持ち主だったシェイラー（Nathaniel Southgate Shaler）をとりあげ、センブルならびにラッツェルと対照しながら、時代と社会と学者の関係を考察する（Ⅲ章7節）。

これまでの地理学史研究では、ラッツェルからセンブルへの影響だけが述べられてきたが、本研究は、センブルからラッツェルへ向けて提供されたものがどのようなものであったかを示すという意義も有する。さらに、本稿でとりあげるセンブルの手書き書簡などはいずれも未公刊の資料である。これらを提示することで、生き生きとしたセンブル像を探る手がかりとしたい。

Ⅱ ラッツェル宛て書簡と同窓生通信のテキストと日本語訳

1. 資料について

本稿でとりあげる資料は、大別して2種類ある。

ラッツェル宛てのセンブルの書簡は、ライプチヒに所在する地誌学協会（Geographische Zentralbibliothek, Archiv für Geographie, Institut für Länderkunde, Leipzig）に収蔵されているものである。同協会では、フリードリッヒ・ラッツェルの著作原稿、収集した新聞記事、雑誌論文、覚え書き、講義ノート、書簡などの膨大な資料を、ラッツェル文庫（Kasten 141-163の計23ケース）として保管している。このうち、最後のケースKasten 163には107の小ファイルが含まれ、Nr.12からNr.107の96の小ファイルでは、ラッツェルの受け取った書簡が差出人ごとに分類されている。センブルからの3通の書簡は、彼女が同封した他の人たちからの書簡とともに、Nr.93の小ファイルに収められている。なおセンブルの書いた3通のうち1通は、日を改めて追記されたものである。3通とも1893年1月から2月に書かれている。

ヴァッサー・カレッジの同窓生関係資料は、同大学図書館（Archives and Special Collections, Vassar College Library）に収蔵されており、*Class Box 1882*ならびに

*Class Box 1881 & 1882*の中には、卒業時に作成したパンフレットや卒業後二十年の記念誌などの他、クラスメートから他の同級生たちに宛てた近況報告が手書きで写されたノート（同窓生通信）が保管されている。このノートは、比較的長期にわたって続けられたもので、それぞれの報告の書かれた時期も書き手もさまざまである。書き手の近況や体験についての感想だけでなく、別の同級生の近況を知らせたり、お知らせなどの呼びかけもあり、相互の回覧・閲覧を意識したまとめ方になっている。本稿でとりあげるサンプルの同窓生通信は、1902年および1924年から1925年にかけて書かれたものである。

資料は、活字印刷されている1902年の同窓生通信を除き、すべて手書きである。ラッツェル文庫に収められたサンプルの書簡は、Sütterlinschrift（1945年まで用いられたドイツ式筆記体）で書かれている（口絵写真1）。サンプルの手紙に同封された2通の英文書簡や、*Class Box*の同窓生通信（口絵写真2）は、ラテン文字の筆記体で書かれている。これらについて、ラテン文字の活字に直したテキストを掲げる。原資料を判読する際、推測して補った箇所は（ ）で、また、判読不明箇所は空白の□で示す。テキストに関する注は、1), 2)の番号を付し、脚注としている。テキストに続いて、その日本語訳を掲げる。訳注を加えた箇所は、訳文中の当該箇所の右肩に[1]、[2]の番号を付し、脚注で示している。なお、ラッツェル宛て書簡には、アメリカの人名や地名など、ラテン文字の筆記体で書かれた英単語も含まれる。これらはイタリック体で表記している。原資料中、下線が引かれた箇所は、テキストでも同様に表示している。テキストおよび日本語訳には、資料番号と頁を併記している。

以下、順に、ラッツェル宛て書簡のテキストと日本語訳、ヴァッサー・カレッジ同窓生通信のテキストと日本語訳を掲げる。

2. 1893年のラッツェル宛て書簡

(1) テキスト

Kasten 163/93

1 (page 1)

1222 Fourth Avenue,
Louisville, Kentucky.

Januar 2te, 1893

Geehrter Herr Professor:

Ihr Brief von dem 4ten December ist angekommen, auch die Monographie über die politischen Grenzen, und für Beide erhalten Sie bitte meinen besten Dank. Diese Weihnachtstagen sind mir so voll gewesen daß ich noch nicht die Zeit gehabt habe die Monographie zu lesen, aber ich weiß wohl ich werde sie sehr interessant finden, besonders als eine weitere Erklärung Ihrer Vorlesungen des Sommer Semesters.

Hinsichtlich der Negerfrage, habe ich neulich einen sehr

(page 2)

guten Artikel an *Mr. Gage* geschickt, mit der Bitte daß, so bald er damit fertig war, er ihn Ihnen überreichen sollte. Ferner habe ich mich ziemlich genau über die Lebensversicherung des Negers erkundigt. Ich schicke Ihnen hiermit einen Brief von *Mr. Maguire*, *Louisville* Agent der *New York Mutual Life Ins. Co.*, welche vielleicht die bedeutendste in den Ver. Staaten ist. Sie ist auch nicht lokal hier im *Kentucky*, und sollte deshalb keinen Vorurtheil gegen den Neger haben, einen Vorurtheil welcher vielleicht in einer ausschließlich Südstaaten Gesellschaft zu erwarten wären.

2 (page 3)

Ich habe auch mit *Mr. Maguire* gesprochen. Er sagte ganz bestimmt die Gesellschaft wünscht nicht das Leben des Negers zu versichern,

wegen kurzer Lebensdauer und weil der Neger die für Versicherung
nothwendigen Fragen nicht antworten kann; zum Beispiel, kann nicht
in der Regel sagen wer seine Eltern oder Großeltern waren, in
welcher Alter oder an welcher Krankheit sie gestorben sind. Auch von
seinem Familiengeschichte weißt er wenig oder nichts, und in solchen
Fällen nimmt die Gesellschaft das Schlimmste an, und der Neger ist
zurückgewiesen. *Mr. Maguire* sagte daß natürlich diese Thatsache

(page 4) mit Verbesserung der Cultur, Erziehung und sittlicher Entwicklung
des Familienwesens unter den Negern auch verbessern wurde.

Der Brief den *Mr. Maguire* in seinem Breif an mich anführt, kamm
von der Hauptdirection der Gesellschaft in *New York* Stadt, und die
Citation war ein Vorschreiben diesem Agent. *Mr. M* sagte doch die
Gesellschaft hatte schon einen Neger Bischof und ein paar Prediger
heir in *Ky.* versichert. Es läßt sich fragen ob das "*15th Amendment*",
welches er erwähnt, hier anwendbar sei. Ein Rechtsanwalt Freund
von mir denkt gewiß nicht daß es anwendbar ist, da Versicherung
nicht ein öffentlicher Dienst

3 (page 5) 1222 Fourth Avenue,
II Louisville, Kentucky.

ist. Ferner, es ist wahr daß früher in *New York* Staat die
Lebensversicherungsgesellschaften etwa \$5.⁰⁰ mehr per \$1000.⁰⁰ für
Neger als für Weißen verlangt haben, bis die Staatlegislatur ein Gesetz
gamacht hat, daß kein Unterschied in Versicherungskosten zwischen
Negern und Weißen gemacht werden sollte. Solche Gesetzgebung
existiert gewiß nur in *New York*, vielleicht auch in *Mass.*; aber über

diesen Punkt werde ich mich genauer erkundigen. Wenn das Nationalgesetz, also das "15th Amendment", genügend wäre, wäre dieses des Staats überflüssig.

Ich besuchte auch den

(page 6)

Agent der *Washington Life Ins. Co.*, weil ich gehört hatte, bei dieser Gesellschaft läßt ein Neger leichter sein Leben versichern, aber auch bei diesem Agent hörte ich gerade dieselbe Geschichte; Mangel an Kenntniß der Familie und kürzere Lebensdauer. Als Ursache der Letzten, sagte der Herr Agent daß der Neger keinen Begriff der Gesundheitsgesetze hat, und viel an Schwindsucht, Rheumatismus, und besonders Skrophel leidet. [Ein Arzt hat gesagt, daß drei Viertel aller Neger Patienten in dem öffentlichen Krankenhaus in *Louisville* an Skrophel leiden.] Er sagte ferner es fällt Einem nie ein,

4 (page 7)

einen Neger zu suchen um sein Leben zu versichern. "*The Washington Life Ins. Co.*" hatte nur ein paar Schullehrer und den Castellan eines großen öffentlichen Gebäude hier versichert, und im Allgemeinen verweigern die Gesellschaften ganz ruhig die Neger überhaupt anzunehmen, und deshalb ist es ziemlich schwer für einem Neger sein Leben versichern zu lassen. Ein anderer Agent hat mir gesagt; Irgend Etwas, irgend ein Punkt läßt sich leicht finden, auf dessen Grund wir einen Neger zurückweisen können. "*The Washington Ins. Co.*" machen die Kosten dieselbe für Neger wie für Weißen, im Falle eine Untersuchung des Erstens

(page 8)

genügend ist.

Der oben erwähnte Rechtsanwalt, der auch ein ziemlich

bedeutender Nationaloeconomist ist, hat sich sehr tief in dieser Negerfrage interessirt¹⁾ und hat vielleicht Alles gelesen, welches darüber erscheinen ist. Ich habe die Sache mit ihm besprochen, und er erwähnte einen besonders lehrreichen Artikel über die Lebensdauer und Zunahme der Neger in der Zeitschrift "Arena", den er mir für Sie schicken will. Dieser Artikel, seiner Meinung nach, sei der beste von einem Dutzend oder mehr über denselben Gegenstand die er gelesen hatte. Dieser Herr und ein alter Professor, Rector der

5 (page 9)

III

1222 Fourth Avenue,
Louisville, Kentucky.
Louisville Hochschule waren bei mir zum Besuch gestern Abend, und ich wünsche daß Sie das Gespräch hätten hören können: es wäre Ihnen gewiß interessant gewesen. Der Herr Professor betonte einen Punkt; er sagte, hinsichtlich der möglichen Mischung der zwei Rassen hier in Amerika, daß gerade diese teutonische Rasse, aus welcher unser Volk hauptsächlich besteht, im starken Gegensatz allen gallischen und lateinischen Völkern, eine tief gegründete Abneigung gegen Mischung mit niedrigeren Rassen zeigt. Er führte die Thatsache an, daß alle

(page 10)

Mischung zwischen Indianer und Weißen in den V.S. nur in den französischen Colonien stattgefunden hatte, also längs der *Canada* Grenze und hier in der Nähe in *Vincennes, Indiana*, und *Kaskaskia Ill.*, wo die französischen Colonien in 18ten Jahrhundert gegründet waren. Ahnlich die ziemlich häufige Mischung Neger und Franzosen

1) interessiert の誤記か。

in *New Orleans*, *San Domingo*, und von Spaniern und Portugiesen mit den Indianern in Südamerika. Aber zwischen germanischen Stämmen und Negern bilden sich keine Familien, behauptet der Herr Professor. Gerade vor zwei Tagen,

6 (page 11) *tarred and feathered* [die Übersetzung auf Deutsch ist mir unmöglich] die Leute einer Stadt in *Ohio* einen Neger weil er sich mit einer weißen Frau verheirathet hatte.

Seit Juni sind drei Bände des *Census* erschienen und diese werden Sie bald bekommen. Als ich unseren *Congressman Mr. Caruth* besuchte, hatte er Band VIII. zufällig bei sich und diesen gab er mir gleich und ich habe ihn Ihnen schon mit der Post geschickt. Nach zehn Tagen geht *Mr. Caruth* nach *Washington* zurück, und dann wird er mir Bände VI. und VII. senden, also am Ende dieses Monats werden

(page 12) Sie dieselben bekommen. *Mr. Caruth* ist ein sehr guter Freund von meiner Familie und sagt er will irgend Etwas für mich thun. Wenn Sie also was Anderes von der Regierung wünschen, sagen Sie es mir.

Ich schicke Ihnen auch heute drei Artikel; ein von *Cabel*, die Antwort auf denselben von *Grady*, einem sehr bedeutenden Staatsman von *Georgia* der von zwei Jahren gestorben ist, und ein von *Bishop Dudley*. Der Letzte ist aus *Virginia* und ich kenne ihn persönlich intim, und kann sagen daß er ein höchst vernünftiger Mensch ist, auch in socialen Fragen obgleich er Prediger ist.

7 (page 13) 1222 Fourth Avenue,
Louisville, Kentucky.

Die zwei Vice-presidenten der *Louisville and Nashville R. R.* waren

bei uns zu Diner vorgestern Abend und ihnen habe ich Etwas über die Linie des Ohio-Erie Canals gefragt. Sie dachten kaum daß das Plan durchgesetzt werden wurde, und so weit sie die Sache verstanden haben, sollte es nur ein Versuch sein, alten schon existierenden Canälen zu verbinden. Neulich ist nicht viel darüber geschrieben worden, und deshalb haben diese Herren mir gerathen, an den Commissioner of Canals von *Ohio* zu schreiben. Schäter vermag ich hoffentlich Ihnen Etwas genaues darüber zu sagen, nachdem ich von ihm gehört habe.

(page 14) Sie fragen; Welche Bevölkerung des Westens zeigt einen ausgesprochenen Typus? Eigentlich keine im Sinne einer bestimmten Gemeinde in einem bestimmten geographischen Lokal. Wir haben verschiedenen ausgesprochenen Typen im Westen; wie die Cowboys und die Bergwerker, wie diese in *Bret Harte's*²⁾ Novellen beschrieben; aber diese sind in einer Weise Nomaden, gehen immer weiter weslich³⁾ mit dem Vorschieben der Cultur. Es giebt auch die Mormonen, aber auch diese sind nicht so eigenartig wie man denken wurde, und ferner sind sie großen Theils Ausländer, zeigen deshalb nicht die Wirkung einer rein amerikanisch organischen oder unorganischen Umgebung.

8 (page 15) Ferner, wenn sie als kein Typus genannt werden konnten, doch, seit der Gesetzgebung gegen Vielweiberei als solcher verschwinden sie schnell, besonders in den Städten.

Über den Character der westlichen Bevölkerung habe ich mit einem

2) Bret Harte の誤記か。

3) westlich の誤記か。

Freund gesprochen der dem letzten Sommer auf der pacifischen Küste zugebracht hat. Er ist ein sehr gebildeter Mann und beobachtet Alles sehr genau, und er sagte daß gerade diese Thatsache einen tiefen Eindruck auf ihn gemacht hätte, wie einartig die ganze Bevölkerung des Westens war, wie die ganze in einem Zustand der Gährung und Mischung war, besonders wie die Leute nie in dem Ort einheimisch waren wo sie lebten: überall

(page 16)

war beständige Bewegung, Mischung und Hin- und Herreisen.

Ihre andere Fragen werde ich in einem zukünftigen Brief beantworten. Üer viele habe ich schon meine eigene Meinung aber ich möchte die meinigen durch die Meinung anderer Leute, die zum Urtheilen bessere Begabung oder Gelegenheit haben, constatieren oder verbessern. Hoffentlich wird dieser ungeheuer lange Brief Ihnen etwas nutzen.

Mit besten Glückwünschen für das Neujahr an Sie und Ihre Familie, bin ich Ihr ergebene,

Ellen C. Semple

Kasten 163/93

1222 Fourth Avenue,

9 (page 1)

Louisville, Kentucky.

Januar 30. 1893

Gehrter Herr Professor:

Ich habe für Sie Etwas Neues über den Neger im Verhältniß zur Lebensversicherung. Ich wollte sehen wie die Sache sich in den *New England* Staaten hält und schrieb an meinen alten Freund *Ex-Senator Bowers of New Haven*, der immer mit Versicherung zu thun gehabt hat, und einen Theil dessen Briefs ich Ihnen schicke. Ein anderer

Freund hat das Folgende von dem Verwalter der der *John Hancock Mutual Life Insurance* von *Boston* bekommen;

“Diese Gesellschaft und alle anderen Gesellschaften von *New England* nicht nur schreiben

(page 2) es ihren Agenten vor, die Neger um Versicherung nicht anzusuchen, sondern bezahlen dem Agenten keine Commissionsgebühr für einen Neger Client. Dieses zufolge haben die Gesellschaften wirklich keinen Neger Namen auf ihren Büchern, weil das Ansuchen eine große Rolle in Versicherung hier in *Amerika* spielt.

Es gibt ein Gesetz in *Mass.* und anderen *New England* Staaten, welches die Gesellschaften zwingt Neger anzunehmen und um dieselben Kosten wie die Weißen. Die Gesellschaften wünschen die Neger nicht, weil ihre Aussicht für ein langes Leben nur ungefähr 2/3 so groß wie die eines Weißen ist. Die *John Hancock*

10 (page 3) *Mutual Life Ins. Co.* hatte selbst keine statistischen Tabellen, aber die des *Board of Health of Baltimore* [die ich für Sie zu bekommen versuchen werde] beweisen daß die Sterblichkeit der Neger 50 % größer wie die der Weißen ist. In *Baltimore* in Durchschnitt sterben 30 Neger und nur 20 Weißen auf den Tausend.

In jenen Staaten wo es kein Gesetz wie das oben ernannte giebt, bekommt der Neger für dasselbe premium nur 2/3 der Versicherungspolice welche ein Weißer bekommt; z. B. kriegt der Weiße \$1000 und der Neger nur \$667.

Mass. hat ihr Gesetz Juni 14, 1884, und dies war die erste Gesetzgebung hinsichtlich dieser

(page 4) Frage in Neuengland, aber in *Mass.* wie in den anderen Staaten war es nur ein Versuch von Seiten der Politiker sich bei den Negern einzuschmeicheln. Dies ist also die Lage der Sache in Neuengland.

Ferner hat ein alter Freund mir gesagt daß die ganze Rasse der Neger hier in *America*, wie auch die Indianer, von einer furchtbaren Krankheit durchaus gesättigt sei, einer Krankheit, von der Schwindsucht, Skrophel und Rheumatismus nur verschiedene Erscheinungen sind, und deren Ursache in Unsittlichkeit liegt. Diese Thatsache erklärt die ungeheuer große Zahl der Todesfälle unter sehr jungen Neger Kindern, die schon krankhaft geboren sind; sie

11 (page 5) 1222 Fourth Avenue,
Louisville, Kentucky.
erklärt auch die tiefe Abneigung aller Mischung der zwei Rassen seitens der Weißen.

Sie haben auch gefragt; Wird das Wörtchen *grand* in Amerika besonders häufig gebraucht? Ja, auffallend häufig, in den nördlichen so wohl als in den südlichen Staaten. Hier in *Kentucky, Virginia, Louisiana* und anderen mir bekannten Staaten haben wir einen an Eigenschaftswörtern und Superlativen besonders reichen Wortschatz im täglichen Gebrauch, wie alle Südländer, und deshalb wäre es zu erwarten, daß das Wort *grand* häufig gebraucht

(page 6) werden würde, wie auch der Fall ist. Aber auch in den nördlichen Staaten wird es eben so oft gebraucht; ein Freund von mir aus *Brooklyn* denkt es werde noch öfter da als hier gebraucht, obgleich das Sprechen im Allgemeinen im Norden mäßiger ist, weil hier zuweilen dieses Wort mit anderen Wörtern ersetzt wird.

Eine andere Frage war; Sind die Leute des alten Westens in *Ohio etc.* den Neuengländern ähnlicher geworden? In Antwort kann ich sagen; die Leute des alten Westens sind den Leuten des alten Ostens gewiß ähnlicher geworden.

12 (page 7)

Man kann jetzt sagen der Begriff der Ost dehnt sich jetzt bis nach dem *Mississippi* Fluß aus; d.h. der *Miss.* Fluß bildet jetzt die Grenze zwischen Ost und West. Den ausgesprochenen Typus des Westens findet man erst in *Missouri, Kansas, etc.* Gerade der neuenglische Typus ist immer noch Etwas für sich-eigenartig; die Leute da tragen noch den Stämpel ihrer geschichtlichen Herkunft und Entwicklung, und der schweren Klima und Bodensbedingungen. Deshalb konnte man kaum sagen daß die Leute von *Ohio etc.* gerade den Neuengländern ähnlicher geworden sein.

Wir haben jetzt in Amerika

(page 8)

zwei hervorragende Naturschilderer, aber kein von Beiden ist so wundervoll begabt wie *Thoreau* das ward. Sie sind *John Burroughs* (aus *Poughkeepsie, N. Y.*) und *Charles C. Abbot*⁴⁾ (aus *Trenton, N. J.*). Der erste ist vielleicht besser bekannt, hat mehr geschrieben; seine Beschreibungen von Vogelleben sind besonders schön. Viele seiner Artikel sind in der *Century* Zeitschrift zu finden, wenn Sie dieselbe lesen möchten. Der andere, *Abbot*⁵⁾, ist ein etwas jüngerer Schriftsteller, aber vielen Leuten gefällt er besser als *Burroughs*⁶⁾, und er wird jedes Jahr besser bekannt. Er soll wissenschaftlich mehr

4) *Charles C. Abbott* の誤記か。

5) *Abbot* の誤記か。

6) *Burroughs* の誤記か。

accurat als *Burroughs* sein, und er schreibt mehr
13 (page 9) 1222 Fourth Avenue,
Louisville, Kentucky.
als derselbe über die Natur im Allgemeinen. Sie haben die folgenden
Bücher geschrieben;
Burroughs. *Abbott?*
"The Wake Robin." "Recent Rambles."
"Winter Sunshine." "Wasteland Wanderings."
"Birds and Poets." "Upland and Meadow."
"Locusts and Wild Honey." "Outings at Odd Times."
"Fresh Fields." "In Touch with Nature."
"Signs and Seasons."
"Indoor Studies."

Februar⁸⁾ 11, 1893

Ich habe gewartet diesen Brief zu Ende zu bringen bis ich Etwas
bestimmtes von meinem Freinde *Mr. Caruth* über die *Census Reports*
hören sollte. Vor zehn Tagen schickte er mir seinen
(page 10) eigenen neuen Band [?] also Band IX. welcher erst jetzt erschienen
ist. Zur selben Zeit kam ein Brief von ihm und auch ein von *Robert P.*
Porter selbst, welcher sagte die eingebundene Bände VI. und VII. sein
schon alle ausgegeben, aber die *Bulletins* derselben welche noch
vorräthig waren, sollen mir geschickt werden. Diese wurden in irgend
einer Weise verspätet und sind erst diese Woche angekommen. Ich

7) *Abbott* の誤記か。

8) Februar の誤記か。

mache sie gleich auf ihren Weg nach Deutschland. Band VI. und VII. sind also in denselben vertreten, mit der Ausnahme von zwei Bulletins welche fehlen, aber hoffentlich sind diese nicht wichtige.

Mr. Caruth bemüht sich

14 (page 11) immer noch für mich, und vor zehn Minuten habe ich einen Brief von ihm bekommen in dem er sagte zwei neue Bücher sind erschienen, *Report on the Mineral Industries and Report on Manufactures*, welche er mir schicken würde. Diese auch sollen Sie natürlich haben. Wie Sie sehen, es macht mir sehr wenig Mühe irgend etwas von der Regierung zu bekommen, und deshalb müssen Sie Ihre Wünsche in dieser Richtung aussprechen.

In der Hoffnung Ihnen noch nützlich sein zu können, bleib ich Ihre,

Ellen C. Semple

Kasten 163/93

15 (page 1) 1222 Fourth Avenue,
Louisville, Kentucky.

Februar⁹⁾ 19ten, 1893

Geehrter Herr Professor:

Ich schickte Ihnen gestern als Eilgut die Bücher welche ich diese Woche aus Washington von *Mr. Caruth* bekommen habe. Sie waren so groß daß ich sie mit der Post nicht senden durfte. Eins werden Sie, wie ich meine, ungemein lehrreich finden, und ich freue mich sehr es Ihnen überreichen zu können; es ist "*The Report on Minerals*", aber es ist ein sehr großes Buch mit Illustrationen und gefärbten

9) Februarの誤記か。

geologischen Karten versehen.

Ich bediente mich dieser Gelegenheit um drei kleine Schachtel an einen kleinen Freund von mir zu schicken. Er ist nur ein einfaches Bauerkind, das in demselben Etagenhaus wie ich, ganz hoch oben unter dem Dach wohnte; aber wenn ich ihn nicht verkenne, so ist seine Statur eben so hoch wie seine Wohnung. Er ist ein ganz kleiner Kerl, nur acht Jahre alt. Nach Weihnachten hat er an mich geschrieben und gebeten ich solle gebrauchte Briefmarken für ihn sammeln und deshalb enthalten

diese Schachtel mehrere Tausenden davon. Es wird Ihnen hoffentlich keine Unbequemlichkeit machen, dieselben in dem Seminar stehen zu lassen bis der kleine Ernst sie abholt.

Den Schein für das Eilgut schlage ich hiermit ein; auch einen Brief den ich neulich von einer Freundin hinsichtlich der lebenden Naturschilderer in Amerika bekommen habe. Sie ist eine hochgebildete Dame, ist außerordentliche Professorin an einer der größten Frauen Universitäten in Amerika, und interessiert sich für gerade diese Zweig der Literatur. Sie ist deshalb in Stande die Meinung

eines Sachverständiger auszusprechen. Auf ihren Urtheil können Sie sich verlassen.

Darf ich, geehrter Herr Professor, Ihnen eine Frage stellen. Welche Insel westlich von Sud-Amerika haben die Engländer vor ein oder zwei Jahren in Besitz genommen, mit der Absicht sie als "calling

Kasten 163/93

17 (page 1)

station" zu gebrauchen, im Falle der *Panama Canal* durchgeführt werden sollte?

Ich arbeite jetzt ein bisschen über die politische und kommerzielle Bedeutung eines zwischenseeeischen Kanals für unser Mittelländisches Meer.

Mit der Hoffnung daß Sie großen Fortschritt mit Ihren Werk machen, bleib ich Ihre

Ellen C. Semple

Neger

New York Mutual Life Ins.

FRANCIS MAGUIRE, JR

LOUISVILLE, KY

27th December, 1892

Dear Miss Semple:

In reply to your inquiry of this morning, permit me to quote from a letter recently received by me, concerning Negro risks in Life Insurance.

"I do not think the Company has any right to refuse to consider such an application (that of a Negro, 33 years of age), but as the Negro is short-lived. We have always instructed agents not to solicit them. Of course if an applicant comes unsolicited, we must consider him."

The Constitutional Amendment requires us to make no discrimination between a Negro and a white person (other things being equal), and as a consequence, Life Companies are compelled to write Negroes (if at all) at the same rate as would be charged for a white person.

18 (page 2) Fortunately, however, the Statistical tables in the possession of all Life Companies

show that Natural Law interferes with human law, by furnishing the positive proofs that the Negro race is, as a race, less long-lived than the white race. (It may also interest you to know that the longevity of the Karib race exceeds that of other white races by fourteen to twelve and a half per cent).

As a consequence, it is usually found unsafe to write the Negro on any form of life insurance. When they are written, however, they are charged the same rate, as would be charged to a white person having a similar personal and family record.

Trusting that this will give your friend an idea of the actual condition of the Negro in relation to Life Companies.

I am, very sincerely yours,

Francis Maguire Jr.

Kasten 163/93

19 (page 1) *Jhon Burroughs*

ECS

The Beatrice, 57th St., Chicago, Ill.

February 12, 1893

My dear Miss Semple,

To my mind Burroughs* stands easily first among living Americans who have chosen the outdoor world as their literary province. He describes with his eye on the object, and his speech is characterized by a certain beautiful accuracy, simplicity, and directness too rare not to be highly prized when it is found.

(page 2)

I do not know Mr. Abott's work but I have heard it highly commended.

Maurice Thompson has written two charming books, "Sylvan Secrets," and "By-Ways and Bird Notes." "The Tangle-Leaf Paper," "Browsing and Nibbling," "A Fortnight in a Palace of Reeds," "Out-Door Influences in Literature" are some of the chapter headings and they give a fair idea of the trend of his work.

It is interesting to note how much of the close study of nature so characteristic of these latter days has expended itself on

20 (page 3)

birds. Do you know Olive Thorne Miller's sketches? Her "Bird-Ways; in Nesting Time" is said to be delightful. Edith Thomas's work is also growingly good and sympathetic. See her "The Round Year."

Do you know Thomas Wentworth Higginson's "Out-Door Papers"? I do not but I should think they would be interesting.

Charles Dudley Warner's "In the Wildness" is a book that I read over every year - a book that I can never keep in my possession because I am constantly finding someone who doesn't know its delights and who should! It is

(page 4)

one of the rare little books that will stand the list of being read in the very presence of the thing described. Nowhere else in his work - attractive as it all is - do I find his exquisite humor so fine and subtle.

It seems a pity to leave Lowell out - he seems alive yet. His "My Study Window" and some of the Poems, especially "Suthin"¹⁰⁾ in the Pastoral Line, "The Vision of Sir Launfal," and "Under the Willows"

10) Sunthin'の誤記か。

are invaluable.
I am writing in great haste, and no other names occur to my mind at this moment. If I can be of any further assistance I

(2) 日本語訳

Kasten 163/93

1 (page 1)

1222 Fourth Avenue,
Louisville, Kentucky.

1893年1月2日

先生

12月4日付けの先生のお手紙が、政治的境界についての論文^[1]と一緒に届きました。いずれに対しましても、心より御礼申し上げます。ここしばらくのクリスマスの時期、私はとても忙しく、まだこの論文を読む時間がございませんが、あの夏学期の先生の講義^[2]をさらに発展させて解説された論文で、大変興味深いものであることをよく承知しております。

(page 2)

先日、私は、読み終えたらすぐに先生に差し上げて欲しいという

[1] Ratzel, F. (1892): Die politischen Grenzen. *Mitteilungen der Geographischen Gesellschaft für Thüringen zu Jena*, XI, S.69-73.あるいは、Ratzel, F. (1892): Über allgemeine Eigenschaften der geographischen Grenzen und über die politische Grenze. *Berichte über die Verhandlungen der Königlich Sächsischen Gesellschaft der Wissenschaften zu Leipzig, Philologisch-historische Classe*. 44, S.53-104.をさすと推測される。

[2] Buttman, G. (1977): *Friedrich Ratzel: Leben und Werk eines deutschen Geographen 1844 - 1904*, Stuttgart: Wissenschaftliche Verlagsgesellschaftには、ラッツェルの講義一覧が掲載されている。サンプルがライプチヒで学んだ期間（1891年から1892年）の講義は次のとおりである（S.134）。冬学期（1891/92）：Allg. Erdkunde (die Grundzüge d. Biogeographie einschließend) (Mo-Fr 18-19). Geogr. Seminar: Geogr. Übungen in 2 Abt. f. Anfänger u. Fortgeschrittenere (Mo, Do 12-13); Kartograph. Übungen: Assistent Dr. Fischer. 夏学期（1892）：Polit. Geographie m. bes. Berücks. Europa u. d. Kolonien (Mo, Di, Do, Fr 16-17). Die Vereinigten Staaten v. Amerika (Di, Do 11-12). Geogr. Seminar: Geogr. Übungen in 2 Abt. f. Anfänger u. Fortgeschrittenere (原文は Fortgeschritterne) (Mo, Fr 12-13); Kartograph. Übungen: Assistent Dr. Fischer.

お願いを添えて、黒人問題について書かれた、非常に優れた論文^[3]をゲイジ氏^[4]に送りました。さらに、私は、黒人の生命保険について、かなり詳しく問い合わせをいたしました。私は、ルイヴィルでニューヨーク相互生命保険会社^[5]の外務員をしているマクガイア氏からの手紙を先生宛のこの手紙に同封しております。この保険会社は、合衆国でもおそらく抜きんでて規模の大きな会社で、ケンタッキーだけで営業しているローカルな会社ではございません。ですか

[3] センプルが1893年1月2日付けの手紙で言及した *Cabel, Grady, Dudley* 司教の各論文、および黒人の寿命に関する優れた論文以外で、Ratzel (1893): *Die Vereinigten Staaten von Amerika. 2 Band. Politische und Wirtschafts-Geographie*. München: R. Oldenbourg. で引用した黒人問題の論文は、Mayo, A. D. (1890): *The progress of the Negro. The Forum*, Vol.10, pp.335-345. ならびに Walker, F. A. (1891): *The colored race in the United States. The Forum*, Vol.11, pp.501-509. 黒人問題をテーマとするその他の雑誌論文については、表4を参照されたい。センプルは、これらのいずれかをラッツェル宛てに送付した可能性がある。

[4] Frank Wellington Gage をさす。彼は、1892年、ライプチヒ大学に黒人問題に関する博士論文を提出している。この博士論文は、まず、Oswald Schmitt, Leipzig で1892年に出版された後、1970年、Negro Universities Press により再版されている (*The Negro problem in the United States. Its rise, development and solution*. 116p.+ Vita)。Vitaによると、Gage氏は1860年1月8日、Amherst, Minnesota 生まれ。同氏は、1888年6月にUniversity of Wisconsin を卒業後、1889年12月6日に入学許可を得て、ライプチヒ大学に学んだ。同論文の序文の日付は、1892年3月とあり、センプルのライプチヒ留学期間中に提出されたものであることが伺える。

ゲイジが博士論文末尾に挙げているライプチヒ大学の教授たちの中にラッツェルの名前は無いが、末尾の文献一覧中に、Ratzel: *Die Erde*. と記されている (Ratzel, F. (1881): *Die Erde*, Stuttgart: Engelhorn)。また、センプルの手紙の中で言及されている *Cable* も、Cable, Goe. W.: *The Silent South* (Cable, G. W. (1885): *The silent South*, New York: Scribner's sons.) として挙げられている。ゲイジは、黒人問題の解決の鍵は、黒人の倫理教育や職業訓練だと述べている (p.114)。

他方、ラッツェルも、ゲイジの研究協力について謝辞を述べるだけでなく、黒人についての章のなかで、混血人口率や黒人とムラートの能力について、彼の博士論文から引用している (Ratzel (1893): *Die Vereinigten Staaten von Amerika. 2 Band. Politische und Wirtschafts-Geographie*. München: R. Oldenbourg, S. VII, S.292-294)。

[5] Mutual Life Insurance of New York. 1842年4月設立、1843年2月営業開始。所在地はニューヨーク。(1) Hast, A. ed. (1991): *International directory of company histories*, Vol. III. Chicago and London: St. James Press, pp.315-317. (2) Department of the Interior, Census Office (1895): *Vol. 11: Report on insurance business in the United States at the Eleventh Census: 1890. Part II. Life insurance*. Washington, D. C.: Government Printing Office, p. 5. (3) Wilcox, T. (1877): *An exposition of life insurance. Scribner's Monthly*, Vol.13, No.3, p.649.)

2 (page 3)

ら、もっぱら南部諸州の社会で見られるような黒人に対する偏見は持たないはずでございませう。私は、マクガイア氏とお話もいたしました。彼は、きわめてはっきりと、彼の保険会社は黒人と生命保険契約を結ぶことを望んではいないとおっしゃいました。というのは、黒人は寿命が短い^[6]だけでなく、保険契約に必須の質問項目に答えることができないからです。たとえば、両親もしくは祖父母は誰であるか、彼らは何歳でどんな病気で亡くなったか、といった質問に、彼らは答えられないことが多いのです。また、黒人は、自分の家族史についてごくわずかのことしか知らなかったり、あるいは全く知らなかったりなのです。そして、そうした場合、保険会社は最悪の事態を想定し、その黒人は保険申し込みを拒否されることになるのです。マクガイア氏は、黒人たちの間で文化や教育、家族の在り方における道徳の向上といった改善がなされることによって、こうした事態は、将来、むしろより良くなってゆくだらうと話されました。

(page 4)

私に宛てられたマクガイア氏の手紙の中で、彼が言及している手紙というのは、ニューヨーク市にある彼の会社の本部から届いたものでございませう。そして、その引用箇所と申しますのは、外務員への指示でございませう。しかしながら、マクガイア氏は、この保険会社は、当地ケンタッキーでもすでに、黒人の司教1人および説教師2、3人と保険契約を結んでいると話されました。彼の言及した「第15修正」^[7]がこの問題に適用できるかどうか問われることにな

[6] 第11回国勢調査によると、Registration Statesにおける白人と黒人の寿命（死亡時の平均年齢）は次の通りである（Department of the Interior, Census Office (1896): *Vol. 4: Report on vital and social statistics in the United States at the Eleventh Census: 1890: Part I. - Analysis and rate tables.* Washington, D. C.: Government Printing Office, p.42)。なお、Registration Statesに含まれるのは、Connecticut, Delaware, Washington, D. C., Massachusetts, New Hampshire, New Jersey, New York, Rhode Island, Vermontである。

	All ages	15 years and over
White	32.48	52.12
Colored	23.77	45.25

3 (page 5)

II

ります。私の友人である一人の弁護士^[8]は、それが適用できるとはまったく考えておりません。なぜなら、保険というものは、公共サービスではないからです。さらに、州の立法機関が、黒人と白人との間で保険費用を差別すべきでないという法律^[9]を制定するまで、ニューヨーク州では、生命保険会社が、黒人に対して白人に対する

[7] Amendment XV (the Fifteenth Amendment, Ratified 3 February 1870).

Section 1. The right of citizens of the United States to vote shall not be denied or abridged by the United States or by any State on account of race, color, or previous condition of servitude.

Section 2. The Congress shall have power to enforce this article by appropriate legislation.

(Vile, J. R.: *Encyclopedia of constitutional amendments, proposed amendments, and amending issues, 1789-1995*, Vol.1. Santa Barbara, California: ABC-CLIO, p.358.)

[8] Colby, C. C. (1933): Ellen Churchill Semple. *Annals of the Association of American Geographers*, Vol.23, p.231には、ヴァッサー・カレッジ卒業後、ルイヴィルに戻ったセンプルが、幅広い分野の本を読み豊かな知識を持つ二人の弁護士や頭脳明晰なユダヤ教のラビと頻繁に議論を交わし、社会問題への関心を高めていったと書かれている。

[9] 肌の色を理由とする生命保険料の差別を禁じた法律が、マサチューセッツ州では1884年に制定されている (St. 1884, c.235)。この現行の法律は次のとおり (*Massachusetts general laws annotated: under arrangement of the official general laws of Massachusetts*, Vol. 28A, Chapter 175 § 111A to End, 1998. WEST GROUP, pp.173-174) :

§ 122. Discrimination on account of color; penalty

No life company shall make any distinction or discrimination between white persons and colored persons wholly or partly of African descent as to the premiums or rates charged for policies upon the lives of such persons; nor shall any such company demand or require greater premiums from such colored persons than are at that time required by such company from white persons of the same age, sex, general condition of health and prospect of longevity; nor shall any such company make or require any rebate, diminution or discount upon the amount to be paid on such policy in case of the death of such colored person insured, nor insert in the policy any condition, nor make any stipulation whereby such person insured shall bind himself or his heirs, executors, administrators and assigns to accept any amount less than the full value or amount of such policy in case of a claim accruing thereon, by reason of the death of such person insured, other than such as are imposed upon white persons in similar cases; and any such stipulation or condition so made or inserted shall be void.

Any such company which shall refuse the application of any such colored person for insurance upon such person's life shall furnish such person, on his request therefor, with the certificate of a regular examining physician of such company who made the examination, stating that such refusal was not because such applicant is a person of color, but solely upon such grounds of the general health and prospect of longevity of such person as would be applicable to white persons of the same age and sex.

よりも1000.⁰⁰ドルあたり5.⁰⁰ドルほど高い料金を請求しておりましたことは事実でございます。こうした法律がニューヨーク州にあったことは確かですし、おそらくマサチューセッツ州にもあったと思いますが、この点については、私はさらに詳しい問い合わせをするつもりです。もし、合衆国憲法ならびに「第15修正」だけで十分ならば、こうした州の法律は余分なものでございましょう。

(page 6)

私は、ワシントン生命保険会社^[10]の外務員のところも訪問いたしました。といいますのは、わたしは、この保険会社が、一人の黒人

ニューヨーク州でも同様の法律が制定されているが、同法の履歴をたどると最も古い部分は1849年に制定されている (c.308, § 11)。その後、1889年3月に保険料の差別を禁ずる法律がニューヨーク州議会に提出され、同年5月14日に両院で制定された（この法律は、1960年当時のInsurance Law, section 209と同内容。(Josephson, H. D. (1960): *Discrimination: a study of recent developments in American life insurance*. New York: Wesley Perss, pp.9-15.) 現行のこの法律の一部 ((a)~(f)のうち(a)) を以下に掲げる (*McKinney's consolidated laws of New York annotated*, Book 27: Insurance Law §§ 1501 to 3100, 2006. Thomson/WEST, pp.380-381.) :

§ 2606. Discrimination because of race, color, creed, national origin, or disability

(a) Except as provided in section one thousand one hundred eight of this chapter, no individual or entity subject to the supervision of the superintendent shall because of race, color, creed, national origin, or disability:

(1) Make any distinction or discrimination between persons as to the premiums or rates charged for insurance policies or in any other manner whatever.

(2) Demand or require a greater premium from any persons than it requires at that time from others in similar cases.

(3) Make or require any rebate, discrimination or discount upon the amount to be paid or the service to be rendered on any policy.

(4) Insert in the policy any condition, or make any stipulation, whereby the insured binds themselves, or their heirs, executors, administrators or assigns, to accept any sum or service less than the full value or amount of such policy in case of a claim thereon except such conditions and stipulations as are imposed upon others in similar cases; and any such stipulation or condition so made or inserted shall be void.

[10] ワシントン生命保険会社。1860年1月設立、2月より営業開始。所在地はニューヨーク。

(1) Department of the Interior, Census Office (1895): *Vol. 11: Report on insurance business in the United States at the Eleventh Census: 1890. Part II. Life insurance*. Washington, D. C.: Government Printing Office, p. 5. (2) Wilcox, T. (1877): *An exposition of life insurance*. *The Scribner's Monthly*, Vol.13, No.3, p.649.)

4 (page 7)

に、彼の生命を軽んじた形で保険契約を結ばせたことを耳にしたからでございます。けれども、この外務員は、このことについて、その黒人の家族についての情報が不十分であったことや寿命が短いことがその理由だと説明いたしました。後者の原因として、この外務員は、黒人は衛生法について何も理解しておらず、多くの者が結核やリウマチ、とりわけ腺病^[11]に罹っていると申しました。[一人の医者は、ルイヴィルの公立病院の黒人患者全体の3/4は、腺病に罹っていると申ししております。] この外務員は、さらに続けて、生命保険契約を結ぶ黒人を見つけようなどとは、思いもよらないと申しました。「ワシントン生命保険会社」は、当地では、2、3人の学校教師と1人の大規模公共建築物の管理人としか保険契約を結んでおりません。また、多くの生命保険会社は総じて、黒人からの保険申し込みを平気であっさり拒絶するのが通例でございます。ですから、黒人が自身に保険を掛けることは、かなり難しいことなのです。どんなことであれ、どんな点であれ、それを理由に黒人を断るのは簡単なのだと、別の外務員は私に話してくれました。「ワシントン生命保険会社」は、最初の審理で十分とされた場合には、黒人に対する保険料を白人に対する保険料と同額にしております。

(page 8)

上述しました弁護士は、国民経済についてのかかなり著名な研究者でもございますが、こうした黒人問題に深い関心を持ち、おそらくこれについて書かれたものすべてに目を通しておられます。私は、この黒人問題について彼と話し合いました。彼は、『Arena』誌^[12]に掲載された黒人の寿命と増加に関する大変有益な論文^[13]について言及され、先生のために、その論文を私宛に送ってくださることになりました。彼がおっしゃいますには、この論文は、このテーマ、すなわち黒人問題について書かれているもので彼が読んだ1ダースあ

[11] 一般に言われる腺病質は、結核にかかりやすい虚弱体質をさす。医学用語としての scrofulosis は、結核感染に関連したアレルギー反応による症候群をさす。

5 (page 9)

III

るいはそれ以上もの論文の中で、最も優れているとのことでございます。この紳士とルイヴィル高等学校^[14]の校長をされている老教授^[15]とが、昨夕、私のところに訪ねておいでになりました。私は、先生がそのおりの会話をお聞きになられたらどんなに良からうかと

[12] 1889年12月、B. O. Flowerが創刊した月刊誌（挿絵なし）（Boston: The Arena Publishing Company）。1909年廃刊。発行部数は決して多くなかったが、アメリカ思想をリードする人々に読まれる一般の雑誌で、常に人道的でリベラルな論調で、思想の自由を唱える立場をとっていた。主要な記事は、宗教（モルモン教の問題を含む）、社会改革（社会問題、貧困、政治・経済問題、刑務所改善、労働組合）、文学。人種問題、ことにリンチの問題に反対し、黒人の参政権や教育に関する議論を熱心に行った。（(1) Mott, F. L. (1957): *A history of American magazines 1885-1905*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, pp.51-52, pp.401-416. (2) Tebbel, J. and Zuckerman, M. E. (1991): *The magazine in America 1741-1990*. New York: Oxford University Press, p.83.）

[13] Hoffman, F. L. (1892): Vital statistics of the Negro. *The Arena*, Vol.5, No.5, 1892, pp.529-542.をさすと推測される。このFrederick Ludwig Hoffman (2 May 1865 - 23 Feb. 1946)の論文は、Ratzel (1893) *Die Vereinigten Staaten von Amerika. 2 Band. Politische und Wirtschafts-Geographie*. München: R. Oldenbourg, S.273でも引用されている。黒人の死亡率の高さから類推すると、アメリカ・インディアン同様、消滅してゆく民族であるというのが論文の結論である(p.542)。黒人の健康問題・保険問題に関するホフマンの研究については、Nearing, S. (1929): *Black America*, New York: Vanguard Press, p.124 (白井勉三訳(1931)『黒人迫害史ーリンチ物語一』先進社、118-119頁)でも言及されている。ホフマンは、この論文で注目され、統計分析者としてPrudential Life Insurance Companyに入社。彼は後に、Hoffman, F. L. (1914): *The significance of a declining death rate*. Newark: Prudential Insurance Co. of Americaも発表している。（Garraty, J. A. and Carnes, M. C. eds.(1999): *American national biography*, Vol.10, New York: Oxford University Press, pp.940-942）ホフマンは論文中で、下記のような死亡表を挙げている（Table C. --Annual Rate of Mortality per 1,000 of Living Population, by Race (Hoffman 1892, p.533)）：

	WHITE Rate per 1,000	COLORED Rate per 1,000
Birmingham, Ala.,	14.85	26.64
Washington, D. C.,	17.25	32.87
Atlanta, Ga.,	15.71	36.28
New Orleans, La.,	21.27	30.93
Wilmington, N. C.,	13.90	28.50
Charleston, S. C.,	19.05	43.66
Memphis, Tenn.,	19.33	26.15
Richmond, Va.,	19.53	27.81
Average,	17.61	31.60

思いました。この会話は、先生にはきっととても興味深いものだったことと思います。この老教授は、次のことを強調して話されました。すなわち、ここアメリカにおいて存在しうる2つの人種の混血に関して、私どもアメリカ人種の大部分を構成しているチュートン人種^[16]は、ガリア系^[17]ならびにラテン系の全ての人種とは対照的に、より地位の低い人種との混血に根深い反感を抱いていることです。彼は、合衆国内でアメリカ・インディアンと白人の混血が見られるところは、フランス植民地内部やカナダ国境に沿った地域の中だけ

[14] 1856年、ルイビルでは、2つの高等学校が開設された。一つは、少年のための Louisville Male High School (当初の所在地: the corner of Ninth and Chesnut St.)、他の一つは、少女のための Louisville Female High School (当初の所在地: Green St.) であった。Louisville Male High School は、1912年まで学位 (Bachelor's degrees) の授与資格を持った高等教育機関であった。現在の名称は Louisville Male Traditional High School (所在地: 4409 Preston Hwy.) で男女共学となっている。他方、Louisville Female High School (Louisville Girls High School) は、1950年、duPont Manual Training High School (1892年、開設) と統合した。現在の名称は、duPont Manual Magnet High School (所在地: 120 West Lee St.)。(1) McVey, F. L. (1949): *The gates open slowly: a history of education in Kentucky*. Lexington: University of Kentucky Press, pp.258-260, pp.268-269. (2) Lewis, A. F. (1899): *History of higher education in Kentucky*. Washington, D. C.: Government Printing Office, pp.348-349. (3) <http://www.jefferson.k12.ky.us/Schools/High/Male/Information.htm>, 2007年8月8日検索、(4) <http://www.dupontmanual.com/>, 2007年8月8日検索)

[15] 候補の一人は、センプルが手紙を書いた当時(1893年1月3日)の Louisville Male High School の校長 Maurice Kirby(1829-1897、校長としての在任期間は1886 - 1897年)である。姪 Collins, R. A. の追憶記事“Uncle Maurice”によると、彼は法廷や新聞社での仕事を経て教職に就き、Henderson, KYで女学生のための teaching academy を設立、Lexington, KYの State Collegeの教授となった後、Louisville Male High Schoolの校長となった。シーザーなど古代史や生物学から政治経済の分野まで極めて博識で、学生たちにとって魅力的な教育者であったようである (<http://worldconnect.rootsworld.com/cgi-bin/igm.cgi?op=GET&db=garyscottcollins&id=I604908321>, 2007年8月8日検索。)

なお、duPont Manual Training High Schoolの初代校長は、H. F. A. Kleinschmidt (在任期間1892 - 1894年) (<http://www.dupontmanual.com/>, 2007年8月8日検索)。

[16] 狭義には、古代ゲルマン人の一派テウトネス族(Teutones)をさすが、この民族が絶滅した後も、テウトネスは、ゲルマン人の同義語として使用され、その広義の用法が現代も受け継がれている。

[17] ライン川、アルプス、地中海、ピレネー山脈、大西洋に囲まれた地域がガリアと呼ばれ、ここに居住した人々がケルト人である。

であり、当地の付近では、インディアナ州のヴィンセンス^[18]やイリノイ州のカスカスキア^[19]—いずれも、18世紀にフランス植民地が建設されたところですよ—にしかないと、おっしゃいました。同様にかなりよく見られるのは、ニューオリンズやサン・ドミンゴ^[20]での黒人とフランス人の混血や、南アメリカにおけるスペイン人やポルトガル人とアメリカ・インディアンとの混血です。この老教授は、しかしながら、ドイツ諸民族と黒人との間での結婚はないと主張されました。ちょうど二日前、オハイオ州のある町の人々が、白人と結婚したという理由で、一人の黒人にタールと羽の私刑^[21] [これをドイツ語に翻訳することは、私にはとうてい無理でございます]を行いました。

[18] 1731年～1732年に設立されたインディアナで最古の町で、インディアナ州とイリノイ州の境をなすワバシ川 (Wabash River) に臨む (Knox County, Indiana)。それ以前は、この地にフランスの伝道所があった (1702年)。(The encyclopedia Americana international edition, Vol.28, 1986. Danbury, Connecticut: Grolier Incorporated, pp.130-131.)

[19] イリノイ州に所在する村 (Randolph County)。ミシシッピ川流域で白人たちが最初に設立した村の一つ。1703年にフランス伝道所がカスカスキアのアメリカ・インディアンの村に設立されてほどなく、この村は、周辺のフランス植民地の中心地の一つとなった。1818年にはイリノイ州の州都となったが、2年後に州都がヴァンダリアに移ってからは衰退した。(The encyclopedia Americana international edition, Vol.16, 1986. Danbury, Connecticut: Grolier Incorporated, pp.330-331.)

[20] サント・ドミンゴ (Santo Domingo) のことと推測される。カリブ海イスパニオラ島の西半分はもとサント・ドミンゴ島と呼ばれ、新世界では最も古いスペイン植民地として確立されたが、同市の名前はそれに由来する。

[21] 私刑の一種。人の身体一面にタールを塗り、鳥の羽毛で覆う。National Association for the Advancement of Colored People (1919): *Thirty years of lynching in the United States, 1889-1918*. New York: National Association for the Advancement of Colored People, APPENDIX II: Chronological List of Persons Lynched in United States, 1889 to 1918, inclusive, arranged by States, p. 85には、1891年4月10日から1911年6月27日までにオハイオ州で行われた10名に対するリンチ事件が掲載されている。けれども、1892年の年末から1893年初頭にかけてのリンチ事件の記録はない。

Quillin, F. U. (1913): *The color line in Ohio*. Ann Arbor, Michigan: George Wahr, p.106には、オハイオ州における黒人と白人の間の結婚申請が裁判所に拒否された2件の事例 (1850年頃および1910年) が挙げられている。

(page 12)

6月以降、国勢調査^[22]が3巻出版されましたが、先生は、まもなくこれらを受け取られることになりましょう。私が、下院議員のカルース氏^[23]を訪ねたおり、偶然、彼は第Ⅷ巻^[24]を持っておられ、すぐにそれを下さいました。私は、すでにその巻を先生宛てに郵送しております。カルース氏は十日後にワシントンに戻られるので、第Ⅵ巻^[25]と第Ⅶ巻^[26]を私に送って下さるとのことでございます。先生は、これらの巻を今月末には受け取られることでしょう。カルース氏は、私の家族の親しい友人の一人でございます。彼は、私のために何でもしようとおっしゃって下さいました。もし、先生が、政府から何か別の資料をお望みでしたら、どうぞ私におっしゃってください。

あわせて、今日、私は、先生に3つの論文をお送り致します。一

[22] 第11回国勢調査(1890)の報告書のこと。アメリカ合衆国の第1回国勢調査は、1790年に実施されている。

[23] Asher Graham Caruth (7 Feb. 1844 - 25 Nov. 1907). ケンタッキー州から選出の連邦議会下院議員(在任期間は、1887年3月 - 1895年3月)。法律家・弁護士として主にLouisville, KYで活動。(Biographical Information of the United States, <http://bioguide.congress.gov/>, 2007年7月17日検索)。ケンタッキーで法秩序が崩壊し暴力事件の頻発した時代に、彼が1887年頃に発生した事件の一つの調査・処理に関わったことが記録されている(Tapp, H. and Klotter, J. C. (1977): *Kentucky: decades of discord 1865-1900*. Frankfort, Kentucky: The Kentucky Historical Society, pp.387-391.)

[24] Department of the Interior, Census Office (1893): *Vol.8: Report on population and resources of Alaska*. Washington, D. C.: Government Printing Office.この巻の伝達通知の署名は1893年2月9日付けである。従って、実際に印刷製本されたものか、関連する短報(Bulletin)を綴り合わせた応急版の冊子なのか判断し難い。アラスカに関する短報(No. 15, 30, 39, 150)は1890年11月7日から1891年11月28日までに発行されており、1893年初めの段階で綴り合わせすることは可能である。

[25] Department of the Interior, Census Office (1895): *Vol.6: Report on manufacturing industries in the United States, Part I, II, and III*. Washington, D. C.: Government Printing Office. この巻の発行年次は1895年であり、実際に完成版として印刷製本されたものか、関連する短報を綴り合わせた応急版の冊子なのか判断し難い。製造業に関する短報は、No.3(1890年3月1日発行)からNo.351(1893年2月8日発行)まで多数刊行されている。

[26] Department of the Interior, Census Office (1892): *Vol.7: Report on mineral industries in the United States*. Washington, D. C.: Government Printing Office.

つはケーブルの論文^[27]で、もう一つは、これに対するグレイディの返答^[28]です。彼は、ジョージア出身の極めて有力な政治家でしたが、2年前に亡くなりました。3番目は、ダドリー司教による論文^[29]です。この最後の方は、ヴァージニア出身の方で、私は彼を個人的に親しく存じ上げておりますので、説教者ではございますが、社会問題についても極めて的確な判断力を持った方だと申し上げることができます。

7 (page 13)

IV

一昨日の晩、ルイヴィル-ナッシュビル鉄道会社^[30]の二人の副社長が、私どものところに夕食にお見えになりましたので、私は、彼らに、オハイオ-エリー運河^[31]の航路について少し質問してみました

[27] George Washington Cable (12 Oct. 1884 - 31 Jan. 1925). ルイジアナ州ニューオーリンズ生まれの作家。南部の地方色豊かな小説家の一人で、代表作には、*Old Creole Days*, New York: Charles Scribner's Sons, 1879がある。人種問題では南部白人社会を批判したため、南部にとどまらず、1884年以降はマサチューセッツ州に住んだ。黒人問題や社会改革運動に関心が高く、*The silent South*, New York: C. Scribner's sons, 1885や*The Negro question*, New York: C. Scribner's sons, 1890などの著書がある。(1) Butcher, P. (1962): *George W. Cable*. New York: Twayne Publishers. (2) Garraty, J. A. and Carnes, M. C. eds. (1999): *American national biography*, Vol.4. New York: Oxford Univ. Press, pp. 154-156. (3) 朱牟田・長谷川・斎藤編『18-19世紀英米文学ハンドブック』南雲堂、660-662頁。) ゲイジは、*The silent South*をその博士論文で参考文献としてあげている。サンプルがラッツェル宛てに同封した論文は、George W. Cable (1885): *The Freedman's case in equity*. *The Century Magazine*, Vol.29, No.3, pp.409-418.

[28] Henry Woodfin Grady (24 May 1850 - 23 Dec. 1889). ジャーナリストであり、南北戦争後のニュー・サウススポークスマンの役割を果たした。彼のニュー・サウスの理念には、南部への北部資本の投入や人種問題の改善(ただし、南部における白人優位は維持する)などが含まれていた。(1) Nixon, R. B. (1943): *Henry W. Grady: spokesman of the New South*. New York: Russell & Russell. (2) Garraty, J. A. and Carnes, M. C. eds. (1999): *American national biography*, Vol.9. New York: Oxford Univ. Press, pp. 366-367.) サンプルがラッツェル宛てに同封した論文は、Henry W. Grady (1885): *In plain Black and White: a reply to Mr. Cable*. *The Century Magazine*, Vol.29, No.6, pp.909-917.

[29] Thomas Underwood Dudley (26 Sept. 1837 - 1904). ルイヴィル在住のP. E. Bishop (*Who was who in America, vol.1 (1897 - 1942)*). (1968). Chicago: Marquis, P.343.) サンプルがラッツェル宛てに同封した論文は、Dudley, T. U. (1885): *How shall we help the Negro?* *The Century Magazine*, Vol.30, No.2, 1885, p.273-280.

[30] 1850年、ケンタッキー州に設立された。最盛期には総延長距離7千マイルを超え、南への路線はニューオーリンズまで達したが、1982年、廃業した。(Klein, M. (1972): *History of the Louisville & Nashville Railroad*. New York: Macmillan.)

た。彼らは、その運河計画が完遂されるとはほとんど考えておられませんでした。彼らはその事情をととてもよくご存じでした。その計画は、いくつかの古い既存の運河を結びつける試みに過ぎなかつたのでございましょう。そのおりには、その運河について書かれたものがそれほどございませんでしたので、この二人の紳士は、オハイオの運河委員会^[32]宛に手紙を書くよう、私に勧めてくださいました。私が委員会から何か教えていただきましたら、また、先生にその内容について、きちんとしたご意見をお伺いできたらと存じております。

(page 14)

先生は、次のように質問されました。西部地方では、どういった住民が際だった類型を示すのか？ 本当のところ、特定の地方、特定の自治体にいる特別な住民というものは存在いたしません。ブレット・ハート^[33]の小説で描かれておりますように、西部地方には、カウボーイや鉱山労働者^[34]といったさまざまな特徴をもったタイプ

[31] 1825年から1832年にかけて運河建設工事が行われ、1827年から部分運行を開始したが、鉄道の発達とともに急速に衰退し、1861年に運河としての機能を停止した。(Scheiber, H. N. (1969): *Ohio canal era: a case study of government and the economy, 1820 - 1861*. Athens: Ohio University Press.)

[32] 運河計画当初の委員会 (Ohio Canal Commission) は、後に、Ohio Board of Canal Fund Commissioners に引き継がれた。(Scheiber, H. N. (1969): *Ohio canal era: a case study of government and the economy, 1820 - 1861*. Athens: Ohio University Press.)

[33] *Bret Harte* (23 Aug. 1836 - 5 May 1902)。アメリカ合衆国西部の地方色作家の一人とされる。ニューヨーク州に生まれたが、1854年に金鉱発見に沸き立つカリフォルニアに移住し、金鉱集落に暮らす人々を描いた作品を次々に発表した。一時は、マーク・トウェーンやオー・ヘンリーと並ぶ人気があり、代表作は、*The luck of roaring camp and other sketches* (1870)。1871年には、東部を代表する雑誌 *The Atlantic Monthly* と高額の報酬で契約するが、目立った作品は出さずに終わった。((1) Garraty, J. A. and Carnes, M. C. eds. (1999): *American national biography*, Vol.10. New York: Oxford Univ. Press, pp. 248-250. (2) 朱牟田・長谷川・斎藤編『18 - 19世紀英米文学ハンドブック』南雲堂、658-659頁。(3) 岩元・酒本監修(1991)『アメリカ文学作家作品事典』本の友社、487-490頁。)

[34] 西部開拓には、鉱山と牧牛が大きな役割を果たした。西部諸州における金鉱発見はゴールドラッシュ (1849年～) を引き起こしたが、ロッキー山麓の平原が持つ真の重要性が発見されたのは牧牛飼育においてであったともいえる。(アラン・ネビンズおよびヘンリー・S・コメジャー (近藤春男訳) (1981): 『アメリカ合衆国の歴史』近藤春男、306-318頁。)

8 (page 15)

の人々がおります。こうした人々は、ある意味で遊牧民であり、その文化の最前線とともに絶えず西へ西へと進んでおります。他に、モルモン教徒^[35]たちがおりますけれども、彼らは、普通に考えられているほどには特異な特徴を持っているわけではございませんし、彼らの大部分は外国人でございます。したがって、彼らは、有機的あるいは非有機的なアメリカの環境の影響を示しているわけではございません。さらに、彼らを一つの類型として挙げられなくとも、一夫多妻制そのものを禁止する法律^[36]の制定以来、彼らは、ことに都市部で、急速に消滅しつつあるというのが実状でございます。

(page 16)

私は、一人の友人と、西部住民の特性について話したことがございます。この友人は、昨夏、太平洋沿岸で過ごしております。彼は、大変教養のある方で、あらゆることをとても正確に観察されます。彼は、まさに次のような事柄に強い印象を受けたと話されました—西部の住民全体がいかに**独特**であるか、いかに沸き立つような騒乱と混合の状態にあるか、とりわけ、いかに人々が現に暮らしているその土地に根ざしていないか：いたるところに絶え間なく続く運動と混合と、そして行ったり来たりの旅があるとのことでした。

先生のそのほかのご質問に対しては、次のお手紙でお答えすることいたします。たくさんのごことについて、すでにもう、私は自分の考えを抱いております。けれども、私は、より優れた判断能力や

[35] モルモン教は、末日聖徒イエス・キリスト教会 (Church of Jesus Christ of Latter-Day Saints) の通称。1830年にスミス (Joseph Smith (1805 - 1844)) によって創立された。ニューヨークに始まったが、迫害を受けて西に進み、1847年、ユタ州のソルトレークシティに入り、定住した。1890年頃の教徒数は21,773人。(Census Bulletin. No.131. Washington, D. C.: Government Printing Office. October 29, 1891, p.2.)

[36] モルモン教では、当時のアメリカ社会としては、受け入れがたかった共同体生活と多妻結婚 (一夫多妻制など) を認めていた。一夫多妻制が必要とされた背景には、モルモン教徒に女性が多く、辺境の地で未婚女性が独りで暮らすことが極めて困難であったことなどがある。こうしたプロテスタント思想に反する教義と習慣などが地元住民の反感を招いた。その後、1890年、連邦政府の勧めにより一夫多妻制を廃止した。(アラン・ネビンズおよびヘンリー・S・コメジャー (近藤春男訳) (1981): 『アメリカ合衆国の歴史』近藤春男、191-193頁。)

機会を持っておられる他の人々の考えを通じて、私自身の考えを確かめたり、あるいは、より良いものにしたいと思っております。願わくは、このとてつもなく長い手紙が、いくらかでも先生のお役に立ちますように。

先生と先生のご家族に、新年のお慶びを申し上げます。御許に。

エレン・C・センプル

Kasten 163/93

9 (page 1)

1222 Fourth Avenue,
Louisville, Kentucky.

1893年1月30日

先生

先生に、黒人の生命保険事情について、いくつか新しい情報がございます。私は、ニューイングランド諸州では、このことに関してはどうのような状況なのか知りたいと思い、年配の友人である前上院議員のニューヘーヴンのパワーズ氏^[37]に手紙を書きました。彼は保険業に携わってこられた方です。彼の手紙の一部を先生にお送りいたします。もう一人の別の友人は、ボストンのジョン・ハンコック相互生命保険会社^[38]の部長から、次のような説明を受け取りました。

「私どもの会社、ならびにニューイングランドの他の保険会社は、外務員に対し、黒人に保険契約を申請させないよう指示するだけで

(page 2)

[37] Cable B. Bowersと推測される。New Haven Countyから選出された第4区コネチカット州議会上院議員（在任期間は1875年、および1877-78年）。生没年不詳。

(<http://politicalgraveyard.com/bio/bowerman-bowes.htm>, 2007年7月21日検索)。

[38] ジョン・ハンコック相互生命保険会社。1862年設立、1862年12月営業開始。所在地はボストン。(1) Hast, A. ed.(1991): *International directory of company histories*, Vol. III, Chicago and London: St. James Press, pp.265-268. (2) Department of the Interior, Census Office (1895): *Vol. 11: Report on insurance business in the United States at the Eleventh Census: 1890. Part II. Life insurance*. Washington, D. C.: Government Printing Office, p. 3. (3) Wilcox, T. (1877): An exposition of life insurance. *The Scribner's Monthly*, Vol.13, No.3, p.649.)

10 (page 3)

はありません。私どもは外務員に対し、黒人顧客に関して手数料を支払っておりません。この結果、保険会社の顧客名簿には、黒人の氏名が一人も掲載されておりません。というのは、アメリカでは、保険契約の際、申請が大きな役割を果たしているからです。

マサチューセッツ州ならびにニューイングランドの他の州には、一つの法律があって、保険会社は、白人に対するのと同額の保険料で黒人と契約を結ぶことを義務づけられております^[39]。保険会社は、黒人との契約を望んではおりません。なぜなら、黒人の予想寿命は、白人のそれのおよそ2/3だからです^[40]。ジョン・ハンコック相互生命保険会社そのものは、統計表を持っておりませんが、ボルティモア衛生局の統計表 [私は、先生のためにこの統計表をなんとか手に入れようと思っております] は、黒人の死亡数が白人の死亡数よりも50%上回っていることを示しております。ボルティモアでは、平均して、人口千人あたり、黒人の死亡数30人に対し、白人はわずかに20人です^[41]。

先に書きましたような法律のない州では、白人が受け取るのと同じ保険証書で、黒人は2/3の保険金しか受領することができません。たとえば、白人の1000ドルに対し、黒人が受け取るのはたった667ドルです。

[39] 前掲[9]

[40] 前掲[6]

[41] Department of the Interior, Census Office (1893): *Vital statistics of the District of Columbia and Baltimore covering a period of six years ending May 31, 1890*. Washington, D. C.: Government Printing Office, p.56の統計では、ボルティモアの人口千人当たりの死亡率は下記のとおり：

	Total		Under 5 years	
	White	Colored	White	Colored
Death Rate	20.41	32.60	73.94	163.41

また、Nearing, S. (1929): *Black America*. New York: Vanguard Press, pp.124-125 (白井勉三訳 (1931)『黒人迫害史—リンチ物語—』先進社、119-120頁)によると、「1925年のバルチモア市白人死亡率は人口千に付12.84であったが、同年の黒人死亡率は千に付24.88であった」。

(page 4)

マサチューセッツ州でこの法律が制定されたのは、1884年6月14日のことでした^[42]が、これはニューイングランドでは、この問題に関する初めての法律でした。けれども、他の州同様、マサチューセッツにおいては、これは、政治家の側から黒人に取り入ろうとする試みにすぎませんでした。ニューイングランドの事情も同じでございます。

11 (page 5)

さらに、一人の年輩の友人が私に次のように話してくれました：
アメリカにいる全ての黒人人種の間には、アメリカ・インディアン同様、恐ろしい病気が広まっている。さまざまな症状は、結核や腺病、リウマチの症状である。また、その原因は、不道徳にある。この事実は、なぜ、すでに罹患した状態で生まれてくる黒人乳幼児の死亡例が非常に多いかを説明しているし、また、なぜ、2つの人種のあらゆるタイプの混血を白人が嫌悪するかについても説明している。

(page 6)

先生は、次のような質問もなさっておられます。アメリカでは、grandという言葉がとりわけ頻繁に用いられているのだろうか？ええ、北部の諸州でも、南部の諸州でも、その言葉は際だって頻繁に使われております。ここケンタッキーやヴァージニア、ルイジアナ、また、他にも私が知っております諸州には、南部地方全体と同様、形容詞や最上級に関しては、日常的に使用される豊富な語彙がございますから、grandという言葉がとくに頻繁に用いられると予想できますでしょうか。他でも事情は同じでございます。けれども、北部の諸州でも、このgrandという言葉は、南部の諸州と同じくらい頻繁に使われております。ブルックリン出身の私の友人の一人は、北部では、話し方はより中庸で節度あるものであるにもかかわらず、当地ケンタッキーよりも、grandが頻繁に用いられていると考えて

[42] 前掲[9]

12 (page 7) おります。というのは、当地では、時には、この *grand* の代わりに他の言葉が使われることもあるからでございます。

先生のもう一つ別のご質問は、オハイオ州などかつての西部の人々は、ニューイングランドの人々に似てきたらうか、というものでございました。そのお答えとして、私は、かつての西部の人々はかつての東部の人々に確かに似てきたと申し上げることができます。今や、東部の概念は、ミシシッピ川まで広がったと申せましょう：つまり、現在は、ミシシッピ川が西部と東部の境界となっております。先に書きました西部の人々のさまざまな類型を、ミズーリ州やカンサス州などでようやく見いだすことになるのです。ただ、ニューイングランド的な類型というのは、依然としてやや独特のものでございます：人々は、彼らの歴史的由来と発展のさまざまな特徴や厳しい気候と土地条件の名残を今なお身につけております。それゆえ、オハイオなどの人々が、ニューイングランドの人々と完全に同じになったと申し上げることはできません。

(page 8) 現在、アメリカには二人の卓越した自然描写の作家がおりますけれども、いずれも、ソロー^[43]ほどの才能には恵まれておりません。この二人と申しますのは、ジョン・バロウズ^[44]（ニューヨーク州ポケプシー出身）とチャールズ・C・アボット^[45]（ニュージャージー

[43] Henry David Thoreau (12 July 1817 - 6 May 1862). マサチューセッツ州コンコード生まれ。1845年から47年、コンコード近くのウォールデン池畔に丸太小屋を建てて住む。この暮らしをもとに *Walden: or life in the woods* (1854) を執筆した。生活の本質的な事実だけに向き合い、広大で巨大で非人間的な自然と対峙することを重んじた。*Walden* (1854) は、人間と自然の共生関係をめざす新しい自然観や鋭い文明批評を含み、その後の自然描写文学の原型とも評されている。(1) スコット・スロヴィック・野田研一編著(1996)『アメリカ文学の〈自然〉を読む：ネイチャーライティングの世界へ』ミネルヴァ書房、199-215頁。(2) Garraty, J. A. and Carnes, M. C. eds. (1999): *American national biography*, Vol.21. New York: Oxford Univ. Press, pp. 599-603. (3) 岩元・酒本監修(1991)『アメリカ文学作家作品事典』本の友社、364-368頁。)

[44] John Burroughs (3 Apr. 1837 - 29 Mar. 1921) は、ニューヨーク生まれのナチュラリストであり、非常に人気を博したエッセイスト。(Garraty, J. A. and Carnes, M. C. eds. (1999): *American national biography*, Vol.4. New York: Oxford Univ. Press, pp. 49-51.)

州トレントン出身)でございます。最初に挙げた方の方がおそらくよく知られており、より多くの著作があります。彼が小鳥の生活について書いた作品は、ことに美しいものでございます。もし、先生がお読みになりたいと思われましたら、彼についての多くの記事が *Century* 誌^[46]に掲載されております。もう一人のアボットはいくらか年下の作家ですけれど、バロウズよりもこちらを好む人々は多くおり、年々、より広く知られるようになっております。彼の方が、学術的には、バロウズよりも精密ですし、一般に自然についてより多く記述しております。彼らは次のような本を書いております。

バロウズ

"*The Wake Robin.*"^[47]

"*Winter Sunshine.*"^[49]

"*Birds and Poets.*"^[51]

"*Locusts and Wild Honey.*"^[53]

アボット

"*Recent Rambles.*"^[48]

"*Wasteland Wanderings.*"^[50]

"*Upland and Meadow.*"^[52]

"*Outings at Odd Times.*"^[54]

[45] Charles Conrad Abbott (4 June 1843 - 27 July 1919)は、ニュージャージー生まれのナチュラリストであり、考古学者。考古学研究所の著書には、*Primitive industry; or illustrations of the handiwork, in stone, bone and clay, of the native races of the Northern Atlantic Seaboard* (1881)がある。エッセイの中には、彼自身によるスケッチが挿絵として用いられているものもある。(Garraty, J. A. and Carnes, M. C. eds. (1999): *American national biography*, Vol.1. New York: Oxford Univ. Press, pp. 18-19.)

[46] 月刊誌 (New York: The Century Co.)。 *Scrivner's monthly: an illustrated magazine for the people* (1870-1881) (New York: Scribner & Co.)から、新シリーズ *Century: illustrated monthly magazine* (1881-1925)に改題。さらに、*The Century monthly magazine*に誌名を変更し、1930年に廃刊。当時のアメリカ合衆国における代表的な高級総合誌 (イラスト付き)であり、富裕で教養の高い上流層が読者であった。南北戦争やリンカーンを回顧する特集・シリーズ記事や美しい木版画で知られた。(Mott, F. L. (1957): *A history of American magazines 1885-1905*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, p.43.) 一方で、社会改革や住宅改善を熱心に唱える記事をよく掲載していた。(Tebbel, J. and Zuckerman, M. E. (1991): *The magazine in America 1741-1990*. New York: Oxford University Press, p.83.)

[47] Burroughs, J. (1871): *Wake-robins*. New York: Hurd and Houghton.

[48] Abbott, C. C. (1892): *Recent rambles; or, in the touch with nature*. Philadelphia: J. B. Lippincott.

[49] Burroughs, J. (1876): *Winter sunshine*. New York: Hurd and Houghton.

[50] Abbott, C. C. (1887): *Waste-land wanderings*. New York: Harper & brothers.

“*Fresh Fields.*”^[55]

“*In Touch with Nature.*”^[56]

“*Signs and Seasons.*”^[57]

“*Indoor Studies.*”^[58]

1893年2月11日

(page 10)

私の友人カールス氏から、国勢調査報告について知らせを受け取るまで、この手紙を書き終えるのを待っておりました。十日前に、彼は、私に、ご自身が持つておられる新しい巻 と一緒に今回初めて出版された第Ⅸ巻^[59]も送って下さいました。同時に、彼からの手紙とロバート・P・ポーター氏^[60]からの手紙が届きました。ポーター氏は、装丁された第Ⅵ巻^[61]と第Ⅶ巻^[62]はすでに発行されているが、まだ両巻とも在庫があるので、私宛に送りましょうとおっしゃって下さいました。これらの巻は、何かの理由で遅れ、今週ようやく届きました。私はすぐに、全部、先生にお送りします。第Ⅵ

[51] Burroughs, J. (1877): *Birds and poets with other papers*. New York: Hurd and Houghton; Cambridge: Riverside Press.

[52] Abbott, C. C. (1886): *Upland and meadow: a poetquissings chronicle*. New York: Harper & brothers.

[53] Burroughs, J. (1879): *Locusts and wild honey*. Boston: Houghton, Osgood and Co.

[54] Abbott, C. C. (1890): *Outings at odd times*. New York: D. Appleton and Co.

[55] Burroughs, J. (1885): *Fresh fields*. New York: Houghton, Mifflin and Co.

[56] Abbott, C. C. (1892): *Recent rambles; or, in touch with nature*. Philadelphia: J. B. Lippincott.

[57] Burroughs, J. (1886): *Signs and seasons*. New York: Houghton, Mifflin; Cambridge: Riverside Press.

[58] Burroughs, J. (1889): *Indoor studies*. New York: Houghton, Mifflin and Co.

[59] Department of the Interior, Census Office (1894): *Vol. 9: Report on statistics of churches in the United States*. Washington D. C. : Government Printing Office. この巻の発行年次は1894年であり、実際に完成版として印刷製版されたものか、関連する短報を綴り合わせた応急版の冊子なのか判断し難い。教会に関する短報は、No.18 (1890年12月16日)からNo.203 (1893年8月19日)まで約10冊発行されている。

[60] Robert P. Porter は、1889年4月17日、大統領から Superintendent of Census に任命された。1893年7月31日、同職を辞任。(<http://www.census.gov/prod/www/abs/decennial/1890.htm>, 2007年7月27日検索)

[61] 前掲[25]

[62] 前掲[26]

14 (page 11)

巻と第Ⅶ巻は、2冊の短報^[63]が欠けてはおりますが—これらが重要なものでありませんように—、これまでのものと同じように、国勢を示す資料でございます。カールス氏は、いつも私のためにお骨折りをくださいます。10分前に、私は彼からの手紙を受け取りましたが、その中で、彼は、新しい本が2冊発行されると書いておられます。これら2冊は、鉱業についての報告書^[64]と製造業についての報告書^[65]ですが、彼は、両方とも私宛に送ってくださるでしょう。もちろん、先生は、これらの本もお手元に置かれるべきでございます。先生にはご理解いただいていると存じますが、政府から何か情報を得ますことは、私には造作もないことでございます。ですから、どうぞ、この方面での先生のご希望がございましたら、おっしゃって下さいますように。

少しでも先生のお役に立てますことを願いつつ。御許に。

エレン・C・サンプル

Kasten 163/93

15 (page 1)

1222 Fourth Avenue,
Louisville, Kentucky.

1893年2月19日

先生

今週、ワシントンのカールス氏から受け取りました本を、昨日、先生宛に急行貨物便でお送りいたしました。これらの本はとても大きかったため、郵便ではお送りできませんでした。私が思っておりますと同様、先生はそのうちの1冊を非常にためになるとお思いに

[63] 第11回国勢調査では、No.1 (1890年2月10日)からNo.380 (1984年4月6日)まで380冊の短報が発行されている。

[64] 前掲[26]

[65] 前掲[25]

(page 2) なることでしょう。私はこの本を先生にお届けできて、大変うれしく存じます。これは、『鉱産物についての報告書』^[66]ですけれど、挿絵と彩色された地質図の付いたとても大判の本でございます。

16 (page 3) 先生に本をお送りするのと一緒に、一人の小さな子どもに私からの3つの小箱を送りました。この子は、ごく普通の農夫の子どもで、私が住んでいたのと同じ高層フラットの上階の屋根裏に住んでおります。私は彼を直接知らないのですけれど、彼の背丈は彼の住まいと同じくらいの高さだそうです。彼はまだほんの8歳の、気だての良い男の子でございます。クリスマスの後、彼は私に手紙を書いてよこし、送られてきた郵便切手を集めてくれないかと頼んできました。それで、3つの小箱には、たくさんの切手が入っております。この子が小箱を受け取りに参りますまで、大学の研究室に留め置いていただきますことを、どうぞ先生がご不快に思われませんように。

(page 4) 私は、この急行貨物便の中に、アメリカにおります存命中の自然描写の作家たちについて述べた、一人の女性の友人から届いたばかりの手紙を同封しております。彼女は教養の高い女性で、アメリカの最も大きな女子大学^[67]の一つの極めて優秀な教授で、この分野の文学に関心を持っております。ですから、彼女は、一人の専門家として、意見を述べるにふさわしい立場におります。先生は、彼女の意見を信頼してよろしいかと存じます。

[66] 前掲[26]

[67] 当時のアメリカ合衆国北東部には、後に(1927年)男子大学のIvy Leagueに対してSeven Starsと呼ばれるようになる7つの女子大学(women's liberal-arts colleges)が設立されていた。開学順に、Mount Holyoke College (Mount Holyoke Female Seminary)(1837)、Vassar College (1861)、Wellesley College (1875)、Smith College (1875)、Radcliffe College (The Harvard Annex) (1879)、Bryn Mawr College (1885)、Barnard College (1889)。これらのうち4大学はマサチューセッツ州、2大学はニューヨーク州、残る1大学はペンシルヴェニア州に所在する。((1) Rudolph, F. (1990): *The American college and university: a history*. Introductory essay and supplemental bibliography by J. R. Thelin. Athens: The University of Georgia Press. Originally published: New York: Knopf, 1962, pp.307-328. (2) Newcomer, M. (1959): *A century of higher education for American women*. New York: Harper & Brothers Publishers, pp.5-51.)

Kasten 163/93

17 (page 1)

先生、私の質問を一つ、お許し下さいませ。1、2年前、パナマ運河^[68]が開通した場合の「通信基地」^[69]として用いる意図を持って、イギリス人たちが手に入れたのは、南アメリカ以西のどの島でございましたでしょうか。私は現在、カリブ海にとって2つの海洋をつなぐ運河がどのような政治的な意味や商業上の意味を持つのかについて、勉強しております。

先生が素晴らしいご業績を上げられますことを願いつつ。御許に。

エレン・C・センプル

黒人

ニューヨーク相互生命保険会社

FRANCIS MAGUIRE, JR

LOUISVILLE, KY

1892年12月27日

拝啓

センプル様

今朝のあなた様の調査に回答するにあたり、生命保険における黒人のリスクに関して、私が最近受け取りました手紙から引用することをお許し下さいますように。

「黒人が短命だからという理由で、会社が（たとえば33歳の黒人の）申請について検討することを拒否する権利を有するとは思いません。私たちは、常に、外務員の皆様に、黒人の人たちに保険を勧誘しないよう、指示してまいりました。むろん、まだ、勧誘を受け

[68] 1881年、レセップス（スエズ運河建設者）がパナマ運河の建設に乗り出すが、1889年、計画は頓挫した。アメリカ合衆国が政府事業として運河建設に着手したのは、パナマ独立の直後（1903年）であった。通航業務開始は1914年8月。

[69] アンドリュー・N・ポーター（編著）・横井・山本訳(1996)『大英帝国歴史地図』東洋書林、155-157頁には、1865年－1914年頃の交通・通信：電信の基地として155箇所が挙げられているが、地理的・歴史的に該当する島が確認できない。

ていない申請者がやってきましたら、私たちはその人について検討しなくてはなりません。」

あの憲法の修正条項は、(他のさまざまなことがらが対等である)一人の黒人と一人の白人とを差別しないよう、求めております。そして、それゆえ、生命保険会社は、(もし請求があれば)、白人が請求されるのと同額料金で、黒人と契約を結ばざるを得ないのであります。

しかしながら、幸いにして、すべての生命保険会社が所有しております統計表によれば、一つの人種としての黒人人種は、白人人種よりも短命であることを裏付ける確かな証拠が見られます。自然の法則が人間の作った法律の執行を阻止していることは明らかです。(カリブ人種は、他の白人人種の寿命を12.5~14%も上回って長命であることは、あなた様のご興味を引くことと存じます。)

つまるところ、どのような形の生命保険であれ、黒人と契約を結ぶことは、たいていの場合、安全でないと考えられております。しかしながら、黒人と契約を結ぶ場合には、同様の個人的な記録また家族の記録を持っている白人が請求されるのと同額の料金が黒人に対しても課されます。

この手紙が、生命保険会社との関わりにおける黒人の実情について、あなた様のご友人に何らかの情報を提供できますものでありますように。

敬具

フランシス・マクガイア、ジュニア

18 (page 2)

Kasten 163/93

19 (page 1)

ジョン・バロウズ

ECS

The Beatrice^[70], 57th St., Chicago, Ill.^[71]

1983年2月12日

親愛なるセンプル様

私の考えでは、自らの文学分野として戸外の生活を選んだ、現在存命のアメリカ人の中で、文句なく第一人者なのはバロウズ* です。彼は、視点をその対象にきちんと置いて記述しますし、その叙述を特徴づけるのは、もし見つけたら激賞せずにはいられないほどの、まれにみる率直さと簡潔さとたいへん美しい精確さです。

(page 2)

私は、アボット氏の作品は存じませんが、大変誉められているのを耳にしたことがございます。

モーリス・トンプソン^[72]は、“*Sylvan Secrets*”^[73]と “*By-Ways and*

[70] シカゴ大学の女子寮の名称。Goodspeed, T. W. (1916): *A history of the University of Chicago founded by John Rockefeller: the first quarter-century*. Chicago: The University of Chicago Press, Third impression 1972によると、1892年10月1日のシカゴ大学開校に先立ち、入学を希望する多数の学生たちからの問い合わせの中に住まいに関する質問が増えていた。また、大学近辺では市街化がまだ進んでおらず、学生用下宿の確保が難しい状況であった。これらの理由から、初代学長 W. R. Harper を中心に大学側はさまざまな努力を重ね、女子学生のための学生寮 (The Beatrice) と男子学生のための学生寮 (The Drexel など) をそれぞれ設立し (p.193)、学生たちの入学に間に合わせた。Harper が設立した学生寮は、他大学にも大きな影響を与え、これ以降、アメリカ各地の大都市に所在する大規模大学でも学生寮開設と整備が進んでいった (Rudolph, F. (1990): *The American college and university: a history*. Introductory essay and supplemental bibliography by J. R. Thelin. Athens: The University of Georgia Press. Originally published: New York: Knopf, 1962, p.100)。ただし、現在の学生寮・食堂のリストには、The Beatrice は挙げられていない (http://www.rh.uchicago.edu/hds/housing/residence_halls/maps/、2007年7月31日検索、および <http://maps.uchicago.edu/>、2007年7月31日検索)。

[71] Goodspeed (1916) *A history of the University of Chicago founded by John Rockefeller: the first quarter-century*. Chicago: The University of Chicago Press, Third impression 1972 の Illustration: Site of the University (p.170)によると、開校時 (1892年) の大学キャンパスは、北は 57th Street、南は 59th Street、東は University Avenue、西は Ellis Avenue で限られた区画であった。University Avenue から東に 4 本目の通りが Dorchester Avenue であり、この通りと 57th Street の交差点近くに The Beatrice apartment があった (p.193)。シカゴ大学は、設立当初から女性にも門戸を開放し、女子学生の高等教育に力を注いできた。初年度の 742 名の学生のなかで 200 人に満たなかった女子学生は、数年後には千人を超えた (p.192, p.313)。

[72] Maurice Thompson (9 Sep. 1844 - 15 Feb. 1901). インディアナ州生まれの作家。 *The Atlantic Monthly* や *The Scribner's Magazine* などの雑誌に作品を発表した。(Garraty, J. A. and Carnes, M. C. eds. (1999): *American national biography*, Vol.21. New York: Oxford Univ. Press, pp. 568-570.)

Bird Notes^[74]という2冊の魅力的な本を書いています。“*The Tangle-Leaf Papers*”、“*Browsing and Nibbling*”、“*A Fortnight in a Palace of Reeds*”、“*Out-Door Influences in Literature*”というのは、彼の本の章^[75]の見出しのいくつかですけれど、これを見ると彼の作品の傾向がはっきりと伺えます。

最近の特徴である自然に密着した描写のいかに多くが鳥についてのものであるかを指摘するのは、とても興味深いことです。オリヴ・スローン・ミラー^[76]のスケッチをご存じでしょうか。“*Bird Ways; in Nesting Time*^[77]”はすばらしいと言われております。エディス・トーマス^[78]の作品にも伸び盛りの良さがございますし、共感を呼ぶ作品です。どうぞ、彼女の“*The Round Year*^[79]”をご覧くださいませ。

[73] Thompson, M. (1887): *Sylvan secrets, in bird-songs and books*. New York: J. B. Alden.

[74] Thompson, M. (1885): *By-ways and bird notes*. New York: J. B. Alden.

[75] これらは、*By-ways and bird notes* (1885)に含まれる章である。その他、In the haunts of the mocking bird, A red-headed family, The threshold of the Gods, Cockoo notes, Some minor song-fords, Birds of the rocks の章がある。

[76] Olive Thorne Miller (25 June 1831 - 25 Dec. 1918) ニューヨーク州生まれの自然描写ならびに児童書の作家。鳥類学に造詣が深く、1901年に設立されたAmerican Ornithologists Unionの最長老会員でもあった。エッセイの中には、小鳥や小動物、植物を精巧に描いたスケッチが添えられているものも多い。主要な作品の一つに、Miller, O. T. (1900): *A bird-lover in the West*. New York: Houghton, Mifflin and Co. Reprinted edition, 1970, New York: Anro and New York Timesがある。(1) James, E. T. et al. eds. (1971): *Notable American women 1607 - 1950*, Vol. II. Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press of Harvard University Perss, pp.543- 545. (2) Mailey, F. M (1919): Mrs. Olive Thorne Miller. *The Auk: a Quarterly Journal of Ornithology*, Vol.36, No.2, pp.163-169.)

[77] Miller, O. T. (1885): *Bird-ways*. New York: Houghton, Mifflin and Co. およびMiller, O. T. (1888): *In nesting time*. New York: Houghton, Mifflin and Co.

[78] Edith Matilda Thomas (12 Aug. 1854 - 13 Sept. 1925). オハイオ州生まれの詩人。主に1890年代以降、多数の詩や小説を、*The Century*や*The Atlantic Monthly*、*The Scribner's Magazine*などの一流誌に次々と発表した。代表的な詩集には、*The inverted torch*, Boston: Houghton, Mifflin, 1890や*A new year's masque, and other poems*, Boston: Houghton, Mifflin and Co., 1885などがある。(James, E. T. et al. eds. (1971): *Notable American women 1607 - 1950*, Vol. III. Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press of Harvard University Perss, pp.444-446.)

[79] Thomas, E. (1886): *The round year*. New York: Houghton, Mifflin and Co.

(page 4)

トーマス・ウェントワース・ヒギンソン^[80]の“*Outdoor Papers*”^[81]をご存じでしょうか。私は知らないのですが、その作品はきっと面白いのだらうと思います。

チャールズ・ダドリー・ウォーナー^[82]の“*In the Wildness*”^[83]は、私が毎年読んでいる本です—これは、私がずっと手元に置いておくことのできない本なのです。というのは、私は、しょっちゅう、そのすばらしさを知らないでいる、けれども、そのすばらしさを知るべき人を見つけて差し上げてしまうからです。これは、記述される対象を前にして読まれるべき書物のリストの最初に挙げられるであろう、希有な本の一つでございます。彼の本全体は、とても魅力的で、

[80] Thomas Wentworth Higginson (22 Dec. 1823 - 9 May 1911). マサチューセッツ州生まれの作家、文芸評論家、社会改革家、ナチュラリスト。多数の著書の中には、*Army life in a black regiment*, Boston: Fields, Osgood & Co., 1870 や *Does slavery christianize the Negro?* New York: American Anti-Slavery Society, 1855 が含まれる。彼は、エミリー・ディキンソン (Emily Elizabeth Dickinson (10 Dec. 1830 - 15 May 1886)、生前よりも死後よく知られるようになった19世紀を代表するアメリカ詩人) の才能、ただし、彼女の詩作の本質的な斬新さではなく、むしろナチュラリストの素質を早くから認めて助言したことでも知られる。(1) Garraty, J. A. and Carnes, M. C. eds. (1999): *American national biography*, Vol.10. New York: Oxford Univ. Press, pp. 757-760. (2) スコット・スロヴィック・野田研一編著(1996)『アメリカ文学の〈自然〉を読む：ネイチャーライティングの世界へ』ミネルヴァ書房、217-236頁。

[81] Higginson, T. W. (1863): *Out-door papers*. Boston: Ticknor and Fields.

[82] Charles Dudley Warner (12 Sep. 1829 - 20 Oct. 1900). マサチューセッツ州生まれの作家・編集者。マーク・トウェーン(Mark Twain (30 Nov. 1835 - 21 Apr. 1910))との共作小説 *The gilded age: a tale of to-day*, Hartford: American Pub. Co., 1873 でよく知られている。この小説の題名は、南北戦争の終わった1865年から19世紀末ごろまでの、繁栄と腐敗の二面が極端に現れたアメリカ社会をさす時代名称(鍍金時代、金びか時代などと訳される)として用いられている。アメリカは農業から商工業へ産業の比重を移し、空前の物質的繁栄の中で、人々が一攫千金の夢に狂奔した。反面、政財界の癒着、政治の腐敗、倫理的な堕落や不正が、社会のいたるところでみられた。他の作品には、Warner, C. D. (1896): *The relation to literature to life*. New York: Harper などがある。(Garraty, J. A. and Carnes, M. C. eds. (1999): *American national biography*, Vol.22. New York: Oxford Univ. Press, pp. 687-689.)

[83] Warner, C. D. (1885): *In the wilderness*. New York: Houghton, Mifflin and Co. 同書のリプリント版 (New York: Cosimo Classics, 2005, 226p.) によると、“In the wilderness”と“*How spring came in New England*”の2部構成で、前者には、I. How I killed a bear, II. Lost in the woods, III. A Fight with a trout, IV. A-hunting of the deer, V. A character study, VI. Camping out, VII. A wildness romance, VIII. What some people call pleasure の8節が含まれる。

彼の洗練された精妙なユーモアがあちらこちらに見受けられます。

ロウエル^[84]に言及しないでいるのはいささか残念です—彼はまだ生きているように感じます—彼の“*Suthin' in the Pastoral Line*”^[85]や、“*The Vision of Sir Launfal*”^[86]、“*Under the Willow*”^[87]は、この上なく重要な作品でございます。

私はとても大急ぎでこの手紙を書いております。また、今のところ他の名前を思いつきません。もし、私がさらに何かお手伝いできることがありましたら……

3. 1902年および1924～25年のヴァッサー・カレッジ同窓生通信

(1) テキスト

Records of the Class of 1882 (1882 - 1902) (Class Box 1882 (Box Two))

ELLEN C. SEMPLE

“Everything with me in the past ten years has centered about my work in anthropogeography. I was at Leipsic under Ratzel in 1891-1892, and again in 1895. For five years I have been writing magazine articles on different phases of the subject, published in this country and in London. Three years ago I took a 350-mile horseback trip through the Kentucky mountains, to study their belated population as a product of the segregating

[84] James Russell Lowell (22 Feb. 1819 - 12 Au. 1891). マサチューセッツ州生まれの詩人。母校ハーヴァード大学で講義を担当したり、*The Atlantic Monthly* や *The North American Review* といったアメリカの代表的な雑誌で編集を担当したこともある(前者は1857 - 1861年、後者は1864 - 1872年)。1877年から1885年にはスペインやイギリスの駐在大使を務めた。田園描写や風刺やユーモアに満ちた洒脱な詩のほか、“*Agassiz*” (*The Atlantic Monthly*, Vol. 33, 1874, pp.586-596) や “*The Cathedral*” (*The Atlantic Monthly*, Vol. 25, 1870, pp.1-16) などの比較的長編の作品もある。“*Agassiz*”は、反進化論で知られるハーバード大学の地質学・動物学教授であり、ラッセルとも親交のあったLouis Agassizの死(1874年)を悼む挽歌である。(1) Garraty, J. A. and Carnes, M. C. eds. (1999): *American national biography*, Vol.14. New York: Oxford Univ. Press, pp. 40-43. (2) 岩元・酒本監修(1991)『アメリカ文学作家作品事典』本の友社、771-774頁。)

[85] 題目中、Suthinは、Sunthinの綴り間違いと思われる。これは、Lowell, J. R. (1862): *The Biglow papers*, Second Series, Vol. VI. London: Trübner & Co. に収録された短詩。

[86] Lowell, J. R. (1848): *The vision of Sir Launfal*. Cambridge, Mass.: G. Nichols.

[87] Lowell, J. R. (1869): *Under the willows and other poems*. Boston: Fields, Osgood, & Co.

mountain environment, and the result of my investigation was published in the *Journal of the Royal British Geographical Society*. Now I am at work on my book, which deals with geographic factors in American development. Houghton, Mifflin & Co. are to publish it. I have promised to deliver the manuscript to them in October."

The manuscript was evidently delivered on time, as Houghton & Mifflin have announced the book among their forthcoming publications.

Class Records '82 (Class Box 1882 (Box Two)) (pp.189-190)

May 31, 1924

Ellen Churchill Semple delivered "Richards" lectures at Vassar in Feb. 1924. She was there twelve days and "was abundantly satisfied with all" she saw. Her grandniece, Patricia Dunkerson, Patty Semple's grandchild, expects to enter Vassar. "Have you read Miss Haight's recent book *Italy Old & New*? You will find it compares favorably with Boissier's *Cicero & His Times*, the standard French work on ancient Roman society. I would like to knife the College organist. I went to a Sunday evening recital in the darkened chap (el) hoping to find rest into my soul & that blasted organi (st) gave us music so discordant & modern that it made Debussy sound like Home Sweet Home! Now, by agony & bloody sweat, I have brought myself up to (the) appreciation even keen enjoyment of Debussy, whi (ch) is doing pretty well for "one of my age"; but I do not (be)lieve these modern organ composers have anything to say their instrument, so they throw out a smoke scre (en) of sound. Abbie Nickerson turn your Buick towar (d) Worcester in this fall to 941 Main St. opposite Universi (ty) Library. Invited to read a paper in August at Britis (h) Association Meeting in Toronto - Subj.: - Geographic Influences upon Ancient Mediterranean Religion, interesting or provocative of discussion, not to say brick-bats. It has been a pleasure to read your chronic (le) and hear you revive the old memories. Always sincerely y (ours.)

(p.229)

Ellen Semple, Los Angeles, June 3/ 25

A few days ago, I drove out to the Vedantist retreat, tucked among the hills. I waited some little in the living-room, talk (ed) to one of the lay members, while Sister Devamata was changi (ng) her dress. Then she came in! I can hardly describe my sens (a) tions as I looked at that thing, grey-clad figure with it (s) eyes which seemed to gaze out from another world. She imp (ressed) me as very old, though there were no lines in her face; but (her) voice was tremulous and her movements at first struck as feeble. Afterwards, however, as she showed me the gard (en) and the lovely patio of the house, she walked rigorously [?] but she told me of a desperate illness of the past year whe (n) she lay at death's door for days. There is no doubt of he (r) all-possessive religious faith. She lives and breathes Vedantist philosophy of life and the soul. She is since (rely) gentle, but filled with purpose as to things that count (for) her, and she evidently works hard in the conduct of the m (onth) ly magazine of the order. Moreover, she is writing a biog (raphy) of the Swami Paramananda, and a book of her own remi (ni) scences of her two years in India, when her intercourse (was) wholly with the high class natives. Only once or twice in [?] time did she speak with a European. The book shoul (d) have distinct value, because her experiences were uniq (ue.) Cora, she tells me, is writing a book on some phase of (co)lonial history. She gave me some reprints of her articles f (rom) the magazine. I read them last evening. She writes with (de) lightful clarity and ease, the heritages of our Vass (ar) training in English. In the presence of her twilight greyn [?] her ethereal spirituality, I felt all roast-beef and w (ine). I greatly regret that I can not meet '82 at Vassar. Greet (ing) to them. Devotedly Ellen C. to Mary Sanford.

(pp.230-231)

Semple, Carmel by the Sea, Cal. Aug. 18/25

Dear Girls: Summer finds me in lovely Carmel Highlands, a region of bold rocky coast, tall headlands built up on arches of sea caves and thrust out to meet the dash of the

waves. It is the sort of coast that Euripides loved; and the sea birds crying high above the roar of the surf are as vivid here as in his lyrics. I came to Cal. the End of January to work my book and rest a bit; but the Southern Branch of the U. of C. located in Los Angeles, prevailed on me to give a course of lectures on the Mediterranean Region, so that my program eventually contained more work than rest. Also I met many delightful people, among them Mary Pickford and Douglas Fairbanks. Mary is very much of a personality, let me tell you. I came up to the Highlands the middle of June, and have spent the summer with Elis Tompkins, who used to be at V. C. as a Freshman in our time. She has a cottage high up on the mountain above the Sea, and here I have worked at my book all summer, in beneficent quiet, with no telephone within a quarter of a mile. I take my meals at the Inn, and there meet a variety of people. Recently I had an interesting talk with Dr. Merriam, Director of the Carnegie Research foundation in Washington. He has started a survey of the whole question of earthquakes on the Pacific slope, mapping of the countless faults or earthquake rifts in the region, and the distribution of a new type of instrument which daily measures the strain on the earth's crust along one of these faults, and which indicates when an earthquake is imminent. He had been down at Santa Barbara and the neighboring region, where he found the dam of a city reservoir built right across a fault line. Of course it broke when the recent shake came. I toured extensively thro Southern Cal. and there I found an irrigation dam, 150 ft. high, located within 200 yds. of the great San Andreas fault which shook along all its 700 miles length in 1906. I have had one or two investments offered me here; but before I consider them I study my map of the earthquake faults. Such are the uses of geology to possible adversity! Sunday I go up to S. F. to visit B. B. for a week, then to Kentucky and to Clark U. Greeting to you all. Ellen C. Semple.

(2) 日本語訳

Records of the Class of 1882 (1892 - 1902) (Class Box 1882 (Box Two))

エレン C. センプル

「この十年間、私が主にしてきたことは人類地理学の研究です。1891-92年と1895年、ライプチヒでラッツェルのもとで学びました。5年の間、人類地理学のさまざまなテーマについて雑誌論文を書いてきましたし、それらを合衆国とロンドンで刊行しました。3年前、隔絶されたケンタッキーの山地環境ゆえに周囲から取り残された人々について研究するため、馬で350マイルに及ぶ踏査旅行をしました。その調査結果は *Journal of the Royal British Geographical Society* に掲載されました^[1]。現在、私は、アメリカの発展における地理的因子について取り上げた本^[2]を執筆しています。Houghton, Mifflin & Co.が本を出版することになっています。私は、10月に原稿を出版社に渡す約束をしました。」

Houghton & Mifflin & Co.が刊行予定の本として案内を出していますので、出版に間に合うよう、原稿が同社に渡されたのは確かです。

Class Records '82 (Class Box 1882 (Box Two))

(pp.189-190)

1924年5月31日

エレン・チャーチル・センプルは、1924年2月、ヴァッサーで「リチャーズ」講義を行いました。彼女はそこに12日間滞在し、目にしたものの全てに「とても満足しました」。彼女の姪孫のパトリシア・ダンカーソン^[3]、つまりパティ・センプル^[4]の孫が、ヴァッサーに入学するつもりでおります。皆さんは、ヘイト嬢^[5]が最近書かれた『*Italy Old and New*』^[6]を読まれましたでしょうか？ポワシエの『*Cicero and His Times*』^[7]は、古代ローマ社会についてのフランス人による研究の基本的な文献ですが、彼

[1] Semple, E. C. (1901): *The Anglo-Saxons of the Kentucky mountains: a study in anthropogeography, Geographical Journal*, Vol.17, pp.588-623.

[2] Semple, E. C. (1903): *American history and its geographic conditions*. Boston: Houghton Mifflin.

[3] Patricia Dunkerson は、1928年入学、1932年卒業。(1939 *Alumnae biographical register*.)

[4] Patty Blackburn Semple はセンプル (エレン) の姉。Vassar College には1868-1871年在籍。(1939 *Alumnae biographical register*.)

[5] Haight, Elizabeth Hazelton (1872 - ?). Vassar College 卒業。

[6] Haight, E. H. (c1922): *Italy old and new*. New York: E. P. Dutton & Co.

女の本はそれと比肩できるものでございましょう。私は大学のオルガニストをナイフで刺してやりたい気持ちです。私は、心安らぐひとときを過ごそうと、灯りを消したチャペルで行われる日曜夕方のリサイタルに参りました。でも、あのオルガニストは、私たちに調子はずれで現代的な音楽を聴かせ、そのため、ドビッシーの音楽はまるで *Home Sweet Home* (邦題、埴生の宿) のようになってしまいました。そこで、私は、血の汗を流すほど苦勞して、ドビッシーの音楽を熱心に楽しむよう、強いて努めました。こういうことは、私の年齢の者にとってはさほどのことではありません。けれども、こうした現代風のオルガニストたちが、自分の演奏する楽器についてなにがしかの理念を持っているとは信じられません。彼らは音の煙幕を投げかけているにすぎません。アビー・ニカーソン^[8]、この秋、あなたが車 (ビュイック)^[9]を運転してウースターにやってくる時は、Main St.の941番地に来てください。大学図書館^[10]の向かい側です。私は、8月にトロントで開催される英国協会の会合で、講演の招待を受けました。テーマは、古代地中海の宗教に対する地理的影響です。興味を引く、あるいは議論を巻き起こすようなものになりますように。酷評される講演になりませんように。私は、皆さんの通信を読んだり、思い出をよみがえらせたりするのをうかがうのがとても楽しみです。かしこ。

[7] Boissier, Gaston (1922): *Cicero and his friends: a study of Roman society in the time of Caesar* (translated, with an index and table of contents, by Adnah David Jones). New York: G. P. Putnam's sons.

[8] Abbie Miner Nickerson は、Vassar College におけるセンプルの同級生 (Class of 1882) で West Newton, Massachusetts 出身 (*New York Times*, June 15, 1882.)。

[9] David D. Buick (1854 - 1929) がミシガン州に Buick Moter 社を設立したのは 1903 年。その後、同社は合衆国を代表する自動車メーカーに成長するが、1908 年、ゼネラルモーター (GM) に社名変更された。人口千人当たりの自動車保有台数は 87.4 台 (1920 年) から 833.4 台 (1990 年) へと急速に伸びた (*Historical statistics of the United States, millennial edition*, Vol. 4(2006), Table Df339-342, and Vol. 1 (2006), Table Aa1-5, and Aa145-184)。

[10] Clark University の住所は 950 Main Street, Worcester, Massachusetts. センプルは、友人に、大学近くの彼女の居室を訪ねるように指示している。センプルが同大学の人類地理学の教授に任命されたのは 1921 年である。

(p.229) *Swami Paramananda and his work*. La Crescenta, Calif.: Ananda-Ashrama.

エレン・センプル、ロサンゼルス、1925年6月3日 *Swami Paramananda and his work* 104頁

2、3日前、私は車で、丘陵の中にあるヴェーダント派^[11]の隠遁所へ出かけました。シスター・デヴァマタ^[12]が着替えをしている間、居間で待ちながら、平信徒の一人に話しかけました。するとそのとき、彼女が部屋に入ってきました！ 灰色の衣を身にまとって、この世とは別の世界からじっと見つめているような瞳をした人の姿を目にしたときの私の気持ちを書き表すのは、とても難しいことです。彼女は顔に皺がないのに、とても年老いているような印象を受けました。彼女の声はふるえていて、最初、その動作は弱々しいものでした。それから、彼女は、隠遁所の可愛らしいパティオと庭を見せてくれ、前年には重い病に掛かり、死の淵に立っていたと話してくれました。彼女がすべてを信仰に捧げていることは疑いもありません。彼女は、ヴェーダント派哲学を実践し生きているのです。彼女はとても穏和ですけれど、自分にとって大切だと思ふことを目標にしております。それゆえ、教団の月刊誌^[13]の作成という大変な仕事に携わっています。それに加えて、彼女は、スワミ・パラマナンダ^[14]の伝記^[15]や、彼女がインドで過ごした2年間の回想記^[16]を書いております。当時、彼女の交際範囲は、上流社会のインド人だけに限られ、一人のヨーロッパ人と1、2度話したただけだ

[11] インドの主要な伝統哲学の一つ。ヴェーダ（インドの聖典）の末尾を意味する。ヴェーダの末尾部分はウパニシャッドと呼ばれ、この教えが基礎となった哲学である。

[12] 本名Laura Franklin Glenn(? - 1942)は、Vassar Collegeにおけるセンプルの同級生（Class of 1882）でCincinnati, Ohio出身。Benjamin Franklinの子孫。1896年、初めてSwami Paramanandaの説教を聞き、1902年、ヴェーダント会のメンバーとなる。*New York Times*, June 15, 1882 および *Divinity at work within the world*, *Sri Sarada Society Notes*, Vol.7, Issue 1, 2001, P.2による。

[13] *Vedanta Monthly Message of the East*のことか。

[14] Swami Paramananda (1884 - 1940)は、ヴェーダント派哲学と宗教の伝道者。1906年にアメリカ合衆国に渡り、各地にヴェーダント・センターを設立した。現在も、Cohasset, MassachusettsとLa Crescenta, Californiaの2つのセンターは存続している。Sister Devamataは、彼のアメリカにおける最初の弟子である。

[15] Sister Devamata (c1926-41): *Swami Paramananda and his work*. La Crescenta, Calif.: Ananda-Ashrama.

[16] Sister Devamata (c1927): *Days in an Indian monastery*. La Crescenta, Calif.: Ananda-Ashrama.

ったそうです。彼女の経験はとてもユニークなので、この本は面白いものになるに違いありません。コーラ^[17]が私に話してくれたところによると、現在、植民地史の一面面に関する本を書いているそうです。彼女はいくつかの抜刷をくれました。私は昨晚、それらを読みました。彼女は、すばらしく明快に平明に書いております。これは、本当に、私たちのヴァッサー時代の英語教育のたまものです。彼女の薄明い□□?とエーテルのような精神性をまのあたりにして、豊かな味わいを楽しみました。ヴァッサーで82年のクラスメートに会えないのは本当に残念です。皆さんによろしく。エレン・C. からマリー・サンフォード^[18]へ。

(pp.230-231)

センプル、カリフォルニアの海岸にて、1925年8月18日。

皆さん：この夏、私は、美しいカーメル・ハイランド^[19]で過ごしております。ここはごつごつした岩石海岸で、海食洞の屋根のアーチの上に背の高い岬がそそり立ち、海にせり出した部分には波が押し寄せています。まるで、エウリピデス^[20]が愛したような海岸です。磯波の轟きの遙か上空で鳴く海鳥たちは、彼の叙情詩で歌われているように生き生きと躍動しています。私は、本^[21]の執筆の仕事をし、そして少し休養をとるために、1月の末にカリフォルニアにやってきました。けれども、ロサンゼルスにあるカリフォルニア大学の南分校^[22]が、地中海地域についての講義のコースを依頼

[17] Vassar Collegeにおけるセンプルの同級生 (Class of 1882) の中で、Coraの名前を持つ者は、Anne Cora Southworth (Soughton, Massachusetts出身)と Cora Louise Shailer (New York出身)の二人である。New York Times, June 15, 1882による。

[18] Mary Robinson Sanfordは、Vassar Collegeにおけるセンプルの同級生 (Class of 1882) で Troy, New York出身。New York Times, June 15, 1882による。

[19] アメリカ合衆国西海岸にある風光明媚な観光地・保養地。

[20] Euripides (480? - 406B.C.). ギリシアの悲劇詩人。

[21] Semple, E. C. (1931): *The geography of the Mediterranean region: its relation to ancient history*. New York: H. Hold and Co.

[22] Southern Branch, University of Californiaは、1919年、ロサンゼルスに設立された。1927年に、University of California, Los Angelesとなる。センプルは、1925年春学期の講義を担当した (Bushong, A. D. (1984) : Ellen Churchill Semple 1863 - 1932. *Geographers Biobibliographies Studies*, Vol. 8, pp.87-94.)。

してきたので、私の予定は、休養よりもやや仕事の比重が高くなってしまいました。また、私はここで大勢の素敵な人たちに会いました。その中に、マリー・ピックフォード^[23]とダグラス・フェアバンクス^[24]がいます。マリーは、言わせてもらえば、とても個性的な人ですね。私は6月中頃にこの高地にやってきて、夏をエリス・トムソンと一緒に過ごしました。彼女は、私たちがヴァッサーにいた頃、新入生だった人です。彼女は海に臨む山の上の方にコテージを持っており、半径4分の1マイルの範囲内には電話^[25]もない、めったにないほど静かな環境で、私は、夏の間ずっと、本の執筆作業をしていました。私は食事は近くの宿屋で取っており、そこで、いろいろな方たちに遭遇しています。最近、ワシントンのカーネギー研究財団^[26]の理事をされているメリアム博士^[27]と面白いお話をいたしました。彼は、太平洋に向かって傾斜する斜面上で発生する地震のあらゆる問題についての調査を始めたところで、この地域の無数の断層あるいは地震断層を地図化したり、地殻上の歪み度を毎日測定し、いつ地震が発生しそうになるかを示すための新しい機器を断層の一つに沿って設置したりしておられます。彼は、サンタ・バーバラとその周辺に出かけ、断層線をまたいで建設された市の貯水ダムを見つけたそうです。もちろん、最近の地震で、そのダムは決壊しました。私は、南カリフォルニアを詳しく見て回り、1906年の地震^[28]の時に、それに沿

[23] Mary Pickford (1892 - 1979). カナダ・トロント出身の女優で、サイレント映画時代の大スター。1920年にダグラス・フェアバンクスと結婚したが、1939年に離婚。

[24] Douglas Fairbanks (1883 - 1939). コロラド州出身の俳優・脚本家・映画監督。息子のダグラス・フェアバンクスJr.も俳優。

[25] Alexander Graham Bell (1847 - 1922)は、1876年、電話を発明し、翌年、ベル電話社を設立。1876年にはアメリカ合衆国内の電話は2,600台であったが、1892年には26万台を、さらに1899年には100万台を超え、1925年には電話保有世帯率が38.7%に達した。(Historical statistics of the United States, millennial edition, Vol. 4, 2006, Cambridge: Cambridge University Press, Table Dg34-45.)

[26] 鉄工業で巨額の財をなしたAndrew Carnegie (1835 - 1919)が、1902年に設立した。

[27] John Cambell Merriam (1869 - 1945). 地質学者・古生物学者。1912年にUC, Berkeleyの教授、1920年にCarnegie Institution of Washingtonの所長に就任。ここでのプロジェクトの一つが、太平洋沿岸の地震災害調査であり、1921年から1932年にかけて、新たに開発された地震計(Seismograph)を備えた観測基地のネットワークをカリフォルニアに作り上げ、断層地図を作製した。(Garraty, J. A. and Carnes, M. C. eds.(1999): American national biography, Vol.15, New York: Oxford University Press, pp.348-349.)

って700マイルも揺れたサンアンドレアス断層から200マイルも離れていないところに、高さ150フィートの灌漑ダムを見つめました。私に与えられた投資がカリフォルニアに1つ2つございます。それらについて考える前に、地震断層の分布図をよく調べてみることにします。これはまさに、起こりうる災難に地質学を役立てることでありましょう！日曜日には、サンフランシスコに向かい、一週間、B. B.^[29]を訪問します。その後、ケンタッキーに、そして、クラーク大学に戻ります。皆さんによろしく。エレン・チャーチル・センプル

（以下は複製された文の重複部分であり、内容は上記の文とほぼ一致する）



[28] 1906年4月18日、サンフランシスコ市街に近いサン・アンドレアス断層を震源とするマグニチュード7.8の直下地震が発生。この地震で約3,000人が死亡し、22万人以上の人々が家を失った。

[29] Mary Burta Brittanは、Vassar Collegeにおけるセンプルの同級生（Class of 1882）でSan Francisco, California出身。New York Times, June 15, 1882による。

Ⅲ センプルの研究とその時代

1. センプルの経歴

センプルは、1863年1月8日にケンタッキー州ルイヴィル（Louisville）で生まれ、1932年5月8日、フロリダ州のウェスト・パーム・ビーチ（West Palm Beach）で死去した（図1）。つまり、南北戦争さなかから第二次世界大戦前にかけての時代を生きた人である。表1の年表では、19世紀から20世紀前半のアメリカ合衆国史の主要な出来事ならびに、センプル自身や本稿で取り上げる資料に登場する事項に関わることを示している。これに併せて、同時期のラツェルらの主だった研究活動を掲げている。さらに、表2では、センプル自身の年譜と、同窓生通信に登場する人たちの活動とを対照させている。

センプルの生涯については、さまざまな評伝や人名録で紹介されている（Bingham 1932; *History of the Class of 1882 on the 50th anniversary* 1932: 128-137; James et al. 1971: Vol.3, 260-262; Bushong 1984; James et al. 1983; Barton and Karan 1992; Garraty and Carnes 1999: Vol.3, 637-638）。ここでは、最初のライプチヒ留学から帰国した1890年代頃までの時期を中心に、センプルの経歴をまとめておこう。

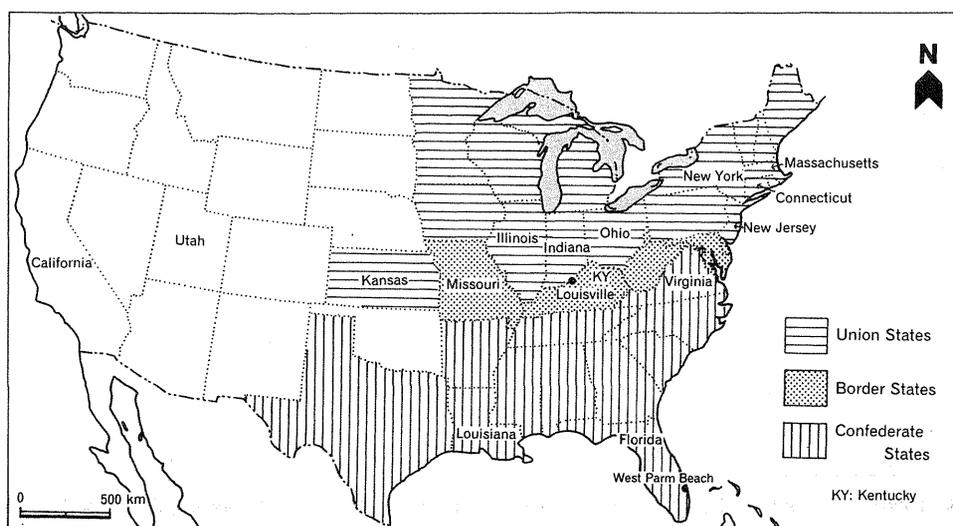


図1 南北戦争時の勢力地図とケンタッキー州ルイヴィルの位置

Figure 1. Location of Louisville, Kentucky and the situation at the Outbreak of Civil War (1861)

Source: *Mapping America's past* (1996).

表1 センブル資料に関連するアメリカ史およびラッツェルらの活動年表

Table 1. Historical events relating to Semple and her letters to Ratzel.

Year	Louisville, Kentucky and United States		Year	Ratzel, Agazzis and Shaler
1803	Louisiana Purchase.			
1830	Mormonism by Joseph Smith.			
1832	Ohio and Erie Canal (- 1861).			
1841	Mutual Life Insurance of New York was founded.			
1847	Mormon settled in Salt Lake City, Utah.			
1849	Gold Rush to California.			
1850	Louisville-Nashville Railroad was founded (- 1982).			
1856	Louisville Male High School opened.		1859	Charles Darwin (1809 - 1892): <i>Origins of species.</i>
	Louisville Girls High School opened.		1859	Louis Agassiz (1807 - 1873): <i>An essay on classification.</i>
1860	Washington Life Insurance was founded.			
1861, Apr.	Civil War began.			
1861	Vassar College opened.			
1862	John Hancock Mutual Life Insurance was founded.			
1865, Apr.	Civil War ended.			
1870	15th Amendment (The right to vote shall not be denied or abridged on account of race, color, or previous condition of servitude.)	Ellen Churchill Semple (1863 - 1932) and her Vassar College Alumni	1873, July - 1875, June	Friedrich Ratzel (1844 - 1904), Trip to North America, Cuba, and Mexico. 1873, Oct., He met Louis Agassiz (Professor of Paleontology, Harvard University).
			1874	James Russell Lowell (1819 - 1891): <i>Agassiz. The Atlantic Monthly</i> , vol. 33, issue 199.
			1878	Ratzel: <i>Die Vereinigten Staaten von Nordamerika, Bd.I.</i>
1884	Massachusetts, Insurance law of anti-discrimination. Eleventh Census		1885	Nathaniel Soughgate Shaler (1841 - 1906): <i>Kentucky: a pioneer commonwealth.</i>
1890	Mormon stopped polygamy.		1891	Shaler: <i>Nature and man in America.</i>
1892, Oct.1	Chicago University opened.		1893	Ratzel: <i>Die Vereinigten Staaten von Nordamerika, Bd.II.</i>
1898	Spanish-American War			
1903	Construction of Panama Canal.	(see Table 2)		
1906, Apr.18	San Francisco Earthquake of 1906			
1914-1918	World War I			
1920	19th Amendment (The right to vote shall not be denied or abridged on account of sex.)			
1939-1945	World War II			

表2 センプルの年譜とヴァッサー・カレッジ同窓生の活動

Table 2. Chronology of Ellen Churchill Semple and the activities by her Vassar College alumni.

Year	Age	Ellen Churchill Semple	Year	Vassar College Alumni
1863, Jan. 8	0	Ellen Churchill Semple was born in Louisville, Kentucky.		
1875	12	Father, Alexander Bonner Semple died.	1868-71	Patty Blackburn Semple (older sister) attended Vassar College.
1878	15	Semple entered Vassar College.	1876	Myra Reynolds (1853 -1932) entered Vassar College.
1882	19	Semple graduated from Vassar College, started teaching at Semple School in Louisville, Kentucky.	1880	Reynolds graduated from Vassar College.
			1884-1892	Reynolds, Teacher of English of Vassar College.
			1887	Patty B. Semple: An old Kentucky home. <i>The Atlantic Monthly</i> , Vol.60, No.357, 1887, pp.32-43.
			1888	Patty B. Semple: In a border state. <i>The Atlantic Monthly</i> , Vol.62, No.372, 1888, pp.464-482.
1891	28	Semple received Master's degree from Vassar College. ("Slavery: a study in sociology")		
1891-1892	28-29	Semple took Friedrich Ratzel's lectures at Leipzig University.	1892, Oct.	Reynolds, Fellow of Chicago University (English literature).
1893, Jan.-Feb.	29-30	Letters to Friedrich Ratzel.	1893, Feb.	Reynolds wrote to Semple from Chicago (?).
1894	31	Semple published her first geographical article.	1894	Reynolds, Assistant of Chicago University.
1895	32	Semple studied again at Leipzig University.	1895	Reynolds received Ph. D from Chicago University, and promoted to Instructor.
1897	34	Semple published her first paper on Academic Journal.	1897	Reynolds, Assistant Professor of Chicago University.
1902	39	Semple, E. C.: Ellen C. Semple. Records of the Class of '82 (1882-1902).		
1903	40	Semple: <i>American history and its geographic conditions.</i>	1903	Reynolds, Associate Professor of Chicago University.
1904	41	Mother, Emerin Price Semple died. Friedrich Ratzel died. Charter member of Association of American Geographers.		
1906	43	Lecturer of University of Chicago (- 1924)	1909	Reynolds: <i>The treatment of nature in English poetry between Pope and Wordsworth.</i>
1911	48	Semple: <i>Influences of geographic environment: on the bases of Ratzel's system of anthropogeography.</i>	1911	Reynolds, Professor of Chicago University.
			1914	Sister Devamata (Laura Franklin Glenn (? - ?)): <i>The Indian mind and Indian culture.</i>
			1920	Reynolds: <i>The learned lady in England 1650-1760.</i>
1921	58	President of Association of American Geographers. Professor of Clark University.	1922/23	Elizabeth Hazelton Haight (1872 - ?): <i>Italy Old and New.</i>
1924, May	61	Letter to '82 Classmates. Records of the Class of '82. Lecture at Vassar College.	1923	Reynolds, retired from Chicago University, and moved to California.
1925, June-Aug.	62	Lecturer of University of California, Southern Branch (Spring term). Letters to '82 Classmates. Class Records of the Class of '82.	1928	Sister Devamata : <i>Sri Ramakrishna and his disciples.</i> Patricia Dunkerson (Semple's grandniece, Patty's grandchild) expected to enter Vassar College
1931	68	Semple: <i>The geography of the Mediterranean region.</i>		
1932, May 8	69	Semple died in West Palm Beach, Florida.	1932	Patricia Dunkerson graduated from Vassar College.

センプルは、スコットランド系の父アレクサンダー・ボナー・センプル (Alexander Bonner Semple) とイギリス系の母エメリン・プライス・センプル (Emerin Price Semple) を持ち、裕福な事業家の父と教育熱心な母の指導のもとで子供時代を過ごした。両親は別居し、1875年、父が死亡し、兄たちが家を離れたため、センプルはほとんど女性ばかりの家族の中で成長した。読書と乗馬とテニスが好きで活発な女の子であったようである。

ヴァッサー・カレッジで学んだ長姉パティ (Patty Blackburn Semple) に続いて、センプルも1878年、同カレッジに入学する。当時、まだ15歳と最年少の学生であった。1882年にヴァッサー・カレッジを卒業する。センプルは、39人の卒業生 (Class of 1882) 中、10名の優等生の一人に選ばれている (College Notes 1882: 374)。

ルイヴィルに戻り、姉パティの設立した学校で古代史などを教えるようになる。合間に、修士号取得のために勉強を始め、修士論文“*Slavery: a study in sociology*”をヴァッサー・カレッジに提出し、1891年、修士号を得た。この間の1887年頃、ライプチヒ大学で博士号を取得したアメリカ人青年ウォード (Duren J. H. Ward) から彼の師のひとりであったラッツェルのことを聞き、その著書『人類地理学』を手渡された (Bushong 1961: 3)。センプルはラッツェルの人類地理学の方法に強く引きつけられ、彼のもとで学ぶ決意をするが、1890年代、28歳のアメリカ人女性にとって、ドイツの大学に出席することは容易なことではなかった (James et al. 1983: 30)。当時、女子学生の正式入学は許可されず、個別に教授の許可を得て、聴講する形であった。修士号取得後にドイツへ渡り、ドイツ人家庭に3ヶ月住み込んでドイツ語を上達させた後、1891年秋から1892年にかけて、ライプチヒ大学で学んだ。

ルイヴィルに戻ってからのセンプルは、地理学の研究センターの生活に入る。ラッツェルに励まされながら、1894年、初めての地理学の論文 (Semple 1894) を発表、さらに、1897年には、初めて地理学の学会誌に論文 (Semple 1897a) を発表した。この間、1895年に、再びライプチヒに留学している。最初の著書“*American history and its geographic conditions*” (Semple 1903) が出版されたのは、最初の留学からほぼ10年を経た1903年のことであった。1904年、母とラッツェルが相次いで亡くなった。

センプルが初めて大学で講義を担当したのは、1906年、シカゴ大学においてであっ

た（以後、1924年まで担当）。1904年にデイヴィス(William Morris Davis)らの設立したアメリカ地理学協会の創立メンバーとなり、1921年には会長に選出された。同年には、クラーク大学教授にも任命された。センプルの第二の著書“*Influences of geographic environment: on the basis of Ratzel's system of anthropo-geography*” (Semple 1911)は1911年に、最後の著書“*The geography of the Mediterranean region: its relation to ancient history*” (Semple 1931)は、亡くなる前年の1931年に刊行された。

センプルの生涯のなかで、本稿で取り上げている資料はどのような時期に書かれたものであつただろうか。まず、ラッツェル宛て書簡は、1893年1月から2月、つまり、ライプチヒ大学への最初の留学（1891－1892年）を終えてアメリカに帰国してまもない頃である。大学卒業後、センプルが故郷のルイヴィルでそれなりに楽しく過ごしてはいたけれども、知的な活動の面では十分に満たされない思いも抱いていたことは想像に難くない。彼女自身、留学をきっかけに人生の新しい局面が開けつつあると感じていたであろう時期に書かれた書簡といえる。他方、同窓生通信は、最初の著作の出版直前で地理学者として広く知られるようになってゆく時期（1902年）のものと同クラーク大学に着任し地理学者としての安定した地位を獲得した後の時期（1924年と1925年）のものである。これらをもとに、センプルがどのような意識で地理学者として生きていったのかをたどることにする。

2. 金ぴか時代のアメリカ合衆国

19世紀後半以降、アメリカ合衆国では、南北戦争後の再建と経済改革によつて産業化・工業化・都市化が急激に進み、社会のあらゆる面で大きな変化が起きた。センプルが成長し、ヴァッサーやライプチヒで学び、ラッツェル宛て書簡を書いた頃までの時期は、まさに、いわゆる金ぴか時代（The Gilded Age）であつた（Ⅱ章2節、訳注[82]参照）。本稿で取り上げる資料に記載されたことがらの中からいくつかのトピックスを取り上げ、当時の変化がどのように急速で大きなものであつたか、見てみよう。

(1) 運輸・交通のテクノロジー

運輸・交通の面では、運河－鉄道－自動車とめまぐるしい変遷があつた（図2）。ア

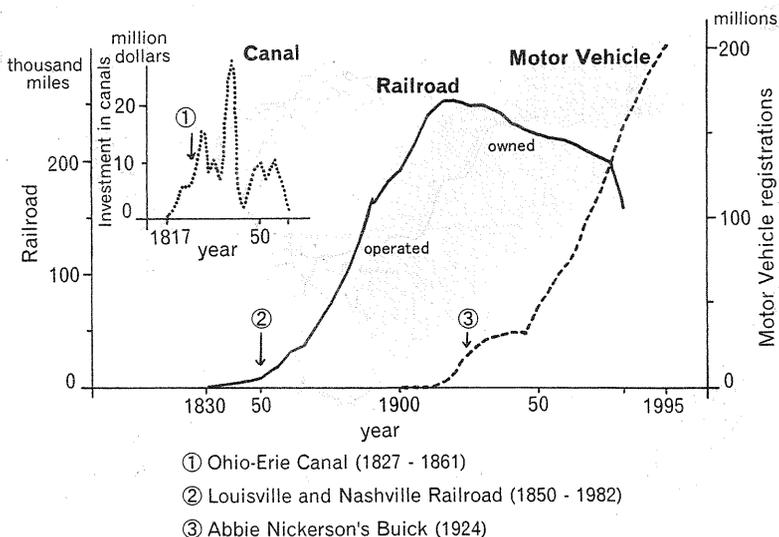


図2 19世紀から20世紀における運河と鉄道と自動車保有台数の変遷
 Figure 2. Transportation technologies during the 19th and 20th centuries.

Source: *Historical statistics of the United States, millennial edition*, Vol. 4(2006), Table Df339-342, Df684-689, Df874-881, and Df927-955.

アメリカの内陸運河の時代は1850年頃には終わり、それと入れ替わるように鉄道網の密度が急速に高まっていった。とりわけ、1890年前後の鉄道の進展はめざましかった。ケンタッキーでも状況は同様であった(図3)。オハイオ-エリー運河は、1827年に部分的に航行を開始したが、1861年には早々と運河としての役割を終えた(Scheiber 1969)。また、ルイヴィル-ナシュビル鉄道は、1850年に設立され、南北戦争中の物資輸送やケンタッキーを含む沿線地域の発展に大きな役割を果たし、ニューオーリンズにまで路線を延長した時期もあったが、1982年には閉鎖されている(Klein 1972)。20世紀初頭に鉄道は最盛期を迎えるが、その頃には自動車の普及が始まっていた。1900年頃、馬でケンタッキーの山間に住む人々を丹念に調査していたセンプル(Semple 1901)が、わずか20年余り後には、車でカリフォルニアの断層を見て回り、ビュイックを運転する級友にウースター(Worcester, Massachusetts)の住所を教えている。もっとも、1920年当時の車の普及率(千人当たり87.3台、II章3節、訳注[9]を参照)からすると、女性、それも60歳を超えた女性で車を所有し乗り回す人はそれほど多くなかったであろう。

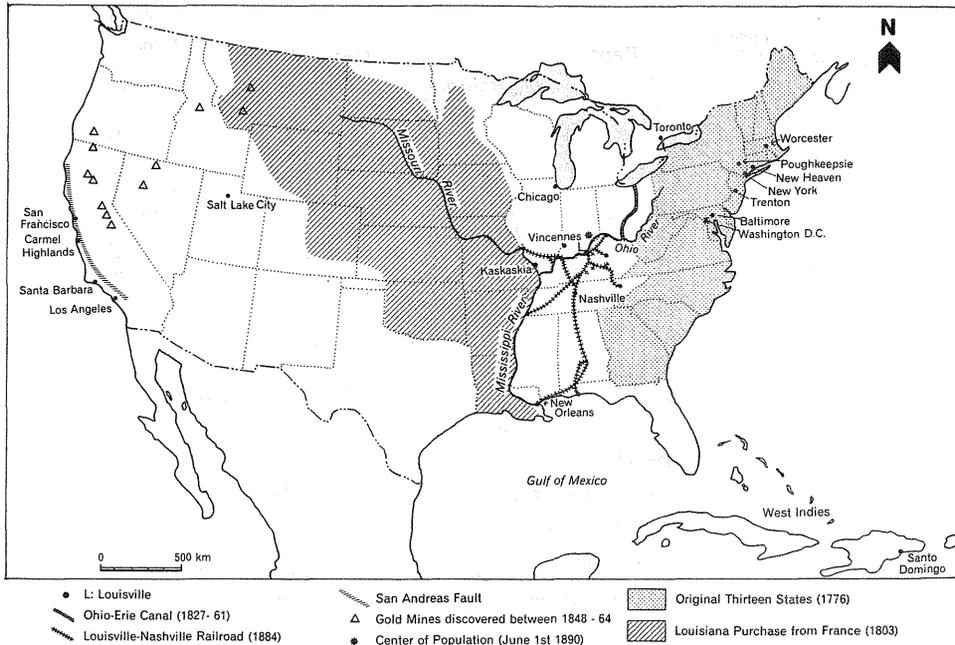


図3 センプルの手紙で言及されている主要な地名および関連する地名
 Figure 3. Place names appearing in Semple's letters and the related sites.

Source: 『アメリカ歴史地図』(2003) (*The Routledge atlas of American history*, fourth edition); *Ohio canal era* (1969); *History of the Louisville & Nashville railroad* (1972).

(2) 高等教育

図4に、学士と修士と博士号の取得状況をグラフで示している。アメリカで、男子学生に約200年遅れて、最初の女子学生が大学に入学を認められたのは、1837年のことであった (Newcomer 1959: 5)。センプルが学んだヴァッサー・カレッジは女子大学の中では比較的早い1861年に創立されている (II章2節、訳注[67]参照)。19世紀後半の時期は、大学入学はごく限られた人たちのものであったし、女性の場合、裕福で教育に熱心な進歩的な家庭の子供でなければ、かなわないことであった。1930年代以降、大学への進学が増え始め、現在では学部学生の半数以上を女性が占めるに至っている。

修士の状況も同様であるが、いっそう数が限られる。1891年にセンプルが修士号を取得したことは、女性としてはきわめて希有なことであった。修士号も、現在では、女性の取得者が男性のそれを上回っているが、博士号は依然として男性優位の状況が続いている。後年シカゴ大学教授となるマイラ・レイノルズ (Myra Reynolds) が、1895年にシカゴ大学で博士号 (英文学) を取得したのは、文字通り、先駆けであった。

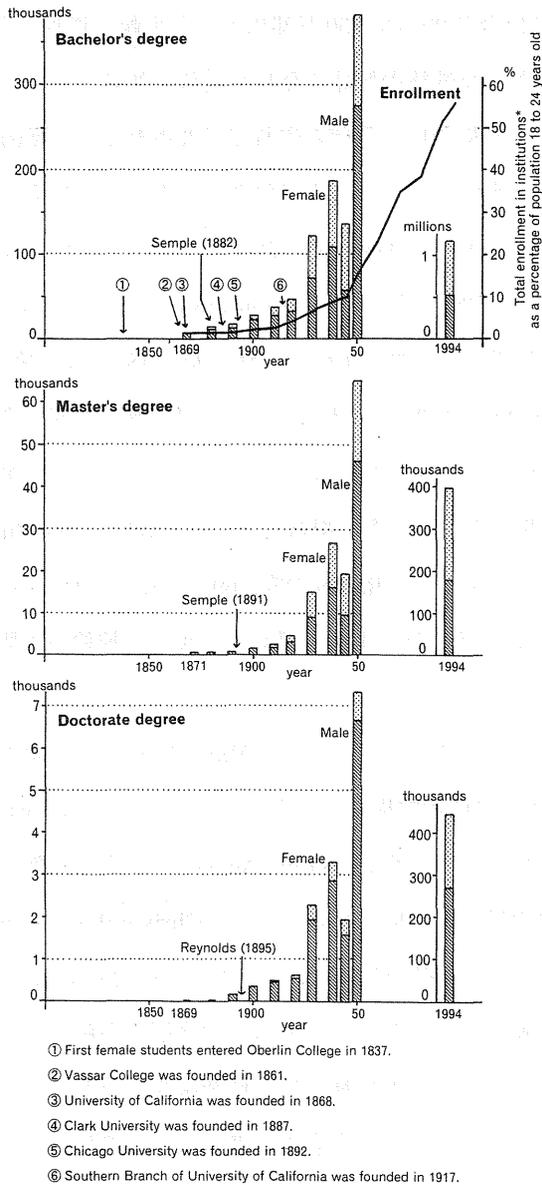


図4 学士・修士・博士の学位数の推移（1869年から1995年）

Figure 4. Degrees conferred by institutions of higher education: 1869 - 1995.

* four-year and two-year institutions of higher education.

Source: *Historical statistics of the United States, millennial edition*, Vol. 2 (2006), Table Bc523-536, and Bc568-587. *A century of higher education for American women* (1959).

(3) 高級総合誌

1885年に10万部以上発行されている総合誌の数と総発行部数は4誌で60万部未満であったが、1905年には合計20誌で550万部以上へと大幅に増加した (Mott 1957: 8)。この背景には、さまざまな性格の雑誌の発刊や安価な雑誌の登場のほか、読者層の拡大などの要因がある。本稿で取り上げる資料で言及されたり、Ratzel (1893)で引用された雑誌はいずれも、当時のいわゆる高級総合誌であった：社会や政治に関わる論争に積極的に加わった*The North American Review* (1815~)や*The Century Magazine* (1881~)、よりニュース志向の強い*The Forum* (1886~)や*The Arena* (1889~1909)、伝統的に文化・文学の比重が高い*The Atlantic Monthly* (1857~)、後発でより安価な*The Scriber's Magazine* (1887~1939)。これらのうち、南北戦争以前に創刊された最も古い雑誌の一つ*The North American Review*はニューイングランドの知性の精華とも言われ、アメリカ思想に関する記事を多く掲載していた (Tebbel and Zuckerman 1991:12)。ラッツェルも同誌を誉めている (Ratzel 1893: 697)。なお、*The Century Magazine*や*The Scriber's Magazine*はイラスト付き雑誌で、美しい挿絵や木版画が添えられている。

これらの雑誌には、マーク・トウェーン (Mark Twain) の小説も、ルーズヴェルト (Theodore Roosevelt) の政治的提言も、また、ダーウィン (Charles Darwin) の進化論論争も掲載されているし、アガシ (Louis Agassiz) による自然史研究のシリーズも登場する。南北戦争の歴史的回顧やコロンブス (Christopher Columbus) のアメリカ発見から400年周年の記事も掲載されている。まさに総合誌であった。興味深いのは、学術論文も数多く掲載されていることである。学会制度が確立する以前の時期、まだ独自の学会誌を持たなかった学問領域では、研究論文の公表先としてこうした雑誌が利用されていたのであろう。高級総合誌の読者層は、学者集団とも重複するようなレベルの高い知識層であったことが伺える。

(4) 社会の動乱と科学の変革

他方、南北戦争後の南部問題や黒人問題の深刻化とともに、アメリカ国民の定義ともかかわる人種問題への関心の高まりや1898年の米西戦争につながる帝国主義的な海外進出の動きなどが明確になったのも、この時期の特徴である (フランクリン 1978:

303-301; 貴堂 2005: 113-139)。資本主義社会が成熟し労働者階級が形成される過程で、白人と黒人との厳しい競合が生まれ、黒人を階級制度で縛るという帝国主義に固有の要素も顕在化する。こうしたことと深く関わるのが、1870年代以降の黒人に対するリンチ事件の頻発や、19世紀末における白人優位の人種隔離体制の確立である。リンチ事件の横行は、サンプルもラッツェル宛て書簡で取り上げているが、1890年代初めころには合衆国全体で年間200人を超える犠牲者が出た。これをピークに徐々に減少してゆくが、被害者の約3/4以上が黒人であった (National Association for the Advancement of Colored People: 1919) (図5)。リンチ事件の分布は、黒人人口率の高い南部諸州に偏っていたが、中西部にも広く及び、サンプルの住んでいたケンタッキーも事件発生の多い州であった。(図6)。

19世紀から20世紀にかけて社会全体が大きく揺れ動くなかで、学問の世界でも、宗教から科学への参照枠の移行が進行する。その大きなきっかけの一つが、1856年に発表されたダーウィンの『種の起源』であった (松永 1996)。進化論の影響は生物学をはじめとする自然科学の諸分野だけでなく、広く社会にも及んだ。諸科学の成果を折衷して人間の進化の到達点に自分たちを置こうとするニューイングランド知識層たちの人種差別主義や、誰を、また、どの人種を国民とみなすかというナショナル・アイデンティティをめぐる議論も、こうした進化論の影響と無縁ではない (Gelfand 1954: 39; Livingstone 1984)。

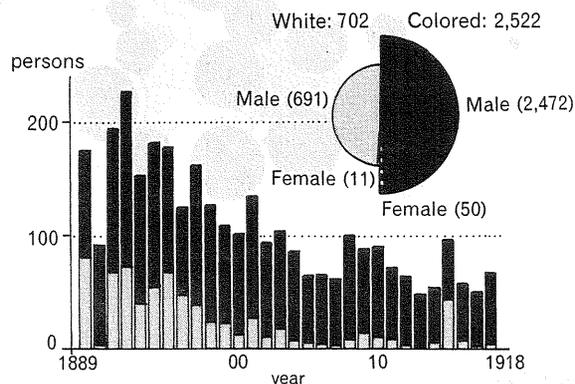


図5 リンチ被害者数の推移

Figure 5. Number of white and colored persons lynched in United States, 1889 - 1918.

Source: *Thirty years of lynching in the United States, 1889-1918* (1919), Table No.1 (p.29).

最後に、この動乱の時代に見落とせない要素を挙げておく。それは急速な諸変化への反動のように、伝統的な社会的価値と調和するような秩序だった認識世界を求める保守主義が根強く見られたことである。しがたって、そうした人々の願いに学問的根拠をもって応えることが望まれ、支持される状況も確かに存在したであろう。この時代の科学および学者については、6節と7節で詳述することにする。

このような社会も科学も大きく揺れる時代のなかで、ラッツェルとサンプルはそれぞれ、どのような立場で地理学研究を行っていたのであろうか。次の3節と4節では、ラッツェルとサンプル、それぞれがどのような地理学的分析や考察を行っていたか、サンプル書簡に登場するアメリカ合衆国のさまざまなトピックスを中心に検討する。この作業は、サンプルからラッツェルへ何が提供されたか、また、サンプル自身ができるように研究を出発させたかという二つの面を明らかにすることにもつながる。

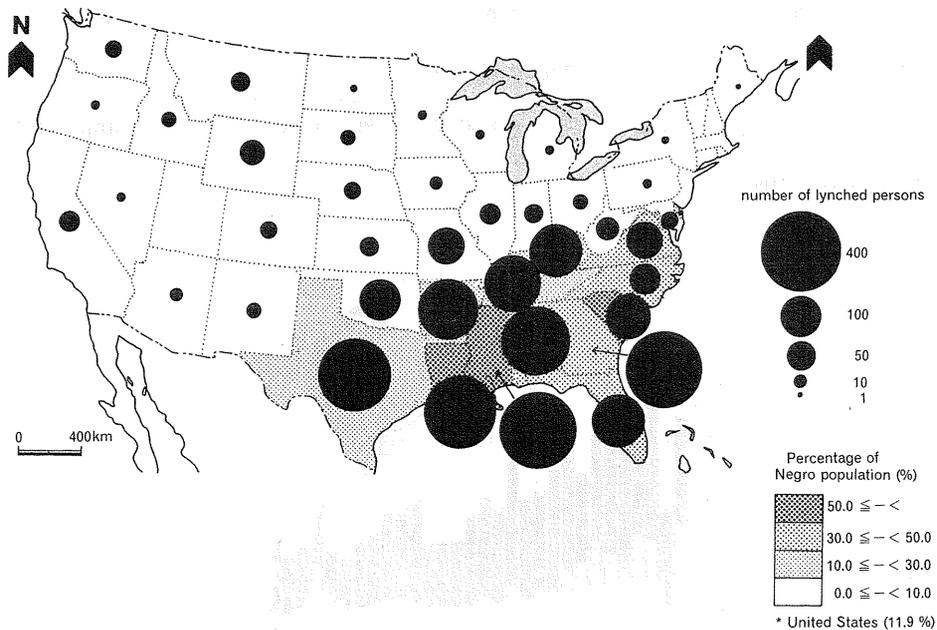


図6 リンチ被害者の分布

Figure 6. Regional distribution of persons lynched in the United States, 1889 - 1918.

Source: *Thirty years of lynching in the United States, 1889-1918* (1919), Table No.3 (pp.31-32); *Report on population of the United States at the Eleventh Census: 1890. Vol. 1, Part I* (1895).

表3 センプルの書簡の記載内容とラッツェルのAmerika (1893)の記載内容の対照表
 Table 3. Correspondence between the accounts of Semple's letters and Ratzel's *Amerika* (1893)

	Semple's letters	Ratzel's <i>Amerika</i> (1893)	
		ルイヴィル在住の Ellen C. Semple 嬢の協力に謝辞。(序)	S. VII
1-a	<p>黒人と生命保険について (January 2, 1893, pp.2-7; January 30, 1893, pp.1-5)</p>	<p>「生命保険では、白人からよりも黒人やムラートからより高い保険料を徴収する。死亡数の多さが劣悪な生活環境だけによるものではなく、経済的に恵まれた境遇にいる黒人しか生命保険をかけることができない。」</p> <p>「私の手元には、大変優秀なアメリカの生命保険についての報告が2, 3ある。それらはすべて、黒人が生命保険を掛けることへの反感・嫌悪を示している。いずれの場合もその動機は同じである：黒人の寿命は白人のそれよりも短いと評価されるからである。原因として、一部には、生来の病気がちな体質が、また、一部には、彼らの生活様式や環境の不健全さが挙げられている。頻繁にみられる疾病として、結核とリューマチが挙げられている。ところで、黒人は、通常、直系の先祖の寿命と健康状態について規定された情報を確実に回答できないのである。そのため、あっさりとしり込みを却下されるのである。」 (第X章 黒人、「増加、出生、死亡」)</p>	<p>S.274 -275</p> <p>S.274 -275</p>
1-b	<p>「マクガイア氏からの手紙」 (January 2, 1893, p.2)</p> <p>Maguire's letter written in December 27, 1892, pp.1-2.</p>	<p>「西部のある優秀な生命保険外務員が、このことならびに黒人の生命保険に対する合衆国憲法の第15修正との関係について、次のように書いている：『幸いなことに、全ての生命保険会社が所有しております統計表によれば、一つの人種としての黒人人種が白人人種よりも短命であることを裏付ける確かな証拠が見られます。自然の法則が人間の作った法律の執行を阻止していることは明らかです。』」 (第X章 黒人、「増加、出生、死亡」)</p>	<p>S.274 -275</p>
2-a	<p>「黒人問題について書かれた非常に優れた論文」 (January 2, 1893, pp.1-2)</p>	<p>可能性がある文献</p> <p>(1) Walker, R. (1891):The colored race of the United States. <i>The Forum</i>, Vol.11. p.501-509. (p.502を引用)</p> <p>(2) Mayo, A. D. (1890) : Progress of the Negro. <i>Forum</i>, X, p.335-345. (p.345を引用) (3)その他(表参照)</p> <p>(第X章 黒人、「増加、出生、死亡」、「ムラート」)</p>	<p>S.272</p> <p>S.292</p>
2-b	<p>「Arena誌に掲載された黒人の寿命と増加についてのとても役に立つ論文」 (January 2, 1893, p.8)</p>	<p>Hoffman, F. L. (1892): Vital statistics of the Negro. <i>The Arena</i>, Vol.5, No.5, pp.529-542.</p> <p>(第X章 黒人、「増加、出生、死亡」)</p>	S.273
2-c	<p>人種間の混血について (January 2, 1893, pp.9-10; January 30, 1893, p.5)</p> <p>「ゲイジ氏」 (January 2, 1893, p.1)</p>	<p>ゲイジ氏の博士論文『合衆国における黒人問題』から混血人口率や黒人とムラートの能力についての論述を引用。</p> <p>序：G. W. Gage 博士の協力に謝辞。</p> <p>(第X章 黒人、「ムラート」)</p>	<p>S.292 -293</p> <p>S.294</p> <p>S.VII</p>

表3 (続き)

Table 3. (Continued)

	Sample's letters	Ratzel's <i>Amerika</i> (1893)	
2-d	「タールと羽の私刑」 (January 2, 1893, p.11) 「ケイブルの論文」と 「グレイディの返答」 (January 2, 1893, p.12)	黒人に対するリンチの横行について。関連して、2論文を引用：George W. Cable (1885): The Freedman's case in equity. <i>The Century Magazine</i> , Vol.29, No.3, pp.409-418. Henry W. Grady (1885): In plain Black and White: a reply to Mr. Cable. <i>The Century Magazine</i> , Vol.29, No.6, pp.909-917. (第X章 黒人、「黒人の政治的権利」)	S.283
2-e	「ダドリー司教による論文」 (January 2, 1893, 12)	黒人とキリスト教の関係について言及した箇所「ケンタッキーのイギリス聖公会の司教が述べている」として引用。Dudley, T. U. (1885): How shall we help the Negro? <i>The Century Magazine</i> , Vol.30, No.2, 1885, p.273-280. (第X章 黒人、「黒人の教育」)	S.285
3-a	西部の人々の類型について (January 2, 1893, pp.14-15)	「西部では、・・・カンザス、アイオワ、アーカンソー、テキサスといった辺境の地はどことも、最初は、きちんと管理された東部諸州の規則や習慣が性に合わない大勢の人たちの駆け込み場所であった。さまざまな犯罪者は、自分自身しか頼ることのできない、この広大な地に、本質的な故郷を見いだしたのである。他方、雇用主を持たない、落ち着きのない人々がどこかに定着しようとやってきて、彼らに加わった。また、第三の集団として、大勢の商人や古物商がこの社会に押しかけてきて、財産や生命の危うさや不快な経験を埋め合わせるような巨利を得ようとしたのである。こうした巨利の獲得は文明の周縁の地では頻繁に起こりうるものなのである。この変化が大きく不自由なことも多い慌ただしさが、人々を矯正したことは明らかである。彼らは、初めて、必要なことを辛抱強く行うことを学んだのである。」 (第XXVI章 国民と社会、「社会」)	S.713
3-b	西部と東部の境界と 人々の気質 (January 30, 1893, pp.6-7)	「新世界には、旧世界に見られるよりも多くのさまざまな社会階層がある。合衆国の地方ごとに、教養や風俗習慣、富、労働の分業などについて記述することが可能だとすれば、東から西へ順に、3つの文化地帯を明瞭に見てとることができよう：最も高度に文化が発達している北東部地帯、五大湖-オハイオ-ミシシッピにかけての中間地帯、新しい文化の見られる西部地帯。これらの文化地帯と人口密度帯、さらに経済地域の間には、密接な関係がある。・・・ここでは、これら3つの地帯の主な特徴、とくにアメリカ的な特徴や西部的な特徴を、手短に取り上げる。 東部の最も歴史の古い諸州、とくにニューイングランド諸州には、ヨーロッパの生活の最良の面を思い起こさせるような多くの特徴が見られる。教養と富の中心から離れるほど、アメリカ社会は一風変わった特徴を強く示すようになる。」 (第XXVI章 国民と社会、「社会」)	S.711 -712

表3 (続き)

Table 3. (Continued)

	Sample's letters	Ratzel's <i>Amerika</i> (1893)	
		<p>受け継がれている。そうした自然愛には、健全さや教訓的などところがある。新しい国で精神的に環境になじむことやその国と精神的に結びつくこと、つまりより高度な意識で住み慣れることは、自然愛を通じてより容易になるのである。未だ手つかずの天然資源を大がかりに搾取することに必然的に伴う自然の荒廃や浪費が和らげられるのである。こうした自然感覚は、まず最初に、少なからぬドイツ移民の間で芽生えたのである。」</p> <p>「学術の分野でもまた、イギリスやスコットランド的なものを模範として、『風景』が評価されている。その証拠は、Haydens の <i>The great West</i>(1880)である。これは、主としてすばらしい風景を大勢の読者に紹介しようとする本であり、啓蒙的な役割を果たしていた。アメリカ人の手で書かれた最良の合衆国の地理である、J. D. Whitney の <i>United States</i> (1889)が「風景画」的な1章を含んでいることもまた、特徴的である。普通、ヨーロッパの地理学では、こうした例は見られない。」</p> <p>(第VI章 自然と国民性)</p>	S.174
5	オハイオーエリー運河 (January 2, 1893, p.13)	<p>「近年、熱意を持って発表された唯一の河川運河計画は、エリーーオハイオ運河であるが、運河網の結合度を上げるものでない以上、州政府の援助を得て、ペンシルヴェニアの民間資本で建設されることにならう。オハイオの公共事業委員会による調査によると、エリーーオハイオ運河は、Conneaut (湖)経由でピッツバーグとエリー湖を結びつけようとするものである。この計画は、ピッツバーグの石炭業界や鉄鋼業界から生まれた・・・」</p> <p>(第XXI章 交通路と交通手段、「五大湖地方の運河」)</p>	S.553
6-a	<p>「国勢調査報告」 (January 2, 1893, p.11-12; February 11, 1893; February 19, 1893. pp.1-2)</p> <p>VI (Report on manufacturing industries, Part I, II, and III. 1895)</p> <p>VII (Report on mineral industries, 1892)</p> <p>VIII (Report on population and resources of Alaska, 1893)</p> <p>IX (Report on statistics of churches in the United States, 1894)</p>	<p><i>Census Bulletin</i>, No.32: Distribution in accordance with mean annual rainfall. (February 24, 1891)</p> <p><i>Census Bulletin</i>, No.48: The white and colored population of the South: 1890. (April 7, 1891)</p> <p><i>Census Bulletin</i>, No.52: Urban population in 1890. (April 17, 1891)</p> <p><i>Census Bulletin</i>, No.150: Population of Alaska - official count.. (November 28, 1891)</p> <p><i>Census Bulletin</i>, No.194: Population by color, sex, and general nativity: 1890. (June 22, 1892)</p> <p><i>Census Bulletin</i>, No.352: Nativity and parentage of prisoners and paupers. (February 9, 1893)</p> <p><i>Report on mineral industries in the United States at the Eleventh Census. Vol. 7. (1892)</i></p>	S.145 S.270 S.315 S.217 S.270 S.VII S.495
6-b	「ロバート・P・ポーター氏」 (February 11, 1893)	<p>ワシントンのロバート・P・ポーター氏へ謝辞 (序)</p> <p>(Porter氏は、第11回センサスの長官(任期は April 17, 1889 - July 31, 1893))</p>	S.VII

3. センプルからラッツェルへ

ラッツェル宛ての3通の書簡に書かれているさまざまな事柄は、その文面から、ラッツェルがセンプルに問い合わせたり依頼したものであることがわかる。センプルが最初にライプチヒ留学していた1892年の夏学期、ラッツェルは、アメリカ合衆国についての講義を行っている（II章2節、訳注[2]を参照）。翌1893年、ラッツェルは“*Die Vereinigten Staaten von Amerika, Zweiter Band. Politische und Wirtschafts-Geographie*” (Ratzel 1893) を刊行している。1873-1875年にアメリカ旅行をし、“*Die Vereinigten Staaten von Amerika, Erster Band. Physikalische Geographie und Naturcharakter*” (Ratzel 1878) を刊行してから後、大きく変化しているアメリカの情報を留学生センプルを通じて入手しようと考えたとしても不思議ではない。センプルがラッツェルに与えた回答や情報を、ラッツェルはどのように活かしたのであろうか。

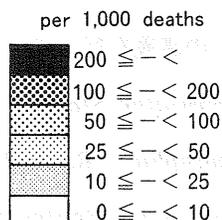
表3は、センプルの書簡中の項目毎に、*Amerika* (1893) での記載内容を整理したものである。書簡で取り上げられた主要な話題のほとんどが、ラッツェルの著書に活用されている。センプルの書簡が大切に保管されていたのは、やはりラッツェルにとって価値があったからであろう。以下では、主な項目について内容を検討する。

(1) 黒人の生命保険

ラッツェルは、この問題について、黒人の死亡率の高さや劣悪な疾病状況を踏まえて、保険会社が黒人と契約を結びたがらない事情は正当なことと認めている。センプルが聞き取り調査に出向いたマクガイア氏の手紙から引用しつつ、合衆国では、保険料に関する差別を禁ずる法律（人間の作った法律）が制定されているにもかかわらず、罹患率や死亡率の高さ（自然の法則）がそれを遮っていることを、好ましく受け止めている。

ラッツェルが黒人の疾病や死亡に関する統計に熱心なのは、人類学的な関心の強さからであろう。1890年当時の白人と黒人とアメリカ・インディアン¹の死因を比較すると（図7）、いずれも肺病が最大の死因であるが、圧倒的に肺病での死亡が多いのがアメリカ・インディアンである。肺病による黒人の死亡も白人のその約1.5倍である。白人は肺病について神経性疾患による死亡が多いが、黒人では肺炎が多い。また、当時は、黒人の死亡率、とりわけ乳幼児死亡率が高かったため、アメリカ・インディア

Causes of deaths	White	Colored*	American Indians
はしか (Measles)			
猩紅熱 (Scarlet fever)			
ジフテリア (Diphtheria)			53.26
チフス (Typhoid fever)			
糖尿病 (Diarrheal diseases)	90.66	76.26	66.38
マラリア (Malarial fever)			
性病 (Venereal diseases)			
腺病 (Scrofula and tabes)			
肺病 (Consumption)	114.55	166.41	290.54
悪性腫瘍 (Cancer and tumor)			
神経系疾患 (Diseases of the nervous system)	110.87	80.76	
循環器系疾患 (Diseases of the circulatory system)	60.02		
気管支炎 (Bronchitis)			
肺炎 (Pneumonia)	89.90	98.03	98.57
その他の呼吸器疾患 (Other diseases of the respiratory system)			53.66
消化器系疾患 (Diseases of the digestive system)			
泌尿器系疾患 (Diseases of the urinary system)			
産婦人科系疾患 (Diseases of the female organs of generation, with pregnancy)			
傷害 (Accidents and injuries)		63.64	



* includes 1,113 Chinese.

図7 人種別の主な死亡原因と死亡率

Figure 7. Number of deaths and the proportion reported as due to each of certain causes during the census year, per 1,000 deaths from all known causes, among the whites, the colored and the American Indians.

Source: *Report on vital and social statistics in the United States at the Eleventh Census: 1890*, Vol. 6 (1896), p.31.

ン同様、黒人は消滅してゆくという予想もあった (Hoffman 1892) (Ⅱ章2節、訳注 [13]を参照)。確かに19世紀末ころは、黒人の死亡率が白人のそれを上回っていたが、次第に差が縮小し、近年は、やや逆転するまでになっている (図8)。白人も黒人も、現在に至るまで人口増加が続いている (図9)。ただし、これについては、出生・死亡という自然動態だけでなく、移民の要素を含めて検討する必要がある。

黒人の生命保険に関するラッツェルの記述からは、黒人への反感や嫌悪があらさまに伺える。こうしたラッツェルの黒人観は、“*Reisebilder aus Liberia*” (Büttikofer 1890) を論じた書評でも明確である。黒人をクリスチャンに教化する役割を担うのが優れた白人である。黒人は自分たちの労働に適した地である植民地において、ヨーロッパもしくは合衆国によって管理されることこそが、彼らの真の解放につながるのだと、帝国主義を正当化している (Ratzel 1892)。

ところで、サンプルとラッツェルが問題にしている生命保険は、まさに近代的なシ

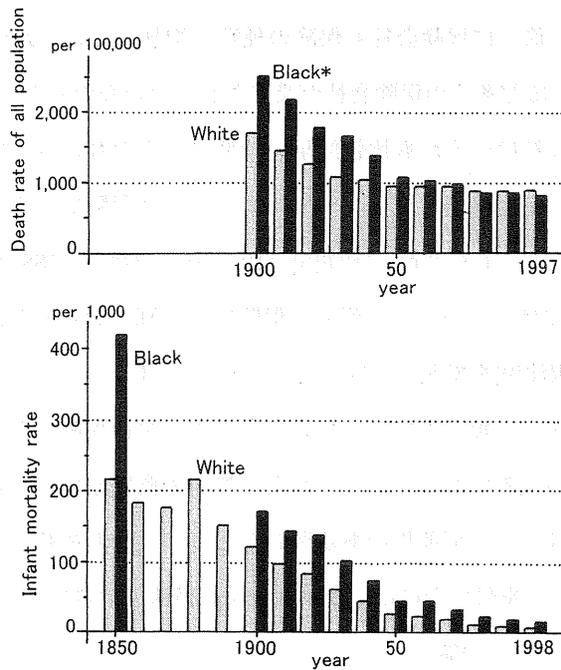


図 8 死亡率の推移

Figure 8. Changes in mortality in the United States: 1850 - 1998.

* non White (until 1950) and Black (since 1960).

Source: *Historical statistics of the United States, millennial edition*, Vol. 1 (2006), Table Ab952-987, and Ab912-927.

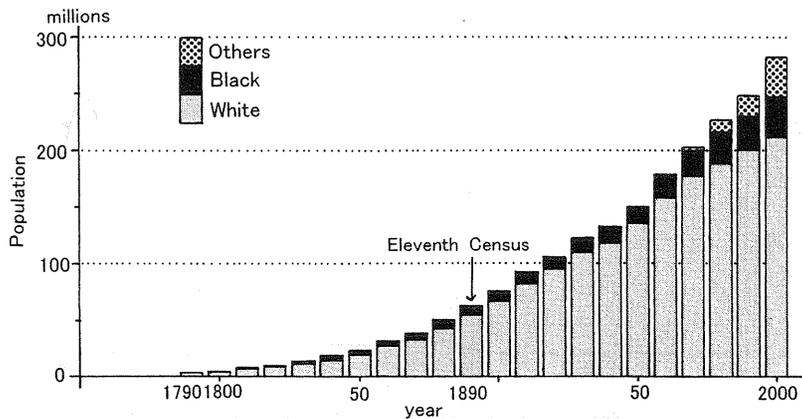


図 9 合衆国の人口の推移

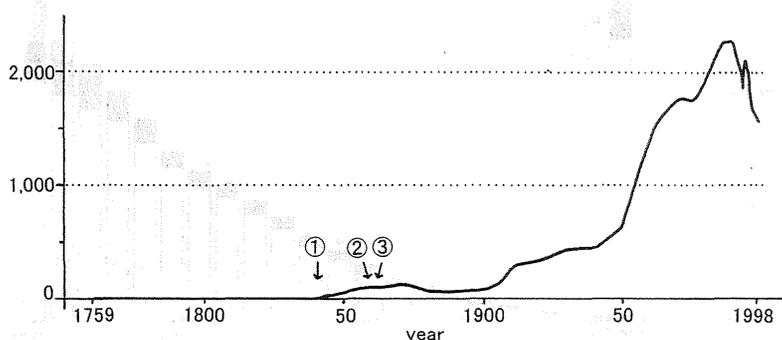
Figure 9. Changes in population in the United States: 1790 - 2000.

Source: *Historical statistics of the United States, millennial edition*, Vol. 1 (2006), Table Aa1-5, and Aa145-184. *Profile of general demographic characteristics* (2000).

システムである（スタルソン 1981）。合衆国で最初の保険会社が設立されたのが、1759年である。その後、徐々に保険会社も保険の種類も増加していったが、1890年頃の合衆国には、まだそれほど多くの保険会社が設立されてはいなかった（図10）。センプルの書簡に登場する3社はいずれも比較的早い時期に設立されたものであり、それらのうち、ニューヨーク生命保険とジョン・ハンコック生命保険は、現在では有数の大規模な会社となっている（Ⅱ章2節、訳注[5], [10], [38]を参照）。1884年にはマサチューセッツ州、1889年にはニューヨーク州で、保険料の差別を禁止する法律が制定されている（Ⅱ章2節、訳注[9]を参照）。このことについて、センプルは、黒人への政治家のご機嫌取りとする穿った捉え方を示しているものの、生命保険における平等の追求としては、非常に早い試みであった。こうした合衆国の動向を踏まえると、様々な人種の共存する国で深刻化する可能性のある問題として、人種間の死亡率の違いやそれと関わる保険料設定に目を付けたのは、ラッツェルの慧眼と評価できる。

(2) 黒人問題についての論文

センプルからラッツェル宛てに送付された雑誌論文のうち、特定できたケイブル (Cabel 1885)、グレイディ (Grady 1885)、ダドリー (Dudley 1885) および ホフマン (Hoffman 1892) の論文はいずれも、*Amerika* (1893) で引用されているし、これらの他に同書で引用している黒人問題の雑誌論文2編 (Mayo 1890; Walker 1891) も、セン



①Mutual Life Insurance of New York was founded in 1841.

②Washington Life Insurance was founded in 1860.

③John Hancock Mutual Insurance was founded in 1862.

図10 合衆国の保険会社数の推移

Figure 10. Changes in number of life insurance companies in the United States: 1759 - 1998.

Source: *Historical statistics of the United States, millennial edition*, Vol. 3 (2006), Table Cj713-722.

表4 黒人問題に関する主な雑誌論文 (1881年 - 1893年)

Table 4. Articles on Negro problem appearing in major American magazines (1881-1893)

Sample が書簡 で言及	Ratzel が Amerika に引用	Article
○	○	Cable, George W. (1885): The Freedman's case in equity. <i>The Century Magazine</i> , Vol.29, No.3, pp.409-418.
○	○	Grady, Henry W. (1885): In plain Black and White: a reply to Mr. Cable. <i>The Century Magazine</i> , Vol.29, No.6, pp.909-917.
○	○	Dudley, T. U. (1885): How shall we help the Negro? <i>The Century Magazine</i> , Vol.30, No.2, 1885, pp.273-280.
○	○	Hoffman, F. L. (1892): Vital statistics of the Negro. <i>The Arena</i> , Vol.5, No.5, 1892, pp.529-542.
		<Negro problemあるいはNegro questionの語句がタイトルに含まれる論文>
		Shaler, N. S. (1884): The Negro problem. <i>The Atlantic Monthly</i> , Vol.54, No.325, pp.696-709.
		Scarborough, W. S. (1891): The Negro question from the Negro's point of view. <i>The Arena</i> , Vol.4, No.2, pp.219-222.
		Bryce, J. (1891): Thoughts on the Negro problem. <i>The North American Review</i> , Vol.153, No.421, pp.640-660.
		Page, T. N. (1892): A Southerner on the Negro question. <i>The North American Review</i> , Vol.154, No.425, pp.401-413.
		Watson, T. E. (1892): The Negro question in the South. <i>The Arena</i> , Vol.6, No.5, pp.540-550.
		<Negro の語句がタイトルに含まれる論文>
		Gardiner, C. A., Morgan, J. T., Douglass, F., Vance, Z. B., Harris, J. C., Greener, R. T., Armstrong, S. C., Johnson, O., Walworth, J. H., and Emerson, J. A. (1884): The future of the Negro. <i>The North American Review</i> , Vol.139, No.332, pp.78-99.
		Chalmers, H. H. (1881): The effects of Negro suffrage. <i>The North American Review</i> , Vol.132, No.291, pp.239-248.
		Davis, N. K. (1886): The Negro in the South. <i>The Forum</i> , Vol.1, pp.126-135.
		Colquitt, A. H. (1887): Is the Negro vote suppressed? <i>The Forum</i> , Vol.4, pp.562-571.
		Hampton, W. (1888): What Negro supremacy means. <i>The Forum</i> , Vol.5, pp.383-395.
		Cable, G. W. (1888): What shall the Negro Do? <i>The Forum</i> , Vol.5, pp.627-639.
		Morgan, J. T. (1889): Shall Negro majorities rule? <i>The Forum</i> , Vol.6, pp.586-599.
		Scarborough, W. S. (1889): The future of the Negro. <i>The Forum</i> , Vol.7, pp.80-89.
		Godkin, E. L. (1889): The republican party and the Negro. <i>The Forum</i> , Vol.7, pp.246-257.
		Synder, J. (1889): Prejudice against the Negro. <i>The Forum</i> , Vol.8, pp.218-224.
		Mathews, W. (1889): The Negro intellect. <i>The North American Review</i> , Vol.149, No.392, pp.91-102.
		Shaler, N. S. (1890): The nature of the Negro. <i>The Arena</i> , Vol.3, No.1, pp.23-35.
○		Mayo, A. D. (1890): The progress of the Negro. <i>The Forum</i> , Vol.10, pp.335-345.
		Price, J. C. (1891): Does the Negro seek social equality? <i>The Forum</i> , Vol.10, pp.558-564.
		Smith, Charles Forster (1891): The Negro in Nashville. <i>The Century Magazine</i> , Vol.42, No.1, pp.154-156.
		Hubbard, J. M. (1891): An opportunity for the American Negro. <i>The North American Review</i> , Vol.152, No.410, pp.116-118.
		Barrows, S. J. (1891): What the Southern Negro is doing for himself. <i>The Atlantic Monthly</i> , Vol.67, No.404, pp.805-815.
		Harris, W. T. (1892): The education of the Negro. <i>The Atlantic Monthly</i> , Vol.69, No.416, pp.721-736.
		Cable, G. W. (1892): Does the Negro pay for his education? <i>The Forum</i> , Vol.13, pp.640-649.
		Carroll, H. K. (1892): Religious progress of the Negro. <i>The Forum</i> , Vol.14, pp.75-84.

表4 (続き)

Table 4. (Continued)

Sample が書簡 で言及 ○	Ratzel が <i>Amerika</i> に引用	Article
		<p><race の語句がタイトルに含まれるもの></p> <p>Breckinridge, Hon. WM. C. P. (1890): The race question. <i>The Arena</i>, Vol.2, No.1, pp.39-56.</p> <p>Hampton, S. W. (1890): The race problem. <i>The Arena</i>, Vol.2, No.2, pp.132-138.</p> <p>Morgan, S. J. T. (1890): The race question in the United States. <i>The Arena</i>, Vol.2, No.4, pp.385-398.</p> <p>Scarborough, W. S. (1890): The race problem. <i>The Arena</i>, Vol.2, No.5, pp.560-567.</p> <p>Seiders, C. A. (1890): The race problem: a criticism of Senator Hampton's paper. <i>The Arena</i>, Vol.2, No.5, pp.633-635.</p> <p>Welling, J. C. (1883): Race education. <i>The North American Review</i>, Vol.136, No.317, pp.353-363.</p> <p>Shaler, N. S. (1886): Race Prejudices. <i>The Atlantic Monthly</i>, Vol.58, No.348, pp.510-518.</p> <p>Eustis, J. B. (1888): Race Antagonism in the South? <i>The Forum</i>, Vol.6, pp.144-154.</p>
○		<p>Walker, F. A. (1891): The Colored Race in the United States. <i>The Forum</i>, Vol.11, pp.501-509.</p>
		<p><その他></p> <p>Douglass, F. (1881): The color line. <i>The North American Review</i>, Vol.132, No.295, pp.567-577.</p> <p>Cable, G. W. (1885): The silent South. <i>The Century Magazine</i>, Vol.30, No.5, pp.674-691.</p> <p>Hammond, W. A. (1886): The Coming Man. <i>The Forum</i>, Vol.1, pp.75-82.</p> <p>Camp, E. M. (1886): Our African Contingent. <i>The Forum</i>, Vol.1, pp.562-571.</p> <p>Ward, L. F. (1888): Our Better Halves. <i>The Forum</i>, Vol.6, pp.266-275.</p> <p>Cable, G. W. (1888): A Simpler Southern Question. <i>The Forum</i>, Vol.6, pp.392-403.</p> <p>Tourgée, A. W. (1889): Shall White Minorities Rule? <i>The Forum</i>, Vol.7, pp.143-155.</p> <p>Tourgée, A. W. (1890): The Right to Vote. <i>The Forum</i>, Vol.9, pp.78-92.</p> <p>Chandler, W. E. (1890): National Control of Election. <i>The Forum</i>, Vol.9, pp.705-718.</p> <p>Morgan, J. T. (1890): Federal Control of Elections. <i>The Forum</i>, Vol.10, pp.23-36.</p> <p>Powell, J. W. (1890): The Humanities. <i>The Forum</i>, Vol.10, pp.410-422.</p> <p>Shaler, N. S. (1890): The African element in America. <i>The Arena</i>, Vol.2, No.6, pp.660-673.</p> <p>Fortune, T. T. (1890): The Afro-American. <i>The Arena</i>, Vol.3, No.1, pp.115-118.</p> <p>Shaler, N. S. (1890): The peculiarities of the South. <i>The North American Review</i>, Vol.151, No.407, pp.477-488.</p>

Source: *The Arena*, Vol.1 (1889) - Vol.7 (1893); *The Atlantic Monthly*, Vol.1 (1857) - Vol.76 (1895); *The Forum*, Vol. 1 (1886) - Vol. 16 (1893); *The Century Magazine*, Vol. 23 (1881) - Vol. 56 (1898); *The North American Review*, Vol.118(1874) - Vol.163 (1896); *The Scribner's Magazine*, Vol. 8 (1874) - Vol. 18 (1895).

プルが送付した可能性がある。アメリカの主要総合誌6誌 (*The North American Review*、*The Century Magazine*、*The Forum*、*The Arena*、*The Atlantic Monthly*、*The Scribner's Magazine*) 一書簡で言及されるか *Amerika* (1893) で引用された雑誌—に1880年代から書簡の書かれた1893年までに掲載された、黒人問題に関わる論文の一覧を表4に掲げる。当時、黒人問題が高い関心を集めていたことがこの一覧からも伺える。参政権など政治的平等の問題だけでなく、黒人人口増加や教化についても取り上げられている。ケイブルは何編も論文を投稿しているほか、ブライス (James Bryce) など当時のイギリスの知識層を代表するような人物も執筆者となっていることが印象的である。

ラッツェルは、ライプチヒに留学したアメリカ人学生ゲイジ (Frank Wellington Gage) の博士論文 (Gage 1892) の内容も、黒人の混血に関する項で参照している。書簡の文面から、ゲイジとサンプルとラッツェルは相互に面識があったと思われる。

(3) アメリカ人氣質

サンプルの書簡では、西部の人々の類型、東部と西部の境界と人々の気質、さらに grand という言葉が取り上げられている。ラッツェルは、合衆国の文化帯を区分するとともに、ゴールドラッシュ以後、大勢の人々が流入し変化する西部の社会と東部のニューイングランドを対比して捉えている。彼は、ニューイングランドにおけるヨーロッパの文化遺産を誇りを持って賞賛している。

興味深いのは、grand をめぐるサンプルの回答とラッツェルの記述の相違である。サンプルの書簡からすると、ラッツェルの問いは、grand という形容詞の使用頻度や流行、地域差に関するものかと推測される。ところが、ラッツェルは *Amerika* (1893) の中で、この語句を、人目を引くような大規模で表面的な華美を意味する grand、すなわち、壮麗さをアメリカ人氣質の象徴として提示し、ヨーロッパとの違い、とくにアメリカ人の未成熟さを指摘している。ラッツェルの大人の問いに対し、サンプルが子供のように答えたすれ違い感を受ける。地理学者としてすでに大きな名声を得ていたラッツェルと、まだ地理学の勉強を始めたばかりのサンプルとを比較するのは酷であるが、ラッツェルの思考のほうが、サンプルよりはるかに深いことが印象づけられる。なお、サンプルが留学後初めて書き上げたパナマ運河を取り上げた論文の中で、さまざまな列強の進出の痕が残るカリブ海地域の様相を記述した一節に、the grand reaches of our American continent (下線は筆者による) という表現がある (Semple 1894: 54-55)。サンプルが恩師の書 *Amerika* (1893) に目を通した上でこのような表現をしたとすれば、たいへん無防備で無邪気である。

(4) 自然描写の作家たち

ラッツェルは、合衆国の文学者たちが自然をよく取り上げることに言及し、自然を描写するアメリカの詩人や作家のなかで、ソロー (Henry David Thoreau) とロウエル (James Russell Lowell) の二人を傑出した存在と評価し、前者を自然および自然の簡素さを唱道する隠者、後者を完璧な文学者でありアメリカで最も優れたエッセイスト

と述べている。ラッツェルは、サンプルが書き送った『Outdoor World』をテーマとする存命中の作家たちにも触れている。そのうちの一人、C. C. Abbottの綴りは、ラッツェルの表記でもサンプルの綴りと同様、末尾のtが一文字欠けている。ラッツェルはサンプルの書簡をもとに原稿を執筆をしたと思われる。

ラッツェルの関心は、アメリカの文学事情や人気作家が誰かということよりも、自然描写が好まれる背景を自然や風景への愛好と関係づけることに向けられている。彼は、新しい国家の環境に人々が精神的に結びつこうとする感覚をドイツ移民に見だし、イギリス的あるいはスコットランド的風景が規範とされると指摘している。ラッツェルのヨーロッパ至上主義は、こうした記述にもよく現れている。その一方で、風景を地理学の対象として積極的に取り上げるのは、アメリカ合衆国独自の新しい傾向と受け止めている。

(5) オハイオ-エリー運河

サンプルの書簡では、詳しい運河計画が説明されていなかったが、*Amerika* (1893) では、運河の経路や延長距離、幅、建設費用の見積もりなども挙げられている。オハイオの公共事業委員会（Ⅱ章2節、訳注[32]参照）から得られた情報が用いられていると思われる。サンプルは書簡に書いたように、おそらく、同委員会に手紙を送り、その結果をラッツェルに知らせたのではないだろうか。

(6) 国際調査報告

サンプルがラッツェルのために国勢調査報告を入手するいきさつについて、サンプルは後年、ライプチヒの教室での出来事をブジョング (Allen D. Bushong) に次のように語った：ラッツェル先生は、国勢調査報告など、合衆国についての統計情報が必要なのだとおっしゃった。当時は、そうした情報は今日のように豊富でも容易に入手できるものでもなかった。私は、ケンタッキーの家族のつながりを通じて、こうした資料をすぐに入手することができた。大量に届けられた資料はラッツェル先生を驚かせ、また喜ばせた (Bushong 1961: 6)。

ライプチヒで依頼されたのか、あるいはルイヴィルに戻った後に手紙で依頼されたのか、正確ないきさつは定かではないが、一般には入手の難しい統計資料を得るために、サンプルが奔走したことは確かである。この手助けをしたのが、ケンタッキー州

選出の下院議員カールズ氏 (Asher Graham Caruth) や1890年の第11回国勢調査の長官ポーター氏 (Robert P. Porter) である。政府機関で高い地位にあり特別な便宜を回ってくれる人たちと心やすい関係にあることを、サンプルは誇らしくラッツェルに伝えている。

第11回国勢調査は、アメリカ合衆国の国情を知る上でまたとない重要な資料であった。ハッキング (1999: 5) は、近代国家における統計収集の充実を示す例として、アメリカ合衆国の第1回国勢調査と第10回国勢調査を比較し、質問項目は約3千倍、印刷された数字は30万倍にも達したことを挙げているが、第11回国勢調査は、さらに充実したものとなり、最終報告書15巻、短報380冊、統計地図を含むおびただしい出版物が出された。人口や出生・死亡の他、農業、鉱業、工業、保険、輸送、教育など、多様で広範な情報がさまざまなスケールや分類で集計されている。ラッツェルは、執筆段階では短報のNo.352までを入手できたと「序」で述べるとともに、ポーター氏に謝意を表している。

(7) ラッツェルにとってのアメリカ合衆国

ラッツェルが1878年に続いて、アメリカ合衆国に関する著書を再び書こうとしたのは、北米大陸に入ったヨーロッパ移民たちがどのようにその新しい大地に根付いていくか、国家としてどのような成長をとげるか見極めたいという動機があったと思われる。

Amerika (1893: VI-VII)の「序」には、人種政策に関わる問題、とくに黒人問題については、地理学的な説明することによってより明確で理解しやすいものとなることや、ブライスがその大著“*The American Commonwealth*” (1888)のなかで地理的因子を単純化して説明しているとの対抗意識、豊富な統計数値やそれに基づく地図の提示によって地理的な把握が容易になることなどが述べられている。経済的にも政治的にも大きく発展するアメリカ合衆国の状況や国民を十分に理解することが、ドイツにとって大変有益であるといった記述から、脅威までは感じていないが、大きな新興国家の動向に注目し、そこに国家という有機体の発展のプロセスと仕組みを読み取ろうとする意識が伺える。

4. センプル自身の研究の展開—1893年から1903年まで—

センプル自身は、1893年にラッツェル宛てに書簡を書いて以降、どのように自身の研究を展開させていったであろうか。本節では、センプルの研究歴の初期の約10年間に発表されたもののうち、初めての地理学の学術論文 (Semple 1894)、ケンタッキーでのフィールドワークに基いた論文 (Semple 1901)、さらに、最初の著書 (Semple 1903) を取り上げて、1893年の書簡で述べられた彼女の関心が、どのような形にまとまっていったのかをたどることにする。

(1) パナマ運河とアメリカ合衆国

1893年2月19日付けの書簡で、センプルは、カリブ海にとって、2つの海洋をつなぐ運河がどのような意味をもっているか、勉強を始めたところだと書いている。この勉強の成果が、1894年、母校で発行されている *Vassar Miscellany* に発表した初めての学術論文である (Semple 1894)。恩師に告げたことを素直に実践したことが伺える。当時、フランスによるパナマ運河建設はすでに頓挫していたが、合衆国は建設に着手してはいなかった。センプルは、パナマ地峡の自然条件が大変厳しいため、旧世界の技術では運河建設がかなわなかったが、若くて活力のある、大きなスケール感覚を持った国、すなわち、アメリカ合衆国ならば可能であると述べている (Semple 1894: 56-57)。センプルの国際情勢や政治・軍事に対する強い関心のほか、合衆国の海外進出への期待が伺える。

なお、スケール感覚の大きさは、センプルにとってアメリカの典型的な特質の一つであつたらしく、西部の人たちの気質についても、同様の記述をしている (Semple 1903: 243-244)。

(2) フィールドワーク

センプルが1901年に発表した論文 (Semple 1901) は、およそ200年もの間、ケンタッキーの山の中でほとんど孤立状態にあったアングロ・サクソン集団を対象にしたものである。得意な乗馬で350マイル以上の踏査旅行をするなど、丹念な現地調査や詳細な観察に基づいた論文であった。それまで発表した数編の論文 (Semple 1897a, 1897b, 1898, 1899a, 1899b, 1900) がいずれもラッツェルに学んだことに即した内容であつたのに対し、この論文は、フィールドワークを駆使した、全く性格の異なるもので

あった。これは、センプルにとって研究の新しい面を拓いただけでなく、当時のアメリカの人文地理学にとっても新しいものであった。当時、アメリカ地理学界で中心的な立場にいた地形学者のデイヴィス (William Morris Davis) らは、自然地理学同様、人文地理学もフィールドワークに基づく科学として確立しようと強く目指しており、センプルの論文は、待望される研究としてタイミングよく登場したのであった (James et al. 1983: 30-31)。

ただし、この論文の成功は、綿密な参与観察という手法だけでなく、特殊な孤立地域集団を対象に選んだ点にあると指摘されている (Gelfand 1954: 33)。

(3) 人種観

パナマ運河の論文では、センプルの人種観も鮮明に示されている。より低い地位にある人種との混血に対するアングロ・サクソン人の反発を賢明なものとして評価し、アメリカ・インディアンや黒人の社会的排除を肯定している。一方で、ラテン・アメリカにおけるヨーロッパ人とアメリカ・インディアンや黒人との混血による新しいエスニック集団の登場を指摘しているが、その将来には必ずしも楽観的ではない (Semple 1894: 56-57)。

最初の著書のなかでは、彼女の修士論文でも取り上げた奴隷制について、アメリカの土壌と気候の面から論じ、暖かくて湿潤な、人々を消耗させるような気候の沖積谷と肥沃な海岸平野をもつ南部は、奴隷労働に支えられたプランテーションに好適な地理的条件を有すると見なしている。ここでは、奴隷制は、経済的にも倫理的にも適切なものとして是認されている (Semple 1903: 280)。

センプルに強固な人種差別主義的傾向があること、すなわち、その他の人種に比べて、アングロ・サクソン人やドイツ人を卓越して優秀とみなす観点があったことは、ゲルファンド (Lawrence Gelfand) も指摘している (Gelfand 1954: 39)。これがラッツェルの影響なのかセンプル本来のものなのかはともかくとして、19世紀末から20世紀初頭、合衆国の知識層の間でこうした観点が一般的であったことも事実である。もっとも、ラッツェルがドイツ・イギリスなどのヨーロッパ至上主義にたって、新興のアメリカ合衆国を低く見ているのに対し、センプルはヨーロッパの伝統を基礎に発展するアメリカを中心に据え、ラテン系などをより低く見ている。

(4) 進化論的な考え方

センブルは、ラッツェルの国家有機体説の危うさに気づいて避けていると見るむきもあるが (Wanklyn 1961: 32-33)、アメリカの発展の歴史をヨーロッパ文明の要素と関連づけて論じた一節では、国家を生物の進化にたとえており、国家有機体説ととれる記述をしている：胚の中にある一つの国は、人間の胎児と同様、その親世代の段階に進化するまで、より低い発達段階のすべてを急速に経るのである (Semple 1903: 337)。胚の中にある一つの国とはアメリカ合衆国のことであり、親世代の段階とはヨーロッパをさす。植民地時代のアメリカでは、ヨーロッパ文明の諸要素と環境とが成長の大きな因子であったが、広大な野生の自然に対応してやや原始的な生活様式に後退せざるを得ない経験もした。けれども、その経験を通じて、新しい適応の秩序を作り出し、より高度な発展を達成したとセンブルは述べている。ヨーロッパ文明を最良の資産と認めつつも、アメリカ独自の発展プロセスを誇りとするセンブルの自負が伺える。

(5) センブルの研究の特質

センブルの研究の方法論や立場は、ラッツェルの人類地理学の枠組みにおおむね沿うものである。しかもラッツェルの思考よりも範囲が狭かったり浅かったり、幼さすら感じる要素が見受けられる。ラッツェルの方法を大事にしすぎるあまりに、妥当な説明範囲を超えた論の行きすぎもある。また、環境決定論という単純な説明図式が当てはまる現象はそれほど多くはなかったため、センブルはきわめて反証されやすい議論をしていたことも事実である。もっとも、単純化した説明ゆえに、従来あまり注意が払われることの無かった地理的な諸因子が人間社会の歴史に大きな影響を与えていることを、さまざまな社会科学の分野の研究者たちにわかりやすく示すことができたとも言える (Gelfand 1954: 41)。

センブル独自の研究スタイルは、フィールドワークの援用にあったと思われる。この資質は、恩師のためにあちこちの生命保険会社の外務員に聞き取りに出向いたり、知り合いに依頼して、貴重な統計資料を入手しようと奔走したりといったところにも伺える。活発で社交的なセンブル家のお嬢さんが活躍する様子が想像できる。後には、ケンタッキーの山中を馬を乗り回して調査したり、車を駆って西海岸を丹念に踏査している。また、1911-12年には、友人たちと長期の世界旅行に出かける行動力もあ

った。夏には山中にテントを張り、自然の中で一人で過ごす習慣であったという。子供時代からのテニス好き・乗馬好きといったアウトドア派の一面は、大人になってからの生活や研究にも反映されている。ラッツェルの方法論の枠から離れて展開する鍵は、こういった方面にあったかもしれない。

しかし、サンプルは結局、ラッツェルの枠を大きく出ることにはなかった。サンプルの研究が大変精力的ではあったけれど、伸び切れなさを抱えていたのはなぜだろう。これについて、サンプルの周囲にいた人々との関わりという身近な側面と彼女が生きた時代の特徴という側面とから検討してみよう。

5. サンプルをとりまく人々

地理学界以外では、サンプルは身近に接する人たちとどのような関わり合いをもっていたのであろうか。そうした人々も、サンプルの価値観や生き方を方向付ける上で、有形無形に大きな影響を与えていたのではないだろうか。

(1) 家族

サンプルの父は、ボーダー州というケンタッキー州の位置ゆえに南部へも北部へも兵器などの物資を供給し、南北戦争で莫大な利益を上げた兵器商であった (James et al. 1971: Vol.3, 260-262; Bushong 1984; James et al.1983; Garraty and Carnes 1999: Vol.3, 637-638) (図1)。このサンプル家の豊かな財政基盤が後のサンプルの自由な活動を保障することになった。他方、父は家を出て別居し、幼少期 (サンプル8歳) には亡くなってしまった。サンプルの成長にとって、父の築いた財産の由来や家族構成が彼女の心に影を落とすことはなかったのであろうか。

母は、サンプルの表現によれば、子供たちに最高のものを与える一方で、子供たちからも最良の成果を求める人であった (Semple 1903: 献辞)。サンプルと母との絆は終生強かったようであるが、この母と恩師ラッツェルをサンプルは同じ年 (1904) に失う。

兄姉の中では、評伝でも言及される姉パティの存在を見過ごすことはできない。彼女はヴァッサー・カレッジに学んだ後 (1868-71年まで在学)、ルイヴィルに戻り、サンプルもそこで教えることになる学校を開設しただけでなく、1890年には婦人クラブ

を創立し、初代会長となったとされる。組織運営の手腕だけでなく人望も厚かった女性なのであろう。また、同窓生通信には、パティの孫の名前が出てくるところからすると、結婚し子供にも恵まれたと推測される。ルイヴィル社会にしっかり腰を下ろし、名士夫人として活躍する姿が想像される。このパティには、文才もかなりあったらしく、*The Atlantic Monthly*という一流の全国誌に2編の小説を発表している (Semple, P. B. 1887; 1888)。いずれもケンタッキーを舞台にしたものである。ルイヴィル上流社会での交際や姉の学校の手伝いで日々を過ごすサンプルにとって、ヴァッサー・カレッジ卒業後の年月はかなり退屈であったことは想像に難くない。女性の社会的活動に制約の大きかった時代に、それなりの活動成果を挙げつつ、著作が世に出るという快挙も成し遂げ、家庭も持つという姉を、サンプルはどのように見ていたか。姉妹の間の敬愛だけではなく、羨望や焦りといった気持ちがまったくなかったと言えるだろうか。未婚の女性にとって社会的に認められる職業機会が教師の他にそれほど多くはなかった時代に、サンプルが、自分は姉とは別の分野で異なるやり方で自己を確立したい思いを強く持ったとしても不思議ではない。

(2) ルイヴィルの人々

ルイヴィルでの退屈な毎日を刺激する要素が、男女を問わず教養豊かな人々との親しい交流であった (Colby 1933: 231)。サンプルの交友圏にいたのは、ルイヴィルの歴史を作るような役割を担っている上流社会の人々であった。とりわけ、幅広く本を読み知識豊かな二人の弁護士と頭脳明晰なユダヤ教のラビとは頻りに議論を交わし、サンプルは社会問題への関心を高めていった。サンプルの書簡に登場する下院議員や弁護士も、こうした交流の世界のなかにいた人たちであろう。

サンプルは、生涯を通じて幅広い分野の友人たち—上院議員、知事、医者、ビジネスマン、作家、俳優、科学者など—との交流をととても大切にしたり、時間も割いていたとされる (Colby 1933: 237)。こうした社交が苦にならない性格や、同窓生通信でさりげなく著名人との交際を披露するような傾向は、サンプルの生き方を考える上で欠かせない要素かもしれない。各地の講演に招かれ、新聞にもしばしば取り上げられる生活—当時の地理学界の「スーパースター」 (Berman 1974: 8) —は、サンプルにとって楽しめるものではなかったであろうか。

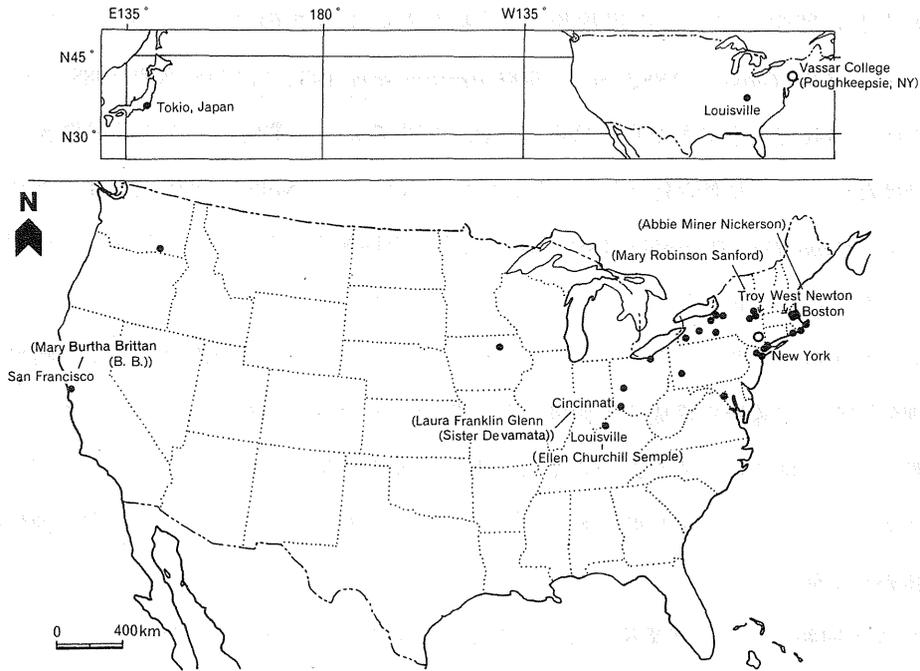


図11 バッサー・カレッジ1882年卒業生の出身地の分布とセンプルの手紙（1924年、1925年）に登場する同級生

Figure 11. Distribution of home towns of Semple's classmates (Class of 1882) of Vassar College, and the names of classmates whom Semple mentioned in her letters of 1924 and 1925.

Note: Thirty nine students graduated from Vassar College in June 1882: New York (14 students), Massachusetts (7), Ohio (4), New Jersey (2), Pennsylvania (2), California (2), Rhode Island (1), Washington, D. C. (1), Michigan (1), Indiana (1), Kentucky (1), Iowa (1), Washington (1), Japan (1). Sutematsu Yamakawa (1860- 1919) came from Tokyo, Japan.

Source: Vassar College graduates. *New York Times*, June 15, 1882.

(3) ヴァッサー・カレッジの同窓生たち

図11に、センプルがヴァッサー・カレッジで共に学んだ1882年のクラスの卒業生39人の出身地の分布を示している。同大学がニューヨーク州ポキプシー（Poughkeepsie）に所在することもあって、同州やマサチューセッツ州をはじめ、東部諸州出身者が大半を占める。2名のサンフランシスコ出身者がいたとはいえ、センプルは、かなり西の方から、そして最も南からヴァッサー・カレッジに入学した学生であった。ルイヴィルは、西部の辺境地帯とはいえないが、合衆国の文化の中心である北東部からは遠く、純粋な南部でもないという位置にある（図1）。同級生たちはいずれも良家の子女であったと思われるが、何と云っても一番注目されたのは、太平洋の向こう側

の東京から留学してきた山川捨松で、「私たちのクラスのプリンセス」であった (*History of the Class of 1882 on the 50th anniversary* 1932: 112-118; 久野 1988)。サンプルは、15歳で入学できた自負はあったはずであるが、卒業時のメダルは最優秀メダルではなかった。大変活発な女の子として皆からネリー (Nellie) と呼ばれ親しまれていても (*Class Day Pamphlet* 1882: 46)、こうした同級生たちのなかで気後れを感じることがなかったであろうか。

サンプルは、生涯にわたって、ヴァッサー・カレッジでうけた教育、とくに物事を論理的に考えて論旨を構成する訓練や作文教育のすばらしさを語っていた。また、少人数のクラスゆえに、またおそらくは名門女子大学卒業生という誇りも手伝って、級友たちとのつながりは終生強いものであったようである。このことは、同窓生通信の記述からも伺える。

39人の同級生たちの卒業後の人生はさまざまであったであろう。社会に出て活躍する人も、家庭に入って静かに暮らす人もいたであろうし、また、恵まれた境遇で過ごした人ばかりではなかったと思われる。けれども、サンプルの同窓生通信、少なくとも1924-25年の通信で触れられている同窓生は、何かの面で目立った人たちである。多いのは、知的な活動に携わり著作を発表している人たちである。西海岸の保養地に別荘を持っている人やビュイックを乗り回す人など、富裕な階層に属する人たちとの親交も目立つ。こうした中であって、異彩を放つのがシスター・デヴァマタ (Sister Devamata) である。インドの宗教に帰依して入信生活を送る女性は、当時のアメリカでも、むしろ、ヴァッサー卒業生のなかでも滅多にない変わり者だったはずである。彼女の信条と俗世に足場をしっかりと置いているサンプルの生き方とはあまりに違って、二人の会話が弾んだようには思われない。

サンプルは、1915年の記念行事 (*The Golden Anniversary of Vassar College*) に、傑出した3人の卒業生の一人として招かれ主講演を行ったことが、ブショングによる情報として記されている (Whittemore 1978)。地理学者として名をなしてからのサンプルは、ヴァッサー・カレッジ同窓会誌でもたびたび取り上げられている (White 1977)。その中には、*New York Evening Post*の記者によるインタビュー記事を収録したものも含まれる。このインタビューでは、サンプルは1911-12年の世界旅行や著書出版などに

について語っている (Miss Ellen Semple and her work, Feb. 1913)。

こうしたヴァッサー・カレッジの同窓生たちとの関わり合い方や母校とのつながりからすると、センプルの生き方には負けん気な要素が少なからずあったように思われる。

(4) シカゴからの手紙の書き手

最後に、センプルの交友の一端を伺わせるシカゴからの手紙 (1893年2月12日付、Ⅱ章2節を参照) を取り上げる。センプルがラッツェル宛ての書簡に同封した、自然描写の作家たちについての手紙の書き手は誰か。保管されている資料には、手紙の末尾の一枚が含まれていない。センプルが送らなかったのか、ラッツェルが無くしたのか、経緯は不明であるが、署名部分が欠落しているため、書き手の名前が特定できない。

書き手を推測する手がかりは5点ある：①The Beatrice, 57th Str.という住所、②1893年2月12日にシカゴにいたこと、③自然をテーマとする英文学の専門家、④当時、アメリカの大きな女子大学で教授をしている、⑤センプルに、Dear Miss Sempleと呼びかける間柄である。

まず、①の住所であるが、これは1892年10月に開学したばかりのシカゴ大学の女子寮である (Ⅱ章2節、訳注[70])。従って、②の条件からすると、学生か教職員か、何らかの資格でシカゴ大学に開学当初から関わりを持っていた女性の可能性が高い。④の条件については、女性の大学教員が極めて少なかったであろうことを踏まえると、プロフェッサーと書簡に記されてはいるが、正規の教授職に限らず、大学で教鞭を執っている人と考えたほうが無難かもしれない。また、⑤の呼び方の問題であるが、極めて親しい間柄であれば、ファーストネームか愛称を書くかもしれない。親友よりは、やや距離のある関係と思われる。だが、単刀直入に用件に入る書き方からすると、それほど疎遠な関係ではなさそうである。さらに、④の条件と合わせると、センプルよりも年長の女性である可能性が高い。

これらすべての条件にほぼ当てはまるのが、ヴァッサー・カレッジの2年先輩のマイラ・レイノルズ (Myra Reynolds) である (James et al. 1971: Vol.3, 139-140)。レイノルズは、1853年、ニューヨーク州に生まれた。1876年、ヴァッサー・カレッジに入学した。23歳の新生入生であった。卒業は1880年、すなわち、1880年のクラスである。

卒業後、数年間、ニューヨーク州のカレッジなどで英語を教えていたが、1884年、母校に呼び戻され、英語教師として1892年まで勤務した。1892年秋、レイノルズは開学したばかりのシカゴ大学大学院に入り、英文学分野で最初の4名のフェローの一人として英文学の勉強を本格的に始めた。以後、レイノルズはシカゴ大学にとどまり、1895年に博士号を取得した後、アシスタントから順に教授までキャリアの階段を上って行く。教授に就任したのは、1911年のことであった。この間、“*The treatment of nature in English poetry between Pope and Wordsworth*” (Reynolds 1909) の他、ヴァッサー・カレッジ開学50周年記念シリーズの一つとして“*The learned lady in English 1650-1760*” (Reynolds 1920) を出版する。1909年の著作は博士論文をもとにしたもので、まさに、自然と文学をテーマにした内容である。1893年初頭にシカゴ大学の女子寮に住んでいた可能性も高い。センプルの同級生マリー・サンフォード (Mary Robinson Sanford) は、卒業時にクラスの歴史を振り返りながら、入学以来、80年のクラスの上級生たちと様々な機会に親しく交流したと述べている (Sanford 1882)。センプルもヴァッサー・カレッジ卒業に際して、催しに先輩を招くとすれば、80年のクラスだと書いている (Semple 1882: 10)。学年は2年違いであるが、センプルとレイノルズの年齢には十歳の開きがある。こうした年の差によって、かえって互いが印象づけられていたかもしれない。また、センプルの姉パティもレイノルズの妹ケイト (Kate) もヴァッサー・カレッジに学び、在学中あるいは卒業後のさまざまな同窓会活動を通じて、2組の姉妹が互いに知り合っていた可能性もある (表2)。

以上の検討から、レイノルズは、上記の①～⑤の条件と矛盾しない人物といえる。ちなみに、17世紀から19世紀前半までのアメリカ女性人名録 (James et al. 1971: Vol.1 and Vol.3) には、英文学者としてレイノルズの他に、Emily Clara Jordan Folger (1858-1936)、Katharine Lee Bates (1859-1929)、Lucy Martin Donnelly (1870-1948)、Edith Rickert (1871-1938)、Alice D. Snyder (1887-1943) の5名が掲載されている。これらの人々も候補として検討してみたが、1893年初頭の所在地の他、世代や専門分野、知り合う機会の有無などから、いずれも該当する可能性が極めて小さいと判断した。よって、本稿では、シカゴからの手紙の書き手はマイラ・レイノルズとして論を進める。

サンプルはラッツェルに宛てて、「わたしの友人で、大きな女子大で教授を務める優秀な人」とレイノルズのことを誇らしげに紹介している。サンプルが修士号を取得した1891年は、レイノルズが母校で教鞭をとっていた1884年から1892年までの間の時期である。在学中に先輩後輩として顔見知りだっただけでなく、卒業後も直接会う機会があったかもしれない。サンプルとレイノルズの人生の軌跡は、その後も重なる部分がある。レイノルズがシカゴ大学に在籍したのは1892-1923年であるが、サンプルは同大学で1906-1924年まで講師を務めている。また、レイノルズは引退後1936年にロサンゼルスで亡くなるまで、カリフォルニアに住まいを移していた。サンプルがカリフォルニアに滞在し、カリフォルニア大学南分校で講師を務めたのは1925年である。互いの交流が続いたことは確認できないが、名門女子大学ゆえの同窓会活動の活発さから推測すると、互いの動静をさまざまな形で知る機会も多かったと思われる。

サンプルにとっては、先輩レイノルズが、遅まきながらも、学問の世界で着実にキャリアを重ね、博士号を得て、大学の中で昇進してゆく様子は、刺激にも励みにもなったであろうし、目標にできる人であったろう。ただ、サンプルは結局、正式の学位を取得する機会は何れも得られなかったし、大学で正規のポストに就任するのはようやく1921年のことである。レイノルズを羨む思いもあったかもしれない。もっとも二人とも教授就任が58歳という遅い年齢は、学問分野における女性の立場が厳しかったことを如実に示している。

6. 科学の大変革

本節と次節では、サンプルの研究と彼女の生きた時代を科学史の流れのなかで捉えてみることにする。

サンプルが生きた19世紀と20世紀における科学史の大きなできごとに、進化論と非決定論的な確率論の登場がある。いずれも、関連するさまざまな学問領域だけでなく、人々の考え方や価値観を根底から揺るがすような影響を社会に及ぼし、今なお議論が続く極めて重要な変革である。この二つの大きな変革に照らしながら、サンプルの研究の位置づけを試みる。

(1) 進化論の登場

生物の進化に関するダーウィンの理論が1859年に出版されると、ヨーロッパの地理学者たちはそれに飛びついた。彼らが了解したのは、有機体は単純な形態からより複雑な形態へと環境因子によって発展してゆくという意味での進化論であった。とりわけ地理学者たちを刺激したのは、進化論のキーワードの一つ「適応adaptation」概念であった。ラッツェルもサンプルもこうした進化論の影響を強く受けている（Gelfand 1954: 30）。

19世紀末から20世紀初頭の地理学にとりわけ深く関わったのは、進化論に関わる議論のなかでも、人類の進化と国家の発展に関する議論であった。

当時、人類の起源とその後の進化については、一祖発生説と多原発生説が対立していた。それぞれさまざまな解釈や立場があるが、後者の多原発生説を唱えるグループの中に、獲得形質の遺伝を唱えるラマルク的な生物学に影響を受け、人種は特定の地形をした地域の環境の産物とみなす立場の人たちがいた。ラッツェルもその一人である。彼は、地表に様々な生物が拡散した後、地理的障壁によって、周辺地域の種族に初期の種（複数）が混じるのが妨げられ、この結果、生物学的多様性が生ずると説明した（Livingstone 1984: 190）。ラッツェルがアメリカで親しくなったハーヴァード大学のアガシ（Ⅱ章2節、訳注[84]参照）も多原発生説論を唱えている（Agassiz 1859）。

ラッツェルの人類の進化についての考え方は、限られた領域内の民族の特性がその領域特性と緊密に結びついており、人間は大地の束縛から逃れ得ないという論につながり、さらに人種差別主義的な議論に展開してゆく（Livingstone 1992: 352-353）。サンプルの人種観もラッツェルのそれと同様である。

ラッツェルは、ラマルク的な環境決定論から生活空間あるいは文化領域の概念を発展させるとともに、有機体の進化概念を国家にあてはめる有機体説を提案した。これら生活空間概念と国家有機体説の両者が結びついて戦略的な面へ応用され、拡大主義的な愛国主義に対する科学的正当性を提供することになった。こうした論理の展開から地政学が生まれたのである（Livingstone 1984: 190）。

けれども、進化論は、本来、人種の等級付けや列強と植民地との間の支配・被支配の関係を正当化するような恣意的な価値付けをなされた議論とは全く無関係なものである。

進化論についてはさまざまな見方ができるが、統計的な分布という観点からすると、次のような説明も可能である。ある種の生物の形質は一定の分布幅のなかで出現する。環境圧力の変化が偶然に発生すると、その環境下で有利な範囲の形質をもった集団が残り、不利な範囲の形質をもった集団は消滅する。これが適応と淘汰である。残った集団が同じ環境下で、また、別の集団との混合がない状態で、世代交代を重ねると、次第に当該形質の出現する分布幅の中央値が当初の中央値から移行する。ある閾値を超えて移行が進むと、別の種が誕生する。

サンプルやラツツェルの考え方の本質的な部分には、進化論に含まれる偶然や統計的分布、ばらつきといった概念はほとんど関わっていない。しかしながら、こうした諸概念は、決定論から非決定論へというもう一つの科学的思考の転換にも深く関わっている。

(2) 決定論から非決定論へ

将来の出来事は過去において厳密に決定されているという因果律が否定され、「この世界は決定論的ではない」という発見がなされたことが、20世紀物理学最大の出来事である。ハッキング (Ian Hacking) は、実は、19世紀にはすでにこの変革につながる緩やかな動きがあったと主張している (ハッキング 1999)。この緩やかな動きの一つは、「世界は秩序だっているけれど、普遍的な自然法則に従っているわけではない」という考え方が有力になっていたことであり、もう一つは、印刷された数字 (統計情報) が大量に出版され、人間社会の統計的な研究が進んだことである。これら二つの変化は、自然科学にも社会にも重要な意味をもっていた。

前者は、決定論の浸食の始まりを意味するし、後者は、分布における正規性や標準偏差の概念や確率による法則の表現を含んでいる。

因果律ではないけれども法則に似た規則性が発見されるきっかけの一つが出生・死亡のデータであり、このデータの収集に直接関わるのが、国勢調査の実施である。国勢調査による大量のデータの出版には、精密に集計し分類する新しい技術と、それを行使し、管理する権限を持った近代的な官僚の存在を必要としたし、産業革命の進行も背景にある。

他方、非決定論の考え方を理解し受け入れる側からすると、非決定論の前提として、

母集団を適切に代表する標本抽出という考え方がまず必要である。これには、思考の技術、つまり推論のスタイル全体の大きな進化が不可欠である。加えて、非決定性が優勢になるほど制御可能性が高まる、あるいは、自然はその根底では決定論に還元されえず確率的stochasticである、といった、いわば「不確定なほうがより確かなのである」という逆説的に響く言葉を直感的・本質的に理解するのは、因果律を理解するよりもはるかに難しい。

19世紀後半から20世紀にかけての科学史における進化論ならびに非決定論の登場という流れに照らすと、ラッツェルおよびセンプルの思考や方法論はいかにも古い。二人とも、科学的なスタイルをとろうとしてはいるが、彼らが組み立てている論理は、神学的な世界観に基づいた固定的な因果律を用いて現世の秩序を肯定するものである。当時の新しい理論であった進化論を援用したかもしれないが、断片的かつ恣意的な利用に過ぎなかった。結局のところ、彼らの議論は、政治・社会の分野で支配層であった白人や欧米諸国の立場を守るための学術的な体裁をとった言説として機能するにとどまっていたのである。ただし、ラッツェルやセンプルの考え方は、当時の欧米の学者たちの中で、ごく少数の例外的なものではなかった。このことを次節でとりあげる。

7. シェイラーとセンプルとラッツェル

最後に、センプルの生きた19世紀後半から20世紀初頭の時期、つまり、社会も科学も共に関連しながら大きく急激に揺れ動いた時代の典型とされる一人の学者を取り上げ、センプルとラッツェルとの共通項を探ることにしたい。これにより、センプルの生きた時代と彼女の研究の意味をより明確に捉えたい。

(1) シェイラーとセンプルのつながり

1903年、センプルの著書が出版されたのと同じ年に、同じくアメリカの歴史と地理的条件の関係をテーマにした本 (Brigham 1903) が出版されている。それぞれの出版社同士で出版直前にタイトルの調整が行われたほどよく似た主題を扱っている (James et al. 1983: 32)。彼らの本が出されるよりもずっと以前から、アメリカ合衆国における環境と人間の関係を熱心に論じていたのが、ハーヴァード大学のシェイラー (Nathaniel Southgate Shaler) であった (Shaler 1891)。

サンプルの著書とブリガム (Albert Perry Brigham) の著書を比べると、前者がより歴史に重点をおいて記述しているのに対し、後者は自然をより重視した記述である。また、ブリガムは、シェイラーの考え方を数カ所で引用してはいるが、“*Nature and man in America*” (Shaler 1891) は引用していない (Bladen 1983: 23-24)。これに対して、サンプルは同書を含めてシェイラーの3冊の著作 (Shaler 1885, 1891, 1894) を挙げ、頻繁に引用している。サンプルとブリガムとシェイラーの間には、直接的かどうかは確認できないが、相互に連なる人間関係がある。すなわち、ブリガムの師は地質学者のデイヴィスであり、デイヴィスはシェイラーの初期の弟子である。シェイラーは、サンプルの師ラツェルの友人アガシの弟子であり、サンプルと同じケンタッキー州生まれである。人間関係からみれば、ブリガムのほうがサンプルよりもシェイラーに近いにもかかわらず、サンプルがはるかによくシェイラーを引用しているのはなぜか。この点について、シェイラーの考え方や主張の内容から、検討してみよう。

シェイラーは、1841年、ケンタッキー州ニューポート (Newport) 生まれの地質学者である。父は外科医、母はヴァージニア州の有数の奴隷所有を誇る家庭の出身であった。1864年から1906年まで42年間に渡ってハーヴァード大学に在職し、師であったアガシの後を継いで教授に就いた。生涯を通じて精力的に執筆し、多数の著書・論文を発表している (Bladen 1983; Garraty and Carnes 1999: Vol. 19, 707-708; Shaler and Shaler 1909)。ケンタッキー州から依頼されて地質調査 (1873-1880年) のフィールドワークを行ったこともある。彼は、環境と人間の関係に強い関心を持ち、地質学よりもむしろ人文地理学に近い研究も少なくない (Bladen 1983)。他方、社会問題や政治問題にも積極的に発言し、とりわけ19世紀の後半には、彼はそうした方面の活動にかなりのエネルギーを向けていた。

シェイラーが精力的に行なったのは、当時の生物学や人類学、歴史学、地理学の諸理論の融合に基づいた、黒人やユダヤ人、アメリカ・インディアンおよびヨーロッパ農民についての学際的な分析であり、彼は、人種差別的なものの考え方を科学的に涵養する上で大きな役割を果たすことになった。彼だけがそうであったわけではない。シェイラーは、世紀の変わり目の時期におけるアメリカ東部の時代精神を体現する、そしておそらく最も目立つ科学者の一人だったのである (Livingstone 1984)。

(2) アメリカ史に対するシェイラーの見方

シェイラーは、進化論に関しては、ラマルク的な立場をとっており、有機体は意識的に自身を環境条件に適応させ、その構造もしくは行動における何らかの変更を子孫に伝えうると強調した。また、彼は、人類の身体的形状は、そういった進化のプロセスの産物である一方で、知的な獲得物によって人類は自然淘汰の範囲外におかれることになるとも信じていた。

彼は、こうした進化論的な見方をアメリカ史に適用した。つまり、文明の発生に必要な地形条件を欠くけれども、ヨーロッパで進化した人種特性が広まるのに最良の環境である北米大陸に入植したチュートン系人種は、その生物としての歴史ならびに社会の歴史を通じて、アメリカの環境特性を活用することのできる資質を備えることに至っていたと結論づけたのである (Livingstone 1984: 189-190)。こうしたシェイラーの観点は、明らかにラッツェルの人類地理学の考えに極めて近い。また、手法の点でも、“*Antropo-Geographie*” (1891) と “*Man and nature in America*” (1885) の類似性は早くから指摘されている (Ripley 1894: 323)。ラッツェルの考え方や方法論を継承したセンブルのそれがシェイラーによく似ているのは不思議ではない。

(3) シェイラーの人種観

シェイラーは、人権と市民権の平等ならびにキリスト教という現代文明にまで進歩したのは白人人種だけで、黒人は、進化の最終段階まで完全に達していない、知的にも倫理的にも劣る別の人種と考えていた (Livingstone 1984)。黒人が進化をとげるには、白人の指導のもとに、白人の優れた文化や家族制度を学ぶ必要があるし、そのためには教育（ただし、高次の学問ではなくて、実学）が有用と見ていた。また、アメリカの奴隷制については、最終的には容認され得ないものであるけれども、黒人を文明に引き上げるために必要なものであったと意義を認めている。表4には、シェイラーの執筆した黒人問題の論文が5編含まれていることから伺えるように、彼は、人種問題について活発に発言を行っていた。

このようなシェイラーの人種観は、ラッツェルやセンブルらにもほぼ共通する。

(4) 金びか時代の学者たち

今日のシェイラー評価の中には、19世紀後期、アメリカの金びか時代のニューイン

グランドにおける、科学と人種とイデオロギーの関係を典型的に体現した研究者であるといった厳しい見方もある (Livingstone 1984)。Ⅲ章 2 節 (4) でも言及したように、動乱の時代にあつて、社会の上流層の中には、伝統的な価値と秩序に執着する立場の人たちが決して少なくはなかった。シェイラーは、学問という権威のもとに、昔ながらの秩序をもった認識上の世界像を作りろうとしていたと言える (Livingstone 1984: 204)。彼が、保守的な立場の人々の間で強く支持され、もてはやされたのは、「需要を満たした」からであつたらう。

こうしたシェイラーの側面は、ラッツェルとサンプルにも同様に見られる。人種についても、海外への拡大についても、彼らは、この時代に望まれることを、おそらくは自らも正しいと確信して、主張した学者たちであつたと言えよう。

サンプルは、Ⅲ章 5 節 (2) でも触れたように、地理学者として名を知られるようになってからは、さまざまな大学で講師を勤めるほか、各地で講演に招かれ、新聞にもたびたび取り上げられている。ヴァッサー・カレッジの図書館にはそうした記事が多数保存されている。サンプルは、多彩で雄弁で文学性の高い散文スタイルで文章を書き、学者としては芸術の域に達しているとも評されている (Colby 1933: 238; Gelfand 1954: 41; Bushong 1984: 91)。また、彼女の講義は、ユーモアに満ち、想像力を喚起する魅力的なものだつたとされている (Bushong 1961: 13)。アメリカ地理学協会の会長に選出されたことや、サンプルの行動力や活動からすると、人見知りしない社交的な性格でもあつたようである。地理的な環境因子が人間の歴史に大きな役割を果たすことを強調した明快な話、人をそらさぬ上手な話し方、裕福な上流階級の高い教養を備えた女性、これらは、いずれも、多くの人々に好ましく受け取られる要素であろう。地位も肩書きも業績量も比べものにならないほど違うが、サンプルに対しては、ハーヴァード大学の有名教授シェイラーの女性版といった見方がされていたかもしれない。

今日、ラッツェルはその地理学研究の多面性もあつて、今なお研究される対象であり続けている。けれども、サンプルが地理学史の中でそれほど重要な位置を与えられていないのは、本稿の冒頭で述べたとおりである。また、現在の地質学の分野では、シェイラーの研究業績はほとんど顧みられておらず、生前と死後とで評価が大きく逆転した人と見なされている。シェイラー、サンプルともに、時代が移り、社会情勢が

変わり、科学の考え方も大きく変革してゆく流れのなかで、比較的短期間で存在意義が薄らいってしまった学者と言えよう。シェイラーの活躍時期は金ぴか時代に重なるが、センプルは遅れて19世紀末頃、しかも30歳代に入ってから登場している。センプルが輝ける時期はより短かったであろう。

センプルが学問研究を生涯の目標とし、それを実践できたのも、女性も高等教育を受ける機会が得られるようになり、研究の場に参加できるようになった時代であったからこそである。博士号が得られなかったり、正規の教授職になかなか就けなかったり、教授になっても男性教授より給与が低かったり (Berman 1984)、さまざまな困難や苦しい思いはあったであろうが、それでも、センプルが地理学者として生き抜いていった意義は大きい。ただ、もう一歩先に進めなかったことが惜しまれる。センプルがラッツェル宛て書簡の話題にしている国勢調査も生命保険も、極めて近代的なシステムである。それらはまさに、統計的な規則性や確率の概念を含むものである。固定的な因果律である決定論から非決定性の理論へ転換する上での手がかりとなる素材を手にしつつ、その価値に気づいていない。もっとも、これを彼女一人の限界とは見なせないであろう (Ackerman 1961)。科学的な思考の大きな転換には、科学者の集団全体、ならびに、それをとりまく社会全体の緩やかな変化が欠かせないからである。

センプルは、自らの研究のモットーを、‘Dawinian in method and Hellenic in form’ と述べている (Miss Ellen Semple and her work Feb. 1913: 301)。科学的な方法論をめざしてはいたが、進化論の議論の本質には到達しえなかったセンプルが、結局は、諸科学の進展から取り残され、歴史の遺物となっていったとすると、この彼女の言葉が哀しく響く。

IV おわりに

本稿では、19世紀末および20世紀初頭にかけてセンプルが書いた2つの資料を検討することによって、センプルの地理学研究と彼女の生きた時代との関わりを探った。

本稿での検討を通じて、従来はラッツェルのセンプルへの影響の面だけが取り上げられていたが、センプルが書き送った情報や、届けた国勢調査や雑誌論文などの資料が、ラッツェルの著書 *Amerika* (1893) に活用されていることが明らかになった。セン

プルが恩師のために手を尽くして情報収集や資料獲得に動いたことが報われている。他方、センプルが書簡で告げたパナマ運河への関心は、彼女の最初の論文に結実している。ライプチヒ留学を機に、地理学研究に邁進し業績を積んでいった様子は、その後の研究成果だけでなく、ヴァッサー・カレッジの同窓生通信として書いた文章からも伺える。こうしたセンプルの生き方には、同窓生たちとの交流や家族との関係、さらに故郷ルイヴィルでの生活がかなり影響を与えていたであろうことも推測できた。センプルが地理学を志し、地理学者として地位を築いてゆけたのは、それが困難ではあったけれども可能な時代になっていたこと、つまり、資本主義社会の成熟の中で、女性が社会進出する環境が少しずつ整っていったことが大きい。19世紀後半から20世紀初頭における社会と科学という側面から、ラッツェルとセンプル、さらに当時のニューイングランドで活躍したシェイラーを比較検討すると、環境決定論的な説明であれ、人種観であれ、3人とも、当時の保守的な時代精神に応えた学者たちであった点で共通する。だが、彼らは、その時代と社会に極めてよく適応したがゆえに、その後の科学史や時代の大きな変化から急速に取り残されることにもなっている。

本稿では、センプルが研究を始めたばかりの時期に焦点をあてたため、その後半生における研究の詳細については触れていない。また、センプルの日本研究や植民地研究がどのような視点と思想に基づくものであったか、アメリカと日本の関係やラッツェルの日本観との比較を通じて検討する課題も残っている。これらも含めて、近代という時代のなかでの地理学者ならびに地理学研究の在り方をさらに探ってゆくこととしたい。

[謝辞]

本稿で用いた資料は、Geographische Zentralbibliothek, Archiv für Geographie, Institut für Länderkunde, LeipzigならびにArchives and Special Collections, Vassar College Libraryが所蔵するものである。両機関から使用許可をいただいた。これらの資料をライプチヒとヴァッサーで見つけることができたそもそのきっかけをつくって下さったのは、應地利明先生（現、立命館大学）である。先生にセンプルと大山捨松が同カレッジの同級生であることを教えて頂き、ドイツおよびアメリカで在外研究を行う機会を得た1993年および1994年に、二人の関係やセンプルの日本観を知る資料、またセンプルとラッツェルの間で交わされた書簡などを探しに行った。本稿の執筆に際し、庄垣内正弘先生（現、京都産業大学）には、テキスト解説を含めて刺激なご教示

をいただいた。服部勇先生（福井大学）には、地質学研究における進化論やアガシについて丁寧に教えて頂いた。また、小野澤透先生（京都大学文学研究科）には、生命保険に関するアメリカ州法の検索方法やパナマ運河建設をめぐる状況について貴重なご教示を得た。また、Dean M. Rogers氏（Special Collections, Vassar Collge Library）には、卒業・在学記録について情報をいただいた。記して御礼申し上げる。

[引用文献]（Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ章）

- 貴堂嘉之（2005）：未完の革命と「アメリカ人」の境界—南北戦争の戦後50年論—。川島正樹編『アメリカニズムと「人種」』名古屋大学出版会、113-139頁。
- 久野明子（1988）：『鹿鳴館の貴婦人大山捨松』中央公論社。
- J. O. スタルソン。明治生命訳・安井信夫監訳（1981）：『アメリカにおける生命保険マーケティング発達史（上）』明治生命100周年記念刊行会。
- 田中和子（1996）：フリードリッヒ・ラッツェルの日本論。人文地理48、321-340頁。
- 田中和子（2000）：フリードリッヒ・ラッツェルの日本に関する講義ノートの独和対訳一覧—ライプチヒ地誌学協会ラッツェル文庫所蔵の手稿と資料—。福井大学教育地域科学部紀要第Ⅲ部56、33-80頁。
- イアン・ハッキング。石原英樹・重田園江訳（1999）：『偶然を飼いならす』木鐸社（Hacking, I.（1990）： *The taming of chance*. London: Cambridge University Press.）。
- ジョン・ホープ・フランクリン。井出・木内・猿谷・中川訳（1978）：『アメリカ黒人の歴史—奴隷から自由へ—』研究社出版。（拡大された人種闘争、303-331頁）。
- 松永俊男（1996）：『ダーヴィンの時代：科学と宗教』名古屋大学出版会。
- 山野正彦・松本博之訳（1983）：『ラッツェルの人類地理学—その課題と思想—』地人書房、231-248頁。
- フリードリッヒ・ラッツェル。由比濱省吾訳（2006）：『人類地理学』古今書院。
- Ackerman, E. A. (1961): Some concepts of Ellen Churchill Semple: their meaning today. Unpublished paper presented at the fifty-seventh annual meeting of the Association of American Geographers, East Lansing, Michigan, 30 August, 1961.
- Adams, E. (2007): The handmaiden of history?: Ellen Churchill Semple and American geography. Unpublished paper at Annual Meeting of the Association of American Geographers: Ellen Churchill Semple reconsidered, 17-21 April 2007, San Francisco.
- Agassiz, L. (1859): *An essay on classification*. London: Longman.
- Barton, T. F. and Karan, P. P. (1992): *Leaders in American geography*, Vol.1. Mesilla, New Mexico: New Mexico Geographical Society, pp.78-83.
- Berman, M. (1974): Sex discrimination and geography: the case of Ellen Churchill Semple. *The Professional Geographer*, Vol.26, pp.8-11.
- Bingham, M. T. (1932): Ellen Churchill Semple, geographer. *Vassar Quarterly*, Vol. 60, pp. 237-240.
- Bladen, W. A. (1983): Nathaniel Southgate Shaler and early American geography. in Bladen, W. A. and Karan, P. P. eds.: *The evolution of geographic thought in America: a Kentucky root*. Dubuque, Iowa: Kendall/Hunt, pp.13-27.
- Bryce, J. (1888): *The American Commonwealth*. New York: Macmillan.
- Brigham, A. P. (1903): *Geographic influences in American history*. Boston: Ginn & Co.

- Bushong, A. D. (1961) : Ellen Churchill Semple, the great lady of American geography. Unpublished paper presented at the fifty-seventh annual meeting of the Association of American Geographers, East Lansing, Michigan, 30 August 1961, 14p.
- Bushong, A. D. (1984) : Ellen Churchill Semple 1863 - 1932. *Geographers Biographies Studies*, Vol.8, pp.87-94.
- Büttikofer, J. (1890) : *Reisebilder aus Liberia : Resultate geographischer, naturwissenschaftlicher und ethnographischer untersuchungen Während der Jahre 1879-1882 und 1886-1887*. Bd.1-2. Leiden: E. J. Brill.
- Cable, G. W. (1885) : The Freedman's case in equity. *The Century Magazine*, Vol.29, No.3, pp.409-418.
- Class Day Pamphlet* (1882) . Cass Box 1881 & 1882, Vassar College Library.
- Colby, C. C. (1933) : Ellen Churchill Semple. *Annals of the Association of American Geographers*, Vol.23, pp.229-240.
- College Notes (1882) : *Vassar Miscellany*, Vol.11, No.7, p.374.
- Dickinson, R. E. (1969) : *The makers of modern geography*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Dudley, T. U. (1885) : How shall we help the Negro? *The Century Magazine*, Vol.30, No.2, pp.273-280.
- Gage, F. W. (1892) : *The Negro problem in the United States. Its rise, development and solution*. Reprinted by Negro Universities Press, 1971.
- Garraty, J. A. and Carnes M. C. (1999) : *American national biography*, Vol.19. New York: Oxford University Press, pp.636-638, pp.707-708.
- Gelfand, L. (1954) : Ellen Churchill Semple: her geographical approach to American history. *Journal of Geography*, Vol. 53, pp.30-41.
- Grady, H. W. (1885) : In plain Black and White: a reply to Mr. Cable. *The Century Magazine*, Vol.29, No.6, pp.909-917.
- History of the Class of 1882 on the 50th anniversary* (1932) : Sutematsu Yamakawa Oyama, pp.112-118; Ellen Semple, pp.128-137. Vassar College Library.
- Hoffman, F. L. (1892) : Vital statistics of the Negro. *The Arena*, Vol.5, No.5, pp.529-542.
- James, E. T. et al. eds. (1971) : *Notable American women 1607-1950: a biographical dictionary*, Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard University Press, Vol.1: pp.114-115, pp.499-500, pp.637-638; Vol.3: pp.139-140, pp.156-157, pp.260-262, pp.323-324.
- James, P. E., Bladen, W. A. and Karan, P. P. (1983) : Ellen Churchill Semple and the development of a research paradigm. in Bladen, W. A. and Karan, P. P. eds. : *The evolution of geographic thought in America: a Kentucky root*. Dubuque, Iowa: Kendall/Hunt, pp.29-57.
- Karan, P. P. (2007) : Ellen Churchill Semple and Japan. Unpublished paper at Annual Meeting of the Association of American Geographers: Ellen Churchill Semple reconsidered, 17-21 April 2007, San Francisco.
- Keighren, I. M. (2007) : The "bogey-lady of a slightly silly concept": rethinking the legacy of Ellen Churchill Semple, 13p. Presented at Annual Meeting of the Association of American Geographers: Ellen Churchill Semple reconsidered, 17-21 April 2007, San Francisco.
- Klein, M. (1972) : *History of the Louisville & Nashville Railroad*. New York: Macmillan.

- Livingstone, D. N. (1984) : Science and society: Nathaniel S. Shaler and racial ideology. *Transactions, Institute of British Geographers*, Vol.9, pp.181-210.
- Livingstone, D. N. (1992) : *The geographical tradition: episodes in the history of a contested enterprise*. Oxford: Blackwell.
- Mayo, A. D. (1890) : The progress of the Negro. *The Forum*, Vol.10, pp.335-345.
- Miss Ellen Semple and her work. *Vassar Miscellany*, Feb. 1913, pp.300-305. (Miss Ellen Semple's Achievements, *New York Evening Post*, for Nov. 9th, 1912. Interviewed by Clara T. McChesney)
- Mott, F. L. (1957) : *A history of American magazines 1885-1905*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- National Association for the Advancement of Colored People (1919) : *Thirty years of lynching in the United States, 1889-1918*. New York: National Association for the Advancement of Colored People, APPENDIX II: Chronological List of Persons Lynched in United States, 1889 to 1918, inclusive, arranged by States.
- Newcomer, M. (1959) : *A century of higher education for American women*. New York: Harper & Brothers Publishers.
- Ratzel, F. (1878) : *Die Vereinigten Staaten von Amerika, Erster Band. Physikalische Geographie und Naturcharakter*. München: R. Oldenbourg.
- Ratzel, F. (1891) : *Anthropo-geographie. 2. teil: Die geographische Verbreitung des Menschen*. Stuttgart: Engelhorn.
- Ratzel, F. (1892) : Zur Beurteilung der Neger. *Die Grenzboten*, 51. Jahrgang, Nr.1, S.20-24.
- Ratzel, F. (1893) : *Die Vereinigten Staaten von Amerika, Zweiter Band. Politische und Wirtschafts-Geographie*. München: R. Oldenbourg.
- Reynolds, M. (1909) : *The treatment of nature in English poetry between Pope and Wordsworth*. Chicago: Chicago University Press.
- Reynolds, M (1920) : *The learned lady in England 1650-1760*. (Published in Honor of the Fiftieth Anniversary of the Founding of Vassar College 1865-1915). Gloucester, Mass.: P. Smith.
- Ripley, W. Z. (1894) : Anthropo-Geographie von Friedrich Ratzel, Vol.II. *Political Science Quarterly*, Vol.9, pp.321-324.
- Sanford, M. R. (1882) : History of all the doings of the class of '82. *Class Day Pamphlets '82*, pp.21-37. Class Box 1881 & 1882. Vassar College Library.
- Sauer, C. (1934) : Semple, Ellen Churchill. In Seligman, E. R. A. and Johnson, A. (1934) : *Encyclopedia of the social sciences*, Vol.13. New York: Macmillan, pp.661-662.
- Scheiber, H. N. (1969) : *Ohio canal era: a case study of government and the economy, 1820 - 1861*. Athens: Ohio University Press.
- Semple, E. C. (1882) : History. *History, poem-prophecy*. Class Box 1881 & 1882, Vassar College Library, pp.3-10.
- Semple, E. C. (1894) : The American mediterranean and the interoceanic canal. *Vassar Miscellany*, Vol.24, pp.54-64.
- Semple, E. C. (1897a) : The influence of the Appalachian barrier upon colonial history. *Journal of School Geography*, Vol.1, pp.33-41.
- Semple, E. C. (1897b) : Some geographic causes determining the location to their environment.

- Journal of School Geography*, Vol.1, pp.225-231.
- Semple, E. C. (1898) : The Indians of Southeastern Alaska in relation to their environment. *Journal of School Geography*, Vol.2, pp.206-215.
- Semple, E. C. (1899a) : A comparative study of the Atlantic and Pacific Oceans. *Journal of School Geography*, Vol.3, pp.121-129, 172-180.
- Semple, E. C. (1899b) : The development of the Hans towns in relation to their geographical environment. *Bull. Am. Geogr. Soc.*, Vol.31, pp.236-255.
- Semple, E. C. (1900) : Louisville, a study in economic geography. *Journal of School Geography*, Vol.4, pp.361-370.
- Semple, E. C. (1901) : The Anglo-Saxons of the Kentucky mountains: a study in anthropogeography. *Geographical Journal*, Vol.17, pp.588-623.
- Semple, E. C. (1903) : *American history and its geographic conditions*, New York: Houghton Mifflin Co.
- Semple, E. C. (1911) : *Influences of geographic environment: on the basis of Ratzel's system of anthropo-geography*. New York: Henry Holt and Co.
- Semple, E. C. (1931) : *The geography of the Mediterranean region: its relation to ancient history*. New York: Henry Holt and Co.
- Semple, P. B. (1887) : An old Kentucky home. *The Atlantic Monthly*, Vol.60, No.357, pp.32-43.
- Semple, P. B. (1888) : In a border state. *The Atlantic Monthly*, Vol.62, No.372, pp.464-482.
- Shaler, N. S. (1885) : *Kentucky: a pioneer commonwealth*. New York: Houghton, Mifflin, and Co.
- Shaler, N. S. (1891) : *Nature and man in America*. New York: C. Scribner's sons.
- Shaler, N. S. ed. (1894) : *The United States of America; a study of the American commonwealth, its natural resources, people, industries, manufactures, commerce, and its work in literature, science, education, and self-government*. New York: D. Appleton and Co.
- Shaler, N. S. and Shaler S. P. (1909) : *The autobiography of Nathaniel Southgate Shaler with a supplementary memoir by his wife*. New York: Houghton and Mifflin Co.
- Tebbel, J. and Zuckerman, M. E. (1991) : *The magazine in America 1741-1990*. New York: Oxford University Press.
- White, C. L. (1977) : Ellen Churchill Semple '82: the dean of American Geographers. *Vassar Quarterly*, 1977 fall, pp.49-50.
- Whittemore, K. T. (1978) : Women 'suited' for anthropogeography. *Vassar Quarterly*, 1978 fall, p.72.
- Walker, F. A. (1891) : The colored race in the United States. *The Forum*, Vol.11, pp.501-509.
- Wanklyn, H. (1961) : *Friedrich Ratzel: a biographical memoir and bibliography*. London: Cambridge University Press.

Abstract

Ellen Churchill Semple and her geographical work in the “Gilded Age”
: with the examination of her letters to Friedrich Ratzel
and classmate-chronicles of Vassar College

Kazuko Tanaka

This article consists of two parts: the first part presents the two kinds of manuscripts written by Ellen Churchill Semple, a pioneer female geographers in the late 19th to early 20th century, who are known as an American follower and introducer of Friedrich Ratzel’s environmentalism and methodology of anthropogeography. She wrote letters to Ratzel at the beginning of 1893, when she had just returned to the United States after her overseas study at his department of Leipzig University. These letters are retained in Geographische Zentralbibliothek, Archiv für Geographie, Institut für Länderkunde, Leipzig. Semple had close friendship with her classmates at Vassar College, and constantly sent them her chronicles. They are retained in Special Collections, Vassar College Library. Her classmate-chronicles written in 1902, 1924 and 1925 are analyzed in this article. The German and English texts in print and their Japanese translation and notes by the author are presented.

In the second part, by examining of the materials in detail, the following subjects are analyzed: the relationship between Semple and Ratzel, Semple’s life and career, and the American social characteristics in the “Gilded Age” when she lived. The article makes it clear that: (1) their relationship was not one-way but tow-way. Ratzel advised and encouraged Semple to write geographical articles. She sent Ratzel numerous reports and bulletins of 1890 Eleventh Census, magazine-articles, and wrote the American situation of Negro problems and literature of outdoor-world, and so on. Ratzel used the information in his *Amerika* (1893). (2) In Louisville, Kentucky, her home town, Semple lived with her mother and sisters, and had many upper-class educated friends. Her friendship with the classmates and alumni of Vassar College was so intimate and continued through her life. Patty, her older sister, and Myra Reynolds who was her senior by two years at Vassar and a professor of Chicago University, are supposed to have greatly influenced on Semple’s life and academic career. (3) In the Gilded Age, industries were developed rapidly, American society changed drastically, and attempts for expansion of territory and race problems became more serious. Some scholars underpinned the conservative New Englanders by presenting scientific interpretation of racism and imperialism. They tended to compile their ideology depending fragmentarily on contemporaneous Darwinian, anthropological, historical, and geographical theories. One of the most outstanding scholar was Nathaniel Southgate Shaler, Professor of geology of Harvard University, who stressed the relationship between nature and mankind. Shaler’s ideas were similar to Ratzel’s. Just as they were, Semple might be a typical and popular scholar in her era.

1224. North Adams,
Seaside, Kentucky.

January 2, 1893.
165/72

Professor John Ratzel,
19
Dear Mr. Ratzel -
I am glad to hear
from you and see the progress
of the geological survey,
and the fact that you
will be in the field. These
observations are very
valuable and I am
glad to hear that you
will be in the field.
I am glad to hear that
you will be in the field.
I am glad to hear that
you will be in the field.

写真1 センプルからラツツェルに宛てた書簡 (1893年1月2日付け)
Photo 1. Semple's letter to Ratzel, dated January 2 1893.

(田中和子：エレン・チャーチル・センプルの生きた時代と彼女の地理学研究)

E. Sample
Carmel by
the Sea, Cal.
Aug 18/25

Dear Girls: Summer finds me in lovely Carmel Highlands, a region of bold rocky coast, tall headlands built up on arches of sea caves and thrust out to meet the dash of the waves. It is the sort of coast that Euripides loved; and the sea birds crying high above the roar of the surf are as vivid here as in his lyrics. I came to Cal. the end of January to work on my book and rest a bit; but the Southern Branch of the U. of C. located in Los Angeles, prevailed on me to give a course of lectures on the Mediterranean Region, so that my program eventually contained more work than rest. Also I met many delightful people, among them Mary Pickford and Douglas Fairbanks. Mary is very much of a personality, let me tell you. I came up to the Highlands the middle of June, and have spent the summer with Elig. Tompkins, who used to be at V.C. as a Freshman in our time. He has a cottage high up on the mountain above the sea, and here I have worked at my book all summer, in a beneficent quiet with no telephone within a quarter of a mile. I take my meals at the Inn, and there meet a variety of people. Recently I had an interesting talk with Dr. Merriam, Director of the Carnegie Research Foundation in Washington. He has started a survey of the whole question of earthquakes on the Pacific slope, mapping of the countless faults or earthquake rifts in the region, and the distribution of a new type of instrument which daily measures the strain on the earth's crust along one of these faults, and which indicates when an earthquake is imminent. He had been down at Santa Barbara and the neighboring region, where he found the dam of a city reservoir built right across a fault-line. Of course it broke when the recent shake came. I toured extensively thro Southern Cal. and there I found an irrigation dam, 150 ft. high, located within 200 yds. of the great San Andreas fault which shook along all its 700 miles length in 1906.

写真2 センプルからの同窓生通信 (1925年8月18日付け)
Photo 2. Sample's classmate-chronicle dated August 18 1925.

(田中和子: エレン・チャーナル・センプルの生きた時代と彼女の地理学研究)